
とある騎士【ナイト】の黄金鉄塊【メイン盾】

黒糖パン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある騎士【ナイト】の黄金鉄塊【メイン盾】

【Nコード】

N9498V

【作者名】

黒糖パン

【あらすじ】

俺はLSメンバーとキングベヒんもスを狩るに行く集合時間に遅れてしまったんだが何いきなりPOPしてきたくぐ光 に包まれると学園都市という新MAP？にとばされてしまった感これ絶対不具合だろ：

俺はネガネガするくらいなら帰る方法を探すだろうな

hai！初投稿でうs！

ブロントさんととある魔術の禁書目録のクロスとなっています

作者の妄想がほとんどなので過度な期待はしないでくだふあい（約束）

作者の詩人レベルは9でいい（キリッ

とある騎士【ナイト】の黄金鉄塊【メイン盾】

※注意書き

- ・この作品は作者の妄想9割とその他諸々の何かが1割で形成されています要約すると閲覧注意
- ・作者はにわかブロンティストなのでブロント語を間違えることが多々あります。

まれによくあるってレベルじゃ（ry なので寛大な心で見守ってくださいあ；

- ・禁書目録とFF11のクロス作品です。嫌いな人は閲覧注意（2回言っておくことが大人の醍醐味

- ・ブロント語や漢字、文の間違いは指摘してくださいとありがたいです（リアル話）

- ・「キャラの発言おかしくね？」ってどこも指摘をお願いします（懇願）

- ・カカッと更新できない！できにくい！って時もありますが失踪はしないようにしたいです。

ストーリーは禁書目録一期に沿っていきます！

- ・えちよ コメントや感想くれるとうれしいな！なんて・・・

第一話：何いきなり日干されてるわけ？（前書き）

この小説を書こうと思ったのは、ブロントさんのSS少ないな・・・
↓強敵^{とも}に相談↓なければ創ればいいじゃない↓よし・・・やるか！
という馬鹿みたいなのがきっかけです・・・；

第一話：何いきなり日干されてるわけ？

学園都市、あらゆる教育機関・研究機関の集合体で総人口は約230万人（その8割は学生だが）。

東京都の三分の一を占めるその巨大都市の科学技術力は数十年前も先を行くといわれる超近未来都市だ。サイバータウン

ここでは主に超能力開発、といわれる授業を行っており、カリキュラム脳に電極をぶち込んで薬を摂取すれば誰でも超能力が使えます、という

訳の分からない技術を持っている。

まあ何故分からないか、と言われれば複雑すぎて一般人には手の出しようが無い

領域だから、と答えるのが正しいだろう。

そんな学園都市に住む上条当麻は少し他の者とは事情が違っていた。かみじょうとうま

レベル0、という一般的にはあっても無くても同じ力という烙印が押されているくせに、レベル5、一般兵器くらいなら即効でぶっ壊せるような怪物の力を生まれつきに消せる右手を持っている（相手の力が異能の力ならだが）。

そして何よりも不幸だった。

外を出歩けば鳥の糞が相乗攻撃を仕掛けてきてダブルアタック

買い物に行こうとカードを探していたら途中で躓いてカードを踏み碎き

電話に出てみれば担任から「補習ですー☆」と死刑宣告、ラヴコール

そして極め付けには外に出て布団を干そうとして――

「……」

——自分の部屋のベランダに二人ほど人が引っかかっていた。

自分の部屋のものであるベランダにシスターの格好をした少女と、白銀の鎧を着た大柄な男性が見事に並んで引っかかる形で日干しされているのである。

脳が働くことを拒否し、上手く状況整理が出来ない。
良く分からないが何故か涙が出て来た。

「………」

「お腹減った」

「……え？」

今にも走って現実から意識を手放そうかなと危ない考えを浮かべている当麻の

考えを打ち消すように、少女の口から言葉が飛び出す。

あまりの不意打ちの出来事に体が硬直する。

今の当麻の顔を見て、間抜けだ以外のコメントは特には浮かんでこない。

「お腹減った」

「あの、もしもし？」

銀色の髪、緑の眼をしたどう見ても外国人な少女がいきなり日本語で話しかけてきている。

純白のシスター服ってあるんだなーとか何処と無く金の刺繍が

高価なティーカップみたいだなーとか思ったり。

なんかもう頭の中がぐちゃぐちゃになり冷静になれない。

そんな現在進行形で頭を抱えている当麻にいい加減イラッときたのか

銀髪少女は可愛らしく頬を膨らませて

「ねえ、お腹減ったって言ってるんだよ？」

「えっと…貴方はひょっとしてこの状況で
自分は行き倒れですとか仰りやがるつもりでせうか？」

「倒れ死にともいう」

まったく話に通じてない、少し焦りが出て来た。

いや話に通じているのか？しかしながらとして意思疎通ができて
ないと言うか

こちらの困惑が通じているのか――

とりあえず何とかしようとしている当麻だったが

今度はまたもや銀髪で褐色の肌、首が長い長身の男が目覚ます。

これまた純白の鎧と黒ずんでいると言うかとにかく漆黑な剣とか
金と青色の大きな盾を持った男は大きく欠伸をすると眠そうに目を
擦り、当麻の顔を見て

「…おいィ？」

今度はこれが第一声だ、上条当麻はいよいよもって現実からおさら
ばしたくなった。

だがそんな当麻は何処吹く風で、男はきよろきよろと器用にバラ
ンスを取りつつ
首だけを動かして周りを見渡している。

「ここは一体どこなんですかね…?」

少しの静寂の後、少女と男の腹が共鳴して空腹を訴えた。
当麻は天を仰ぎ、力尽きた笑顔で笑うと

「不幸だ…」と呟いた。

第二話：俺がトあぶル体質だって事が間接的に証明されたな

とりあえずベランダに放置するのも困るし、シスター？の方が「清純なシスターが空腹を訴えてー」とか「食べ物を恵んでくれな」と

これは神に対する冒瀆ー」とかとにかくうるさいので適当に冷蔵庫にあったものでご飯を作ってあげることにした。

ボール一杯のサラダを食べ終えると、少女と男は揃って満足そうに頭を下げる。

「ご飯ありがとうなんだよ！」

「俺は不良だが感謝は忘れないしジュースをおごってやろう」

白髪の怪しい男は懷から缶ジュースを出すと上条当麻に投げ渡す。慌てて何とかキャッチするも、一体何処に持っていたのか…異様に冷たい。

赤い缶には白色ででかかと『有頂天コーラ』と書かれていた。

「あ、ありがとうございます…。ところで、」

「何か用かな？」

「……アンタらは一体何者なんでしょうかね？」

当麻がおずおずとそういうと、二人は「そういうえば」的な感じで顔を見合わせて

一斉に当麻の方を向くと、

「私は禁書目録！^{インデックス} シスターだよ！」

「俺はブロント、呼ぶときはさん付けでいい」

各々自己紹介をする。

が、全く肝心のことを言っていないし、いきなりさん付けを強要（？）されるし

何と言うか不幸だった。

「は、はあ…。」

とりあえず気を落ち着けてため息をつくが、インデックスが

「バチカンじゃなくてイギリスのほうだからその辺も理解してほし
いな！」

笑顔全開に放った台詞に当麻は再び頭を抱えた、イライラも一周す
ると

笑いに変わると言う漫画に描いてあった精神状態が今なら分かる気
がする。

このままでは自分の何かが崩壊しかねないので、話を変えてみた。

「えーと、何故二人は俺の部屋のベランダに引っかかってたんだ？」

「隣の屋根に飛び移ろうとしたんだけど、失敗しちゃった…」

「俺はいつもどおりLSメンにキングベヒンもス狩りに

「ナイトがいないと勝てない」；；

「メイン盾のいないPTとか絶望的だろ・・・」

と泣き付かれたので、しかたにいなと返事すると

「もうokしてくれたのか!」

「これで護衛に本気が出せる!」

と大歓迎状態だったんだがちょっとわずかに集合時間に遅れてしまった感

とんずらを使ってカカツとキングベヒんもスの縄張りに行こうとしたんだが

いきなり光ってきた恥知らずな光によって包まれたらいつの間にか日干しされていたんだが?」

「……。」

「???」

いくら自分が頭が悪いと自嘲している上条当麻でも、この男の説明で理解が出来るものが

この世界にいないことは良くわかった。

笑いが180度ほど回転し、再びイライラしてきた。

当麻はイラ付きを隠そうともせず、犬歯をむき出しにして問う。

「あんたら…ふざけてんのか?」

「ふ、ふざけてないよ!? 私は追っ手に追われて…」

「どうやって俺がふざけてるって証拠だよ!?」

とりあえず慌てる男と少女を落ち着かせ、二人から話を聞くことにした。

（以下省略）

：長い話が終わったので、話を整理しよう。

このインデックスという少女は頭の中に十万三千冊の魔導書を持っている、

それを狙うものに追われているらしい。

そしてこのブロントさん（さん付けしないと怒られる）はヴァナ・ディールという世界のジュノ大公国というところから来た冒険者だったらしい。

仲間とキングベヒんもス？というモンスターを退治しようとしたところ、

いきなり光に包まれて気がついたら此処のベランダにいたという。

「どうしたのかな？」

「いや、上条さんのレベル0の脳じゃ魔法とか世界とかまったく意味わかんなくてな…。」

いきなり非日常的なワードが出てきたので

当麻の脳は再び働くことを拒否。

これなら学校の補習の方がよっぽど脳に優しいな、とか考えてみる。

「む！信じてないんだね？じゃあ試してみるんだよ！」

「試すってどうやってだよ？」

インデックスが「えーと…。」と頭を悩ませていたのでブロントさんが提案する。

「俺が思うにインデックスが魔法を使ったらいいんじゃないか？まあ

一般論でね」

「…私には魔力がないから魔術は使えないんだよ。」

「…おいィ？お前それでいいのか？」

魔法を証明するのに魔法が使えないのでは、
証明にならないことは明白だろう。

流石に『神様は見えないけどここにいますので信仰しなさい』なんて言われても

その通りに信仰する人など存在しない。

「で、でも私にはこの修道服があるんだよ！」

インデックスは貴族のお嬢様がドレスを見せびらかすように
くると修道服の端を掴んで一回転する。

「なんだ？その服もその魔法とやらで出来てるのか？」

「『歩く教会』って言ってね、あらゆる攻撃を無効化しちゃうんだよ」

「…！…ほう…」

装備好きのブロントさんは思わず感嘆の声を出した。

あらゆる攻撃を無効化とは、冒険者にとって

チート以外の何者でもない。

だが一般人である当麻がそんな事を言われても『へー』と
馬鹿らしい声を出すことくらいしか出来ない。

「んなこといわれても…そうだ!」

いきなり当麻が何かを思いつき立ち上がり、自分の右手を開いて再び握る。

「なんだいきなり叫びだしたく<戸馬」

「俺の右手は異能の力を打ち消せる、俺がこの右手で触れてその服に何か変化が起きたら

その魔法とやらを認めてやる」

と、当麻が自分の能力について簡単に説明した。

「それはえごいな、さっそくやってみるべき!」

とブロントさんが子供のように無邪気に目を輝かせると、インデックスは小馬鹿にした様な態度を取る。

「魔術でも何でも打ち消せるって言うの? それこそ信じられないんだよ?」

「少なくとも超能力なら何でも触れられれば打ち消せるぞ」

「じゃあ、やってみるといいんだよ」

インデックスが手をヒラヒラッと振ると、ついに当麻の額の何かが切れる音がした。

「…それじゃあ遠慮なく!」

当麻の右腕が修道服の腹部の部分に吸い込まれる。

「…。」

「…あれ？」

「…おいィ？」

数秒の静寂に部屋が包まれたが、たいした効果は見られない。
インデックスは当麻を鼻で笑うと、

「ふふん！ やっぱりそんなことできるわけg」

カァン！とまるでガラスが割れた音が部屋に響く、
と同時にインデックスの『歩く教会』はバラバラなり、破片は宙を
舞った。

つまり、今インデックスはフードを残して全裸である。

「え、えー！！？ あわわわわわ！！！」

「え、わ、悪いまさか裸になるて」

当麻が何かを言い終える前に、インデックスの口が大きく開き
当麻の頭にかぶりついた。

うぎゃー！！とこの世の終わりのような断末魔が、当麻の部屋に
反響した…。

第三話：完全的な異世界とか修正されて；

※アワレにもズタズタになった修道服はブロントさんの裁縫スキルで修復しました

裁縫も出来るなんてあこがれちゃうなー

インデックスの立場紹介も終わり、思う存分当麻を噛んでスッキリしたのか

インデックスはすっかり先程の状況を忘れたようだった。

：いや、心の奥底に封印したのかもしれないが。

「で、次はブロントさんだが…」

当麻がブロントさんの方を向くと、ブロントさんは腰にかけてあったバッグから

一枚の古めかしい紙を取り出す。

ブロントさんが紙を上へ掲げると紙はほんのりと光り輝いたが突如バチッと音を鳴らして地面に落下していった。

「oi みうs ミス おい デ字ヨンの呪符が使えにい！
ちくしょう運営は馬鹿だ；」

ブロントさんがその場に膝から崩れ落ちると、インデックスが落ちた紙を

興味深そうに眺めながら尋ねる。

「デジョンって何？」

orz↑この状態のブロントさんは首だけインデックスの方を傾

けると、
軽くため息をついた。

「お前デゾYン 知らないとか冒険者として致命的だろ…」

その呆れた様な話しかたに反応してインデックスがむっと
頬を膨らませる。

「私はシスターなんだよ！」

ぎゃあぎゃあと言い争いをしている二人を当麻は子供の遊びを見
守る

父親のような表情で見ていたが、今はこんなことしてる場合じゃな
い、と

首を大きく振る。

とりあえずブロントさんにも話を聞かないといけない、魔法うん
ぬんはともかく

世界の話となるとどうも胡散臭い。

「あのー、ブロントさん？」

口喧嘩を止めるように二人の間に割り込んで話しかけると、
ブロントさんは頭に？を浮かべて首をかしげる。

「何か用かな？」

「ブロントさんのさっき言ってたことに嘘はないんですね？」

その言葉にイラッときたのか、ブロントさんは眉をひそめて
当麻に詰め寄る。

「お前しつこいなバラバラにされたいのか？」

俺は不良界の伝説的な立場に居たんだが嘘はつかないことで有名」

いきなりの高圧的な態度に驚いたのか、当麻の口からは
おっかなびっくりと言った声が出ては消える。

その言葉にインデックスが顎に人差し指を当てて

「でもこの世界にはジュノ大公国なんて国はないんだよ？」

「…【えっ!?!?】」

ブロントさんが思わず叫ぶ。

そりゃ自分の故郷が存在しません、なんて言われたら無理もない
話だ。

そもそもそんな国が存在するならだが、その青ざめた表情からは
とても嘘には思えない。

怯んだブロントさんに畳み掛けるように当麻が言う。

「ああ、そんな国は存在しないんだ」

その言葉でついに心に余裕がなくなったのか、ブロントさんの顔に
大玉の汗がだらだらと流れ落ちる。

「ち、地図を見せて☆印だが・・・」

ブロントさんが顔を真っ青にしながら
なんとか声を絞り出して頼んだ。

「補習のプリントで良ければあるけd」

「早く貸しテ！・・・おいィ！？」

焦りながら殆ど奪うようにしてプリントを取る。

そのプリントに描かれていた地図はジュノ大公国が存在しないどころか

大陸の形、海の形までもが明らかに違った。

地図であるはずなのにヴァナにあるような古紙で出来ているような物ですらない。

「想像を絶する悲しみがフロントを襲った。

いくら本能的に主人公タイプの俺でも
事前に飛ばされるとわかっていれば反抗も出来ますが
わからない場合手の打ち様が遅れるんですわ？お？」

「と、とりあえず落ち着いてくれませんか？」

よほど混乱しているのかフロントさんはいきなり頭を壁に打ち付けた。

衝撃で部屋が少しゆれる程度の衝撃、一軒家ならまだしも此処は
学生寮だ。

これ以上は困るのでとりあえず落ち着いてもらう為に
少し此処のことを話すことにした。

露骨な時間経過だ・・・いやらしい

ブロントさんが落ち着いたところで話を再開する。

「でもブロントさんが異世界人って…」

「そんなの魔導書にも載ってないんだよ…」

いろいろと常識を超えた話だ、しかしブロントさんのもつ道具や能力を見ると

ありえないと断言できない。

以外にも本人のブロントさんが一番早く冷静になった。

「此処でネガっててもしかたに、カカツと帰る方法を探すべき早くしないとこの金持っていない俺は裏世界でひっそり幕を閉じる」

「私もそろそろ行かないと追っ手が来ちゃうし…
貴方もこの部屋ごと爆破されたくはないよね」

二人は立ち上がり玄関へ向かう。

「お、おい二人とも！」

「すまに、世話になったな飯は美味かったぞ」

「ご飯おいしかったよ！」

「おい待てよ！」

出て行こうとする二人を引き止めに上条当麻は玄関に走る、追っ手に自分を狙われている少女と、異世界から来た青年が自分に迷惑をかけまいと出て行こうとしている。

しかし、お人よしの上条当麻はそれを見過ごせなかった。

「今の二人の状況を知ってて、放り出せるかよ！」

「…じゃあ私と一緒に地獄の底までついてきてくれる？」

インデックスが悲しそうな顔で言う、

その言葉に当麻は言葉を濁らせた。

「それは…」

「いえない、そう簡単にその言葉を言えるほどその世界は優しくないのだ。」

「じゃあね」

「俺はお前に迷惑かけるのはどちらかというと大反対だからよ…じゃあな」

そういつて去っていく二人に上条当麻は

「困ったらまたいつでも来ていいから」と言っで見送ることしか出来なかった。

熱くなった頭が一番最初に思い浮かべたのは以外にも、あの小萌先生の

死刑宣告だった…。

第四話：ジャッジ念と？何それ？外人？歌？

〽学園都市中央通り〽

インデックスに「私は1人でいいんだよ！」といわれた挙句に、自分の世界に帰る方法を探さなくていいのかと完全論破されたブロントさんは1人で彷徨っていた。

「【むむむ】この街の地理が良くわからに俺は隙だらけだった…このままウロウロしては俺の寿命が周りからの視線でマッハなんだが…；」

中央通り、時間は人の集まる昼時である。

そこに長身鎧白髪 of 耳の上がった首長男が（しかもイケメン）堂々と歩いているとなれば、人の視線も自然と集まる。

特に限定されてすることも無いのでフラフラと歩いていると、不意に道を遮るように少女が飛び出してきた。

「そこのあなた！ジャッジメントですよ！」

「何いきなり話しかけてきてるわけ？」

呼びかけてきたのは茶色の髪にツインテールの少女だ。

どこかの学生服を着て、右の二の腕には緑の腕章をつけている。

少女はブロントさんをキッと睨みつけると、凜とした声で

問い返してくる。

「あなたは一体何者なんですか？」

いきなり飛び出してきた少女に何者、と聞かれてはあまり良い気分ではない。

コイツは名のるる前に先に名乗れと言う名台詞を知らないのか、と思ったが、熱くなっても意味はないのでとりあえず名乗らせてみる。

「お前こそ何もだよみろ見事なカウンターで返した」

しれっとした態度に少女は奥歯を噛みしめた。
少しずつ額に青筋を浮かべながら、

「だからジャッジメントだと…もういいですわ、ジャッジメント支部までご同行願いますの！」

話にならないとした少女は無理やりにも
来てもらおうとするが、

「俺はおもえに構ってる暇はないんですわ？お？
ジャッジメント？覚えてたのWS自慢するのは勝手だが
それなりの仕方があるでしょう？
じゃ情報しうしうする系の用事があるのでこれで」

ブロントさんは我関せず、と言った感じで後ろを向いて
すたすたと歩いていく。

「ちょ、ちょっとおまちくださいな！」

その瞬間、少女はいきなりブロントさんの前に現れる
無論この世界に來たばかりのブロントさんには

それが超能力とわからないわけで――

「oi みうs ミス おい升使うのは犯罪だぞ！
GMに通報されて裏世界でひっそり赤BANされたいのか？」

――こうなる。

気持ちがいいほどから回っています。

「升ってなんなんですか？・・・とにかく！
ついてきてくださいまし！」

少女はブロントさんの傍らにレポートすると、ジャンプして
耳を掴み、ぐいぐいと進みだす。

「おいばかやめろ！耳を引っ張るnウオァー！！」

こうしてブロントさんは不審者として
あえなく御用となった。

第五話：どうやって俺が悪いって証拠だよ（前書き）

感想やキャラへの質問とかしてもいいんじゃないよ？（チラッチラッ

フロントさん「露骨にアピールしてくる・・・いやらしい」

第五話：どうやって俺が悪いつて証拠だよ

（ジャッジメント第一七七支部取調室）

ブロントさんは悩んでいた。

いきなり連れてこられた場所がGMの某監獄の雰囲気にとっくりでしかも自分は悪い事をした覚えがない。

「で、俺がなにをしたっていうんですかねえ？」

「あなた：自覚がありませんの？」

まるで呆れられたように言われたが

自分はただ情報収集しようとMAPを移動していただけなのでまったく理解が出来ない。

27

「おいおい（笑）俺はただ歩いていただけなんだが？

いきなりこんな所につれてこられて

俺の高INTでも理解不能状態

説明するべき死にたくないならそうすべき」

さすががしいほどのすまし顔で自分の無罪を主張してきた。

少女も流石に耐えかねたのか、額に青筋を浮かべて口を引きつらせて

声にドスを効かせて問う。

「：では言わせていただきますけど、なぜあなたはそんな訳の分からないコスプレをして街を徘徊していたんですの？」

「おいィ？ ガラントをコスプレ扱いとか
お前絶対忍者だろ…汚いなさすがですのきたない」

駄目だ…全然話が通じてない…。

ブロントさんの尋問を任されたジャツジメント白井黒子しらい ぐろこも悩んでいた。

見たところ相手は外国人だ、日本語が色々とおかしいしそうに違いない。

思わず机に突っ伏しそうになったが、勤務中にそんな事を仕出かせば

先輩にとやかく言われかねないので思いとどまる。

「…もういいですわ、IDで確認いたしますので
しばらくそのコスプレした自分の姿を鏡で見て
反省しててくださいまし！」

そう言う和白井黒子は鼻をフン、と鳴らすと
足音をわざと大きく鳴らして部屋を出て行ってしまった。

「…何が悪かったかわからにいが俺は不良だからな
反省もしないしカカツととんずらで逃げる」

椅子から立ち上がり窓へ手をかける、
窓を開けると風が室内に流れ込んだ。

三階にも関わらずためらいなく飛び降り平然と着地する様は流石
黄金の鉄の塊

精神力もダイヤモンド・パワー（鋼のように硬い）である。

「…とりあえずとむあに何が悪かったか聞いてみるべ」

慣れた動作でとんずらをかけるとあのアパートへ戻っていく
そのアパートで何が起きているかも知らずに…。

第六話：魔術師が魔術使えるのはずるい

「つたく、朝は魔術師シスターに異世界の騎士、昼は小萌先生の補習、

帰りはビリビリ中学生のせいでえらい目に合った…。

こりゃ帰っても何か有るって上条さんの不幸センサーが反応しますよ…。」

横綱が乗ったら壊れます、的な感じのおんぼろエレベータから降りて

片手でかばんを弄りながら当麻はため息をつく。

「こんな日は家に帰ってだらだらするに限るぜ…って、冷蔵庫の中なんかあったっけか？」

そーいや何も無かった、と再びため息をついた。

フラフラとした足取りで当麻が自分の部屋に帰ろうとすると、自分の部屋の前をせわしなく何かが動き回っている。

良く見るとそれは学園都市製のドラム缶に車輪を付けてみました、何て形の

珍しくも無い清掃ロボットだった。

「…人の部屋の前で何掃除してんだ？」

がちやがちやと音を立てている清掃ロボットに近づき少し間から覗き見てみると、白い布に金色の刺繍が見えた。

間違いない、インデックスだ。

此処に倒れていると言うことは大方朝のように行き倒れたのだろう、と

少し笑いながらも何度目かのため息をついた。

「はぁ…なんていうか、不幸だな…。」

おいインデックス、こんな所で何やってんだよ。

こんな所で寝て――

インデックスを起こそうとした声が、止まる。

それは、インデックスの倒れている地面から伸びている赤い線が、清掃ロボットに吸い込まれているところが見えたからだ。

インデックスの背中に手を回し、起こそうとする。

ぬるっと、手に得体の知れない感触と生暖かい温度。

そして背筋を蛞蝓が這ったような嫌悪感が体を襲った。

「――っ、なんだよこれ・・・！」

急いでインデックスの背中を見る。

そこには真っ赤に染まった修道服と、綺麗に、あまりにも綺麗に一閃された

インデックスの背中が見えた。

赤い肉、黄色いものは恐らく脂肪、白いものが少し見えるということ、

恐らくそれは…骨、だと思う。

当麻は思わず吐きそうになったが、そんな事をしている場合は一切無い。

「おいしっかりしろインデックス！！」

どうしたんだよ・・・一体何処のどいつにやられたんだ！！」

揺する訳にはいかないが、頭が上手く冷静にならずに答えられるはずが無いインデックスに問いかける。

インデックスの口からはその問いに対する答えではなく、ただ苦痛の息が出てくるばかりだ。

だが、その問いに答えるかのように背後からカンツと足音が響く。瞬間、当麻の体が、筋肉が、思わず心臓までもが硬直しそうになった。

首だけを回して振り返ると、そこには2mを超えるであろう長身に赤く染めた長い髪、タバコをすわえ、右目の下にはバーコードの刺青がある神父服をきた男が立っていた。

その男は、当麻を見下すように、喜劇でも見ているように、笑っていた。

「僕たち、魔術師だけど？」

悪びれもなく、その男は答える。

男は面倒くさそうに赤い髪を掻くと、タバコの煙を吐き出し血まみれのインデックスを見下ろす。

「んー、随分派手にやっちゃって…。」

あゝあ、と言うように両手を広げるその男に、当麻の右腕が震える。

嫌悪に詰まった喉から吐き出した言葉は、疑問。

「なんで…」

上条当麻には分からなかった、

此処に戻ってきたら追っ手には好都合だろう、狙われるに決まっている事ぐらいわかる筈だ。

疑問を繰り返す当麻に、男は心底どうでもよさそうに答えた。

「その子が戻ってきた理由かい？さあね、忘れ物でもしたんじゃないかな？

昨日はフードがあったけど…あれって何処で落としたんだろうね？」

インデックスの『歩く教会』は魔術で出来ているので、それは魔術のレーダーにいてもたやすく引かかる。

それがあるというだけで、近くにいたものは魔術師に狙われることになる。

だから戻ってきたのだ・・・赤の他人を、上条当麻を、戦いに巻き込まないために。

「…バツカヤロウが！！」

ダン、と右腕を地面に振り下ろし、叫ぶ。

赤の他人のために、自分の命を省みずここまで助けに来た。

それはおそらく、『とても素晴らしい行為』。

だが、それは『当麻にとってもっとも残酷な行為』だった。

一部始終を見ていた男ははあ、とため息をつくと言う。

「さて、そろそろ退いてくれないかな？『ソレ』、回収したいからさ」

その男の言った言葉に、当麻の感情が一瞬だけ空白を生んだ。理解が出来なかったからだ、男の言った言葉を。

当麻は理解が出来ないまま、男の言葉を、その一部を復唱する。

「回、収？」

「そう、回収だよ。」

まあ詳しく言えば『ソレの持ってる十万三千冊の魔導書を』だがね」

当麻の頭が、空っぽであった頭がある一つの言葉を思い出す。

十万三千冊の魔導書。

インデックスが、禁書目録が持っているといっていた事。

「ふざけんなよ…そんなもんがどこに…」

「あるさ、『ソレ』の頭の中にね」

男は間髪いれずに即答し、言う。

「瞬間記憶能力と言うものを知っているかい？」

『ソレ』は見たものを一字一句記憶し十万三千冊を記憶してる魔導書図書館だ。

おっと、気をつけたまえよ？君みたいな凡人じゃあ一冊目を通しただけで廃人コース確定だ」

男は煩い子供を説得するように告げる。

「その十万三千冊は危険なんだ…。」

だから魔術が使える奴らが来る前に、こうして保護にきたって訳さ」

…保護？今この男は保護といったか？

インデックスを傷つけて、拳句の果てに保護と？

その言葉でついに、当麻の何かが、音を立てて切れた。

「デメエ……！何様だ……！！」

当麻は爆発したように殴りかかる。

だが、そこに居た男は霧のように消えると数歩後ろに離れたところ立っていた。

「ステイルⅡマグヌス、と名乗りたい所だけど

ここは『F o r t i s 9 3 1』と名乗っておこうかな」

男が吸っていたタバコを弾くと、タバコは弧を描いて鉄の手すりの向こうへと落下していく。

「僕たち魔術師はこの『魔法名』を名乗ってはいけないそうだ。

まあ、古い因習だから理解できないが……重要なのは魔法名を名乗り上げたことだね。

僕たちの間ではむしろ……『殺し名』かな、炎よ。」

不意にステイルの捨てたタバコが爆炎をあげ、

その炎がステイルの右手に球を成していく。

その熱量が突き刺さるように全身に纏わりついた。

（これが、魔術か……！こんなものに俺の右手が通用するのか？

確かに俺の右手は異能の力は打ち消せるが、

俺は超能力以外の異能の力なんて知らない！）

ステイルは右手を振りかぶり、横薙ぎに振るう。

「巨人に苦痛の贈り物を!!」

それだけの動作で、壁は焦げて剥がれ落ちる。

鉄の手すりは拉げてくず鉄へと変貌する。

そして、廊下も清掃ロボットも当麻もインデックスも、まとめて炎の中に沈んでいった。

残された男は新しいタバコに火をつけると、ふっと息を吐いた。

「ご苦労様、お疲れ様。…まあそんな程度じゃ千回やっても僕には勝てないよ」

燃え盛る炎を背に、インデックスを回収しようとし

「だが、だれに勝てないって？」

その行為は、聞こえるはずのない声に遮られた。

ありえない、確かにあの少年は炎に吞まれたはずだ。

うねりを上げる炎の中に立っているのは、間違いなくあの少年。

だが周りの炎はまるで少年から逃げるように周りを燃やし、少年に近づいた炎は右手に振り払われて一瞬で消し去られる。

「そうだよ：俺は何をびびってんだ！

あの修道服をぶち壊したのだってこの右手じゃねえか!!」

焦るステイルが再度炎を振るうが、その右手に触れた瞬間に四方八方へと飛散した。

ステイルの頬に汗が浮かぶ。

「：そうか、やっと分かったよ。」

インデックスの『歩く教会』が、誰に破壊されたのか：」

ステイルは一度息を吐くと、タバコを投げ捨てて
まるで歌うように何かを呟く。

「・・・世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ
それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり
それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不
幸なり

その名は炎、その役は剣！

顕現せよ！我が身を喰らいて力と為せ！！」

ステイルが詠唱を終えると同時に炎の巨人が姿を表す。

2メートルはあるうその巨人は、そこにいるだけで

周りは湾曲し、溶けて形を崩していく。

「魔女狩りの王イノケンティウス、その意味は必ず殺す」

イノケンティウスが咆哮をあげると同時に覆いかぶさるように襲
ってくる。

当麻はそれを右手で打ち払い、消滅させた。

だが、周りの炎が一箇所に集まり燃え盛ると、再び姿を現す。

イノケンティウスはその右手に十字架の炎を作りあげると

それを大きく叩きつけた。

当麻はとっさにそれを右手で受け止める。

バチバチと音が鳴り響くが、右手はそれを消滅させることが出来
ない。

（この炎、消滅した直後に復活してるんだ！）

ギリッ、と音を立てて当麻の体が沈んでいく。
まずい、耐えられない。

（ヤバッ…これじゃあ…）

押し切られる、と思った瞬間。

その声は向こうで、力強く響いた。

「生半可なナイトでは使えないホーリ！！」

イノケンティウスが光に包まれ、大きく仰け反った。

ドロリと形を崩すイノケンティウス、そして驚いて振りかえるステイル。

その向こう、夕焼けより、あちこちに燃え盛る炎より美しく
白く淡く輝く鎧と盾。

そして、その全てを飲み込んでしまいそうな剣。

こんな格好をしている人物は、当麻の記憶ではただ一人。

当麻はその名を叫ぶ、腹の底から、希望に満ちた声で。

「ブ、ブロントさん！！」

そこに立っていたのは、異世界の騎士ブロントさんだった。

第七話：黄金の鉄の塊でできたナイトがイの件ティウスに遅れをとるはずは無い

ロムさん、ご意見ありがとうございました！

確かに台本書きはブロントさんの小説には

会わないですよね・・・

地の文と両立させて書いていくので宜しく願います！

頂いたご意見はぽこじゃが繁栄させていただきますので

気に入らないところがあつたらご意見宜しく願います！

第七話：黄金の鉄の塊でできたナイトがイの件ティウスに遅れをとるはずは無い

「ブ、ブロントさん!!」

イノケンティウスの後ろに立っていたのは、ブロントさんだった。

「【むむむ】すまに少し遅れてしまった感
でこるはいったいどういふ…なるほどなおもえが
インでクスSを追っ手かよ」

ブロントさんがステイルをにらめ付けると、ステイルは面倒くさ
そうに

頭をかきむしった。

「…その通りだよ、まあ僕としては保護したかったんだけど…
ま、いいや時間が惜しいのでね、さっさと決めさせてもらおうよ!」

ステイルが指をブロントさんに向けるとイノケンティウスが咆哮
し、

ブロントさんに十字架を叩きつける。

しかしブロントさんは一歩もその場を動かない。

身体をかがめて盾を抱え込むように構えると、

「シンルドバツシュ!!」

盾を大きく振り、赤く燃える十字架をはじき返した。

あまりの衝撃にイノケンティウスの長い腕は肩から千切れ、溶け
た手すりの近くに

ボトリと落ちると、消えてなくなった。

ブロントさんが軽く息を吐くと、ステイルは見る見る顔を青くしていく。

「ば、馬鹿なッ！イノケンティウスは三千度の炎の固まりだぞ！？ただの盾ではじき返せるわけがない！！」

ステイルの激昂に、ブロントさんはおいィ？と言うと鼻で笑う。

「ケーニンひシールドがただの盾でないことは確定的に明らかなんですがねえ？

この程度の攻撃ならインビンシブルもランパートも必要ないと思った（リアル話）」

ブロントさんは余裕綽々といった態度で腕組をしている、まるで「俺はこのままタイムアップでもいいんだが？」という感じだ。

その態度に奥歯をかみ締めながらも、ステイルは考える。

（先ほどの光を放ったのもおそらくこの男：イノケンティウスの一撃をはじき返す盾：なるほど、そういうことか）

結論を付けると、懷から一本タバコを取り出して火をつける。

「君もこちら側だったって訳か：二対一ではこちらが不利だし、神裂も今は別件で動いている。イノケンティウスも君たちには通じないみたいだし、此処はルーンを回収して逃げさせてもらうよッ！！」

ステイルが指を鳴らすと視界をさえぎるようにイノケンティウスが

燃え上がる。

当麻は右手でそれを打ち消し、ブロントさんは盾で受け止めた。

「てめっ、まちやが…クソッ！」

当麻が慌てて姿を探すも、炎が消えたときには既にステイルの姿はなかった。

周りを見回す当麻にブロントさんが叫ぶ。

「ともあ！今はインでkkすの回復を先にするべき！」

ブロントさんが駆け寄るのに少し遅れて当麻もインデックスに駆け寄る。

インデックスの背中からは生々しく血が流れ、床に再び血溜まりを作った。

「出血が酷い、早く救急車を！」

「その必要はない」

は？と間拔けな声を出す当麻をよそに、ブロントさんはまるで目を瞑り

唄うように何かを呟いていく。

ブロントさんが目を開けて右手を天に掲げる。

「…ケアルをおごってやろう」

ブロントさんの周りインデックスの身体が淡い光に包まれる。すると今まで流れていた血がまるで嘘のように止まり、インデックスの荒い息が収まっていった。

「：ブロントさん、アンタ一体何者なんだ？」

当麻が目を見開いて驚き、問うとブロントさんはおいおい（笑）と笑う。

「今朝したがって説明したんだが？俺はただの名実ともに唯一ぬにのメイン盾

以下レスひふようです。おもえは俺と議論をする前にするべきことが

あるでしょう？」

ブロントさんはインデックスを肩に担ぐと無くなった鉄の手すりの向こうに向かって指を差す。

あの炎で集まってであろう消防車とパトカー数台に、野次馬が沢山集まっている。

うわーと言う呆けた声と共に、とてつもない不幸な予感がした。

「：えーとつかぬ事をお伺いしますが、アレを上条さん一人ですなんとかしてこいと？」

首をブロントさんの方に向けると、ブロントさんはインデックスを担いでいる方とは

反対の腕でグッと親指を立て、頷く。

「yes 俺はインdックスを寝かせておくので【お願いします】

」
ブロントさんはそれだけを言うと、当麻の部屋のほうに歩いていた。

「ふ、不幸だ…。」

はあ、とため息をついてエレベーターで降りようとしたが、後ろからブロントさんに引き止められた。

「ま、まだ何か用でせうか？」

「…部屋の鍵くださいますか？」

結局、この騒動は当麻のいたずらということで幕を閉じ
後日当麻は小萌先生とジャッジメントの固法^{このり}美^み偉に
ダブル説教をくらうのだった。

第七話：黄金の鉄の塊でできたナイトがイの件ティウスに遅れをとるはずは無い

あらためてご意見いただきましたロムさん！真にありがとうございます！

これからもご意見【はい】【お願いします】

「今回はちょっと日常編！」

「ストーリーとは何の関係もないんだが・・・
まあ一般論でね？」

「作者が「ここから戦闘シーン続きじゃないですかやだー」；；
とか訳のわからないことを言ってます・・・」

「・・・まあ時には休憩も必要だと思った（リアル話）」

「・・・お楽しみに？」

第八話：なんか指の端っから電気出してきた

結局翌日にはインデックスは何でも無い様に目を覚ました。

自分の傷が治っていたことに驚いていたが、ブロントさんが治したと聞くと

ブロントさんを質問攻めにしていた。

当麻には小難しい話はなんのことやらまったく分からなかったがインデックスは楽しそうだった。

後俺にはブロントさんへのタメ口が許可された、
本人曰く

「これから一緒に敬語とか息苦しすぎる、

タメ口でよいぞ（ここら辺の気遣いがもてる秘訣）」

らしい、どうやら在住する気満々である。

さっそくタメ口で「ブロント」と呼んだ瞬間に

「さん付けろデコスケェ!!」

と怒声が飛んできたので、タメ口でさん付けになった。

あの覇気は恐らく積み重なった不幸よりも怖い、と当麻は語る。

不意にブロントさんが買い物が見たいのでお金が欲しいといってきた。

「いきなり買い物って…何か欲しいものでもできたのか？」

当麻が問うと、ブロントさんは頷く。

「どうやら俺の装備は見えそうなオーラで目立つらしいからな

郷に入るば郷に従えという名ゼリフもあるので買い物するのがいいと思った（リアル話）」

確かに、その姿（純白鎧に剣盾所持）で町をうろつかれた日には確実に風紀委員か警備員のお世話になることだろう。

（ちなみに一回なっているが、当麻は知らない。）

「なるほど…しかし俺はLV0（無能力者）だから奨学金とか補助金が少ないんだよなあ…」

はっきり言って今の状況はやばい、昨日の朝見たがこの食いつぶりの2人を

養っていくのはかなりきつい。

というか無理、おかわりは九杯でいいとかそれにつられて何故か対抗心を燃やした

インデックスが更におかわりを求めるので尚更性質が悪い。

うーん、と当麻が悩んでいるとブロントさんもため息を吐き呟く。

「ここじゃ俺のギルも使えにいな・・・」

「ギル？」

ブロントさんが言った聞いたことの無い単語に再びインデックスが目輝かせて尋ねる。

「ああ、向こうの金貨なんだが…」

「き、金貨あ!？」

さらりとブロントさんが出した台詞に、当麻が目を見開いて驚く。

「何打いきなり叫ぶだした＞＞ちうま
金貨がどうかしたのか？」

「いや金貨って…良くわからないけどかなり価値のある
金のことだろ？」

「まあ金策ダンジョンにPT組んでいけば
ぽこじゃが手に入るぞ？」

そういつてブロントさんは腰の辺りの小袋をひっくり返すと、
明らかに小袋の体積を越す量の金貨がジャラジャラと出てきた。
あまりの量と重量に、テーブルが悲鳴を上げるほどだ。

「す、すごいんだよ…こんな量の金貨見たことないかも…」

「」

インデックスはわあ…と感嘆の声を漏らし、当麻に到っては絶句
している。

ここでインデックスは何かを閃いたのか、人差し指を立てて

「当麻、ここにはなんでもあるんだよね？」

いきなり話しかけられた当麻は、ハッと意識を覚醒させると

「あ、ああ、大体なんでもあるぞ？」

と答えた。

するとインデックスは立ち上がって胸元で右手を握り締め

「だったらこれを換金すればいいんだよ！」

とんでもないことを提案しだした。

「だ、だめだ！これ、良くわからないけど

こんだけの量ならすごい価値があるはずだろ！？

向こうの世界の財政とかおかしくなるだろ！

なあブロントさん！？」

と焦っている当麻と正反対の態度でブロントさんは

「別に良いぞ」

あまりにもしれつと答えた。

超即答である。

「これぐらいならモンス狩れば楽勝にとれるんだが？

おもえらの世界と違ってヴァナじゃ金なんか廃になってくると
無用を長物なんでもsわ」

「で、でも…」

と、まだ悩んでいる当麻に対し

「okといっているサル！！」

の一言で片付けられた。

結果として真昼間から（約12時）換金所で

金貨を堂々と換金し、かなりの量の金を手に入れる。

もちろんそんな堂々とした換金は目を付けられるので、
帰り道に武装無能力集団スキルアウトに絡まれたが
ブロントさんの圧倒的な喧嘩スキルに
アワレにも十数人が病院送りとなった…。

上条当麻はこう語る、

まさに人がゴミのようだった、と。

そしてインデックスはこう語る、
人って空を飛べるんだね、と。

また時間経過だよ（笑）

というわけでブロントさんは大手のデパートにいた、
無論鎧姿である。

腕を組んで服をにらめつけるその姿は、どう考えても不審者です
本当に（ry。

装備の性能などは重視するが、あまり見た目は気にしない
（強い装備の見た目はほめる、ただしナイト装備に限る）。

（【むむむ】ファッソンはよくわからにい…）

三十分ほど悩んだが、いまだに服装を決められずにいると
後ろから視線を感じる。

いや視線は嫌というほど浴びたが、その視線はまるで監視するかの
ように

じつとこちらを見ている感じだ。

振り向いてみるとそこには先日あったジャツジメントと同じ制服を着た

肩まで届く短めの茶髪的女子が身体を物陰に半分隠しながらこちらを見ている。

流石に何時までもジロジロ見られているのは不愉快になったので、

「何じろじろ見てるわけ？ ふるかいなので止めるべき
死にたくないなら止めるべき」

睨まれた女子は「ひっ」と短く悲鳴を上げたが、
果敢にもこちらを睨み返してくる。

少女は物陰から出ると、仁王立ちで堂々とブロントさんの前に立つ。
つ。

「死にたくないなら、ですって？ 不審者の分際で
この学園都市第三位の超電磁砲レールガンの御坂美琴様みさか みことに
よくそんな大口が叩けたもんだわ…。」

対するブロントさんは、はいィ？ と鼻で笑って馬鹿にしたように
言う。

「第三位とか言ってる時点で相手にならないことは証明されたな
本当につよいやつは強さを口で説明したりはしないからな
口で説明するくらいならおれは牙をむくだろうな
おれパンチングマシンで100とか普通に出すし」

「口で説明してるじゃない！ …もういいわ、ジャツジメントを呼ぶ
必要もない。

レベル5の力で私が直々に成敗してあげるわ！」

御坂の頭、正確には髪の毛からバチリと電気が走る。
だがそんな事は気にも止めずに少女を睨む。

「ウザイなおまえケンカ売ってるのか？」

あんまり鬱陶しいとマジでかなぐり捨てンぞこれが最終忠告
前歯ロストしたくないなら早く謝った方が懸命」

その言葉の一つ一つに、御坂の額に青筋が浮かんでいく。
最後の言葉を聞いた瞬間、ブチッという音が周りに響いた。

「…表に出なさい、ここまでコケにしてくれたのは
あの馬鹿以来だわ…」

多少開けた公園に両者が睨み合う。

特に遮る物も無く、喧嘩するならちようどいい環境だ。

昼間とあってまたもや野次馬が集まるが、二人にとってはどうだ
つていい。

二人が考えるのは、

（コイツにレベル5の…いや、美琴様の恐ろしさを思い知らせてや
るわ！）

（コイツハイスラでばこってさっさと服選ぶか）

先に攻撃を仕掛けたのは御坂だった、

コインを指で上に弾くと、演算で照準を合わせる。

次に指に弾かれたコインは雷撃を帯び、超電磁砲と化した。

コインは音速の三倍で男の横を貫く、『はずだった』。

正にスピードは神速、右手を握り締めて振りかぶる。

音速の三倍で飛んでくる雷の弾丸を見据え、思いっきり

「メガトンパンチ！」

右手のパンチで打ち返した。

ガギイと大きな音を立てて打ち上げられたコインは音を立てて砕け散り、

ブロントさんが踏ん張った地面は勢い良く抉れて後方へ吹っ飛んだ。

あまりの衝撃に数秒静まり返った周りの野次馬から、地が震えんばかりの歓声が起こったが、

「うるさい、気が散る。一瞬の油断が命取り」

の一言で黙った。

自分の攻撃を打ち碎かれた（物理的に）御坂は、その事実と一瞬の出来事を

理解するのにも、周りの数枚は掛かった。

やがて理解した途端に全身の力は抜け落ち、力なく地面に座り込む。

「…ア、アンタ、何者？」

喉の奥から搾り出すような声に、ブロントさんは特に何事も無かったかのように無感動で答える。

「ただの通りすがりの古代からいるナイト、
買い物しに來ただけなんだがいきなりお前が絡んできただけ
おるはそろそろ服を買ってと一まのところに帰らないといけ
ないんだが？」

その言葉を、その単語を聞いた瞬間、いきなり御坂は立ち上がって
ブロントさんに問いかける。

「とーまって、上条当麻のこと!？」

その復歸の速さと御坂の口から出た予想外の人物の名前に
おいィ?と呟きブロントさんは答える。

「yes 知り合いだったかと驚きが鬼なる」

「全然驚いてないじゃない…なるほど、あの馬鹿の知り合いだった
か、

あいつの知り合いならどんな奇人変人がいてもおかしくないしね
…。」

「とりあえずおれは用事を済ませたいんだが…」

ぶつぶつと呟く御坂に、ブロントさんは頭に?を浮かべつつも
用事を思い出して、服を買おうとデパートに戻ろうとすると

「ちょ…ちよつとまって!」

と止められた。

「その…迷惑かけたっぽいし、何かさっき悩んでたでしょ？手伝ってあげないこともないわよ？」

何故だかわからないが、もじもじしながらこう言ってきた。

ブロントさんには服装を選んでもらえるので、またとないチャンスである。

「ほう経験が生きたな実を言うとかアクションはどちらかというと全然分らない不具合

なので【はい。】【お願いします。】」

結局御坂は笑いながらも（主に口調を）終わるまで一緒に服を選んでくれた…。

やばい、キングクリムゾン時間経過だ！

「ナイトは感謝を忘れないからなおもえもとつまの家に来るとよいぞ、あいつなら事情を言えば歓迎するだろうな（リアル話）」

とブロントさんがいうと御坂は顔を真っ赤にしてワタワタしだした。

「なな何で私があいつの家になんか…」

拳句の果てに顔をうつむかせて黙り込んでしまう。

これだけ分かりやすい反応をされれば病気でもない限り分かるだろう。

何時までももじもじしている御坂にブロントさんは

「…お前それでいいのか？」

と言うと、うう…とか言いながら

「な、何のことよ…。」

とか言ってきたので、ああこいつはいろいろと駄目だなとブロントさんは確信すると

「俺が礼をしたいんだが？だから遠慮する必要は【いりません】」

といって後ろで何か言ってる御坂の襟を掴んで

暴れる御坂を無視し、ずるずると引きずっていくのだった…。

第八話：なんか指の端っから電気出してきた（後書き）

「というわけでミアカも一緒に晩飯をおごってやろう」

「まあ別に上条さんはそんな大した事無い些細なことを気にする男じゃありませんよーっと」

「…些細なこと？些細なことって…アンタねえ！！」

「なんで！？Why！？美坂さん！？そのビリビリ言ってる頭をなんとか

してもらえませんか！？」

「いっぺん死ねっ！！」

「のわあ！！助けてブロントさん！！」

「次回に続くんだが？」

「ふ、不幸だー！！！！」

第九話…あまり脳なめてると裏世界でひっそり幕を閉じる

「はぁ…不幸だ…。」

「不幸というより自業自得なんだよ…」

「確定的に明らかだantonまはもっと相手の気持ちを考えるべきだと思ったまあ一般論でね？」

「名前を含めてすっげー馬鹿にされたな…」

三人は現在銭湯に向かっていている途中である。

実はつい先ほどの食後に当麻の不必要な発言で御坂の怒りを買い、電撃によって風呂場が破壊されたのだった。

その惨状は中々酷いもので、もちろん風呂場だけでは収まらずたくさんの食器が爆散し、もちろん電撃による攻撃なので電化製品は揃いも揃って煙を吹いたのだった。

とりあえず崩れ落ちる当麻を無視して御坂を嚴重注意した後、量の門限があるらしかったのでとりあえず帰らせた。

減算進行形で口から軽く白い物を吐き出している当麻だが、ブロントさんやインデックスはあまり気にした様子は無い。

「私は『せんとう』って所は初めてだから楽しみかも！」

「銭湯が初めてなら良いことを教えてやろう
銭湯にはコーヒー牛乳というものがあってだな…」

時間経過でござるよ^^

「すごかったんだよ！こーんなおっきなお風呂だったんだよ！
これがカルチャーショックって奴なんだね！」

インデックスは両手を大きく広げて喜んでみせる、
隣の男子風呂まで聞こえるぐらい驚いていたので相当衝撃的だった
のだろう。

「お前って確かイギリスから来たって言ってたよな？
イギリスってたしかせまっくるしいユニットバスがメジャーなん
だろ？」

と風呂に入ることと復活を果たした当麻が軽い調子で言うと、
インデックスは何故か顔を曇らせて困ったような顔をする。

「その辺は分からないんだよ、気がついたら日本にいたからね。」

え。という声の後、当麻とブロントさんは首をかしげる。

インデックスはそれを見て傍から見ても痛々しく無理矢理作った
ような笑みを浮かべた。

「私、生まれはロンドンでセントジョージ大聖堂で
育ってきたらしいんだよ。どうもこっちに来たのは
一年くらい前かららしいんだね」

「どうも？らしい？何故そんなに曖昧なのか理解不能状態」

そうブロントさんが答えると、インデックスは少し顔を下げ、息を整えると、つらつらと語りだす。

「私は一年位前からの記憶がないんだよ、最初に目を覚ましたときは自分の事もわからなかったのに魔術師とか、禁書目録とか必要悪之教会とかインデックスネセサリウスそんな知識ばかりがぐるぐる回って…本当に怖かった。」

「じゃあ、どうして記憶を失っちゃったかもわかんねえってことか？」

うん、とインデックスは痛々しい笑みを浮かべつつ短く答える。
当麻はそんな不安な事があるというのに、笑顔を絶やさない
インデックスが無理をしていると感じた。

自分たちに心配をかけまいと無理をしているのだと思うと
自然に顔に出てきてしまう。

当麻は右手を強く握り締め、奥歯をこれでもかと噛み締めた。

交差点に出ると、ブロントさんが何かを思い出したように後ろを振り返りながら、

「悪いが少し用事が出来てしまった感先に家に帰ってほしいんだが…」

「ん？何か用事なら手伝おうか？」

と当麻が答えたが、ブロントさんは即座に首を振るとインデックスの方を見る。

「いや心配は【いりません】それにいんデックすも眠そうだしな」
インデックスのほうに目を向けると目を擦りながらうとうとしていたので、

「わかった、なるべく早く帰ってくれよ？」

とだけ言葉を残し当麻とインデックスは家に帰っていった。

二人が見えなくなると周りから人の気配が消える。

否、人が消えた。

シンと張り詰めた空気の中、ブロントさんは腕を組みつつ周りを
見回し

ほう、と最近になって何度目かの感嘆の声を上げる。

「魔術はえごいなこんなことまで出来るのか

見事な仕事だと関心はするがどこもおかしくはないな」

ブロントさんが呟いていると、前から足音を鳴らして一人の女性
が歩いてきた。

細身で日本人にしては背が高く、どこか大人びている魅力を持っ
ておる。

が、Tシャツは腹の所で綺麗に横に裂かれて右側で縛られていて、
ジーンズは片方を根元からバツサリ切つてあると言う服装が、
完全に怪しい方向へと雰囲気を変換している。

何よりも背に負っている二メートルはあろう刀が女性の雰囲気

冷たくさせた。

「驚きました、いつから監視されていることに気がついていましたか？」

女性の凜とした鈴の音のような声、されど完全に凍った声が
ブロントさんに向けられる、が

「朝起きたときからだか？」

あっけらかんとブロントさんはさも気にせずに答える。

まるでその程度なら日常で慣れ親しんできた、とでも言うかのよう
に。

そのあっさりした声色に、女性の雰囲気殺気立つ。

「…あの少年も謎が多いですが、私たちにとって最も危険なのは
どうやら貴方のようですね」

女性はブロントさんを鋭く睨むと刀に手を伸ばし、構えた。

しかしブロントさんは構えもせず、その場に突っ立っているだけ
だ。

「O i みう s ミス 俺はお前とは戦うつもりはにいたが？」

ブロントさんの言葉に女性はむ、と短く声をつまらせると警戒は
弱めずに

刀から手を離す。

「…ではあの子を引き渡すと？」

「そうは言っていないんだが勝手に人の意見を決める
浅はかさは愚かしい

：インでウスの記憶を消したのはお前らだろ？」

いきなりの質問に女性の目がこれでもかと開かれる。

しかし顔を俯かせて何も言わないところを見ると正解、と言うことだろう。

「…何故。」

「俺は自慢じゃないがPT組んでる時に「ヴァナの新一ですね」と言われた事もある

まあ確信はなかったがお前の今の態度でバレバレになったな
魔術なら記憶消すこともちよろいもんだという意見」

ブロントさんは立ち尽くしている女性に対し、間を空けずに自分の考えを

明かしていく。

「にnでックスの十万三千冊を狙うのは勝手だが

記憶を消す意味がわからん

俺は心が寛大だからな話すべきそうすべき」

そこまで話し終えると、女性は肩の力を抜き、完全に警戒を解いて諦めたようにブロントさんに話し始めた。

「『完全記憶能力』、というものをご存知ですか？」

「ああ知ってるぞ俺は山脈が豊富だからな
フレにも何人かそういった類の奴がいる」

「そうですか：ではお話致します。」

そこから女性は話し始めた。

インデックスが完全記憶能力者であること。

インデックスの脳は十万三千冊の魔導書のせいで85%が使われていてパンク寸前だということ。

残りの15%では1年しか脳が持たないということ。

それを防ぐ為に自分たちはインデックスの記憶を消し続けてきたということ。：

「：分かりましたか？ 私たちはあの子を早急に保護し

記憶を消さねばなりません、そうしないとあの子は死んでしまう！」

女性は叫ぶがブロントさんは動じない、ただ一言だけ

「はいイ？」

と軽い調子で返した。

その何も分かっていないような感じに、女性の言葉はどんどんと荒さを増していく。

「確かに、この行為はあの子の意思に関わらず行われます。

しかしこれをしないとあの子は死んでしまうのですよ！

それでも貴方は止めるのですか！？」

女性は更に声を荒げる、しかしブロントさんは肩を落としてやれやれといった感じにため息をつく。

「俺が言いたいのはそれじゃないんだが？じゃあお前は完全記憶能力持ったら

六年くらいしか生きれないとか言うつもりかよ

おもえは人間の脳を舐めすぎだろ

人間の脳に憑いて話すからよく聞いておくべき」

騎士説明中・・・

「人間の脳はそこまで貧弱じゃないしそもそも教会？とかいう親友であるお前らに

わざわざインデクスのことをやらせるようなやつらが親切で

真実を話すはずがにい汚いやつは何処までもきたない」

ふう、と息を吐いて説明を終えるブロントさんに対し、女性はこの世の終わりの話を

聞いたように肩を震わせて、自分の手を血が出るくらいに握り締めて

「じゃ、じゃあ私達が今までしてきた行為は…私は、私は！！」

慟哭した。

今までその行為を彼女を救う為だと割り切ってきた、その行為が彼女を傷つけてきたただだと知った今の悲しみは

想像を絶するものだろう。

頭を押さえて自分自身を攻め続ける女性に、ブロントさんは真剣みを帯びた声で、

「…ネガネガしている暇はいぞ

おもえの経験どおりならあいつの身体に異常が起きるのはあとどのくらいかわかると思うんだが」

女性はそこで顔をあげる、赤く充血した眼の下には確かに涙腺が見て取れた。

「あと一週間くらいでしょう…。」

喉の奥から搾り出したような黒ずんだ声に、ブロントさんはん、と答えて結論を出す。

「絶望するには早すぎるという意見ここは学園都市でなんでもあるらしいから
足掻くには十分だな」

ブロントさんは女性の方に歩み寄ると、右手を差し伸べた。

「落ち込むのは勝手だが今は時間がないので早くも終了ですね

乙麻に事情説明して手伝わせるから

おもえらも魔術で何か出来ないか探すことを進める」

それは女性にとってどれだけの希望を秘めていただろうか。

本来、これは魔術側の問題だが、科学側のことは信用できないが、ブロントさんの言葉には確かに、希望があった。

ブロントさんはそれだけ言ってその場を立ち去ろうとするが

女性が後ろから声がかかった。

「あ、貴方の、名を教えてください！」

その声にブロントさんは後ろを振り向かずに、軽く、明るく答える。

「俺はブロント、呼ぶときはさん付けでいい」

その声にはしっかりと、希望が満ち溢れていた。

第十話：敵とPT組むのも稀によくある話

（当麻の部屋）

現在時刻は午前0時、テーブルにブロントさんと当麻が向かい合
って座っている、

インデックスは隣の当麻のベットを占領し、寝息を立てていた。

「ブロントさん、心配要らないって言ってそんな事やってたのか…。」

当麻は自分が頼りにされていないように思えて、不快感をあらわ
にし

ブロントさんを睨むが、ブロントさんはジト目で

「とつまがいたら話し合いにならに気がした（予知夢）
おもえ絶対殴りかかるだろ…」

そ、そんなことしませんのことよ？と声をひっくり返しながらい
う当麻に

やっぱりか、的な感じでふう、と息をついた。

図星発言に当麻がむむむと声を出すブロントさんはあまり気に
しない様子で

「そるはともかくインdケクスを助けるのを優先すべきだと思った
まあ一般論だね？

今悩んでもしかたにいで明日あいつらに会って詳しく話を聞い
てくるからよ」

当麻も一緒に行くことを希望するが、インデックスの様子見とインデックスに怪しまれない為の言い訳係として残ることになったのだった。

なんだか上手く丸め込まれた気がする、と言う当麻の意見はさておいて

ブロントさんは壁にもたれかかると、静かに寝息を立て始めた。

翌日ですしおすしー

早朝、当麻やインデックスが目覚ます前に目を覚ます。

壁に寄りかかったまま寝たので立ち上がるとバキバキと骨が音を鳴らしたが、

肩を数回回して直にさつさと外へ出る。

近未来都市、といっても漫画に出てくるようなヒュンヒュン車が宙を

走っているわけでもなく、小鳥のさえずりが聞こえるさわやかな朝だ。

ゆっくり歩いてあの公園（ep8参照）に行くと、ただでさえ少なかった人の気配が

一瞬で消えると同時、昨晚の女性がおずおずと駆け寄ってくる。

「ブ、ブロントさん：おはようございます。」

なんだか恐縮している、と言う感じであり良くは無かったが、まあいいかと

適当に考えて打ち切った。

「【おはよう。】そういえばまだお前の名前を聞いてなかったんだが…」

ブロントさんが問うと、何故か女性は頬を赤らめると慌てた様子で少し早口で答える。

「そ、そうでしたね。
かんざき かおり
神裂火織と申します。」

「ほむ、よろしくなかmざき」

軽い挨拶の後、さっと右手を差し出すと、またも慌てて神裂が右手を差し出す。

さくつと握手を終えると、神裂の後ろからのんびりステイルが歩み寄ってきた。

その様子を見て、数秒で神裂の視線は鋭くなり真剣みを増す。

「ステイル、上の返事はどうでしたか？」

神裂が問うが、ステイルは加えていたタバコの煙をため息のように吹くと

数回首を振った。

「だめだね、何の返事もよこさないよ。」

ステイルは両手を挙げると「お手上げだ」と呟く。

「一体何の事を言っているのか理解不能状態」

説明してくださいあ」

「私たちを騙していた件と、インデックスにかけられている魔術を解く方法について、私達の組織の上層部に聞いたのですが、返事はもらえなかったそうです…。」

魔術と言う言葉に反応し、少しブロントさんは顎に手を当てて考え出す。

少しして顔を上げると、

「おいィ？」

インデックスにかけられてるのは魔術【何ですか？】
なら壊す方法があるんだが」

ブロントさんは神裂とステイルに、当麻の右腕の説明をすることにする。

その特殊効果で、歩く教会を壊したことも含めて。

どうやってこれが手抜きって証拠だよ
ただのカットであって手抜きとは無関係（必死）

「なるほど…僕の魔術が消されたのも
その右手の効果って訳か。」

「しかしただの少年が魔術に触れるだけで破壊できるなど…。」

ステイルは納得したようだが神裂はまだ納得できていないようだった、

そこでブロントさんが提案する。

「納得できにいたら試せばいいと思った
かんあきはまだとあまに会ってないからな」

カ
ッ
ト
w
w
w
w
お
k
k
k
w
w
w
w
w

時刻は深夜に入る少し前、インデックスを取り囲むように四人で座る。

ブロントさんが当麻の肩を叩くと、当麻は喉を鳴らし覚悟を決める。

「よし、んじゃ触るぞ…。」

インデックスの胸の辺りを右手で触るが、これといった変化は表れない。

他にも頬、頭、足などを試してみたが、結果は同じだ。

「ステイル、ルーンで刻印を探し出せませんか？」

神裂がステイルに提案すると、ステイルは頷き呪文を唱え始めた。すると一枚の紙がステイルの懷から浮き上がり

インデックスの口元に張り付いた。

ふわふわと漂う紙を取り、当麻が口元に右手を当てる。
が、これも変化が無い。

「口の中じゃいか？」

ブロントさんに言われて指を口の中に入れる、
ステイルの視線が嫌に殺気を帯びているのは気のせいではないだろう。

妙な生々しさと口の中の湿度を嫌に感じつつも、指を入れていく。
少し奥に指を入れるとなにか妙な感覚が指に当たった、と同時に
当麻が後ろの壁まで吹き飛ばされ、慌ててブロントさんが受け止めた。

まるで操り人形が首を引っ張られて起き上がるように、頭からふわりと

インデックスが起き上がる。

インデックスのほうに目を向けるとインデックスの顔は
いつものような無邪気な顔では無かった。

光の無い虚ろな目はこちらを睨むように観察するように、
殺意を剥き出しにするようにこちらを見ていた。

『警告 第三章 第二節第一から第三までの全結界の貫通を確認。
再生準備————失敗。

自動再生は不可能。

現状10万3000冊の書庫の保護のため、侵入者の迎撃を優先
します。』

機械のような無機質な声が部屋に響く。
死刑宣告の様に。

第十一話…汚い運命をズタズタにするんじゃないしてしまうのがナイト

『書庫内の10万3000冊による結界を貫通した魔術の術式を逆算——失敗。』

該当する魔術は発見できず。

術式の構成を暴き、対侵入者用のローカルウェポンを組み上げます。』

だらりと宙にぶら下がったインデックスの周りに、

黒い稲妻のようなものが無数に走っていく。

それは数秒もしない間に形を整え、インデックスの身長のお三倍はあろう

魔方陣へと変貌した。

『——侵入者個人に対して最も有効な魔術の組み合わせに成功しました。』

これより特定魔術『聖ジョージの聖域』を発動。侵入者を破壊します。』

インデックスが人間の声とは思えない、澄んだ不気味な声で唄う。

小さなアパートの一部屋に反響し、直接脳に響くような錯覚まで覚えた。

バキリ、とまるで新聞紙などに両手を突っ込み、左右に広げた様な亀裂がインデックスの前に現れる。

獣の息がもれるそれはインデックスを守る防壁、等という生ぬるいものではない。

見るだけで体の、脳の、心の、精神の最も奥の何かが揃って警報を鳴らす。

アレを除いては駄目だ。

心が死に、脳が砕け、体のはじけ、精神が崩壊する。

ブロントさんの冒険者としての危機察知能力が当麻を後方へと突き飛ばし、

身体をランパートで包み込んだ。

突如。

轟音と共に亀裂から光の柱が身を乗り出した。

本能的にブロントさんが盾で受け止めるも、光の柱は易々と

ブロントさんを当麻のいる後方へと押しやった。

慌てて当麻が右手を光の柱に突き出して応戦するも、依然変わりがなく

光の柱は二人を飲み込もうとする。

光の柱はその力も大きさも増していくばかり。

ランパートが切れ、ブロントさんの体制が崩れる。

当麻の右手が悲鳴を上げる。

その二人の姿は、あまりにも無防備で、

（おいィ：！？ちょっとこれはsyレならな——）

（やべえ！押し切られ——）

「――Fortis931、イノケンティウス魔女狩之王！！」

部屋全体にルーンのカードが舞い、二人をかばうように両手を広げた炎の巨人が地面から這い出た。

巨人は光の束を抱え込むようにその身に受ける。

「さっさと行け能力者に騎士！！あの子を助けたいなら

一刻も無駄にするな!!」

二人はその言葉に答えず、インデックスの方へと向きを変える。

走り出そうとする当麻の首元を掴んで、ブロントさんが構えた。

だが、そこにも無常インデックスの放つ光弾が襲い掛かる。

二人にはどうすることも出来ない、もちろんステイルにも。

その光弾は二人に襲い掛かり、

「Salvere000!」

真っ二つになり消え去った。

「早く行って下さい! あの子の制限時間^{リミット}はとっくに超えています!」

ブロントさんが大きく当麻を振りかぶる。

当麻もブロントさんが何をやろうとしているのか分かって、
歯を食いしばった。

「マジで――かなぐり捨てンぞォ!!!!」

勢い良く当麻をブン投げる。

四メートルはあろう距離は一瞬でゼロとなった。

インデックスが振り向く暇も与えず。

魔術師達が声を上げる暇も無く。

当麻は右手を突き出し、

それはインデックスの額にぶつかった。

甲高い音が部屋に響く。

裂け目は何も無かったように消えた。

魔方阵は砕け散った。

光の柱は空気に溶けた。

倒れこんだインデックスと勢いを殺せず壁にぶつかり撃沈した当麻を

抱え込み

「これで終わったな英語で言うとなっぴーエンド」

穏やかな笑みで終止符を打った。



〳後日、当麻の部屋〳

ピンポンとチャイムが部屋に響く。

台所にいた当麻は、リビングへと顔を出した。

「ブロントさん、今手が離せないから郵便とってきてくんない？」

フライパンを片手に当麻が頼む、
どうやら今日の昼食は肉と野菜の炒め物のようだ。

いまだ熱を持っているそれはジュウジュウと音を立てて香ばしい香りを出していた。

「俺も手が離せにい（物理）」

ブロントさんはリビングの机をどけて、腕立て伏せをしていた。その上にインデックスが座ってテレビを見ている。

「じゃあ私がいくんだよ」

インデックスがブロントさんの背中から退きつつ玄関に向かう。

数秒後、小さな紙を右手でひらひらさせて戻ってきた

「とうま、ブロントさん、すているって人から手紙だよ」

ブロントさんがインデックスから受取った手紙にはインデックスの事とそれを取り巻く環境、恨み言と一言の礼が書かれていた。

後、神裂の「恩は必ず返しますので。」の一言も。

「まったくあいつも素直じゃないな」

「「確かにな（同感）」

「ねーすているとかんざきって誰？」

うんうんと頷き合っている二人にインデックスが問うと、当麻が答える。

「仲間だよ、俺とフロントさんと…お前のな。」

第十二話：これって直接的にもデントだろ…（前書き）

感想ほしいなー（チラッ

「そのふざけた願望^{げんそう}をぶち殺す！！」

第十二話：これって直接的にもデントだろ：

（中央通り）

現在時間は午後の二時、夏休みに入ったが
今日は比較的涼しく散歩するには絶好の環境といえるだろう。

そんなわけで現在ブロントさんと神裂は中央通りのど真ん中、
たとえ鎧が無くなってもブロントさんは長身でガタイもよく、
耳もとがって銀髪：は此処、学園都市ではあまり珍しくないが
身体からオーラの的なものを放ちそうになっていて
一言でまとめるととにかく目立つ。

その隣を歩く神裂も、日本人女性としては身長も高く、
刀は持ってきてはいないのだがその…。

うん、目立っている一番の理由は間違いない
神裂の服装だ、間違いない。（大事なことなので（編集：略））

まあその目立つ云々はともかくとして、
何故ブロントさんと神裂が一緒に歩いているのかという…

はあああああああ！カット！

（某公園）

「おいィ：呼び出すのは勝手だがそれなりの時間があるでしょう？」

現時刻午前四時、寝起きドッキリよろしく

いきなり窓から侵入してきたステイルに

床で寝ていたブロントさんは無理やり連行される羽目になった。

「仕方ないじゃないか、今更あの子に合わす顔もないしね…。」

寂しそうにステイルが言う。

「事情を説明すればインデックスも納得して…。」

と当麻が説得を試みたものの、

「後ろから切りかかっておいて自分たちは敵ではありませんでした、と頭を下げに行けとでも言うのですか？」

と神裂に完全論破され、結局二人はインデックスに顔を合わせずにいる。

「じゃあ一体なんの用ですかねえ？」

真夜中に叩き起こされ（これは本当のことであって比喩とは無関係）

あぐくベランダから蹴り落とされたブロントさんは眠いのも相まっていつにも増して不機嫌だった。

「神裂がどうしても君に借りを返したいって言って聞かないんだよ…。」

横を見ると神裂が居心地悪そうに顔を伏せている、
こんな時間に起こしてしまったことを悪く思っているのだろう。

「別に俺は何とも思っていないから
あんまり真夜中に粘着されると俺の睡眠時間が
雑談でマッハなんだが…」

「睡眠など2時間あれば上等だろう、
まあそんな訳だから明日神裂に付き合ってやってくれ。」

うはw w w w場面移動k t k r w w w w w w

で、現在に至る。

ちなみに神裂は一晚予定を考えたがまったく
経験が無いため思いつかず、ノープランだ。

（ど、どうしましょう…。

見栄を張って「明日のことは私にお任せください（キリッ」
なんて言ってしまったけど…。）

「と、とりあえず食事でもどうですか？」

その場しのぎで食事に誘ってみたが、
意外と腹が減っていたのかブロントさんが反応する。

「ほm飯にはどちらかというと大賛成だなそうするべき!」

ブロントさんが喜ぶので神裂も安堵する、
さっそく店に入ろうとしたが――

「おまちなさいな、ジャッジメントですよ!」

――どこかで聞いた声に止められる。
この口調もどこかで…。

「おもえは…たしかくろいだったか?」

「白井ですわ!し・ら・い!

まったく、ジャッジメント支部から脱走しておいて
堂々と昼間からコスプレ仲間とデートとは…
ジャッジメントに対する宣戦布告とお見受けしましたわ!」

その言葉で神裂の顔がすごい勢いで赤くなり、
終いには蒸気まで吹き出す始末。

「デ…デート!!?」

「あら、違いましたの?
…まあとりあえずジャッジメント支部に
来てもらいますわよ!」

黒子が構えると、野次馬の中から一人の
少女が近づいてくる。

「黒子とブロント…さん?」

「お、お姉様!？」

そこには騒ぎを聞きつけてきた御坂がいた。

「みあsかか久しぶり…でもにいな」

「あんたらこんなところで何やってんの？」

「ああこるは…」

一話の間に3回カットだって!？
こんなの普通じゃ考えられない…。

〓ここまでのあらすじ〓

情報収集↓黒子の粘着↓連行↓脱走

↓服買いに行く↓御坂の粘着↓カカッと勝負

↓服選んでもらう↓神裂と出かける

↓黒子の粘着↑今ココ

「…というわけなんだが」

「自業自得ね、諦めなさい。」

即答である、その間実に0.1秒。
御坂はジト目で呆れたように言う、
いや実際呆れられてる。

「助ける気は無いのか；」

「何か言った？」

「助けてくだしア；；」

そこまで頼むと御坂はため息を一つ吐いて
視線を黒子に向ける。

「まあこいつも悪気はなかったようだし、許してやってくんない？」

「しかしお姉様！コスプレの件は見逃しても
ジャッジメント支部脱走までは流石に…。」

そこでブロントさんがいいことを思いついた。
先ほどから黒子は御坂のことをお姉様と呼んでいる、
ということは慕っているのだろう。

「おい黒子^{ほくろ}」

「ちよっ！？その間違いだけは許しませんわ！」

「いいからちよっと耳貸すべき」

ブロントさんは口元を吊り上げると、
黒子に耳打ちをする。

「そういえばみあかと夕食を一緒に食ったやつがいたな」

ブチッ

「○○地区の○○の○にあるマンションの○号室に住んで――」

――男らしいぞ（リアル話）」

此処まで話すと黒子は鬼の形相でテレポートした、
まさに修羅の如きオーラを放って。

神裂も御坂もそのオーラに怯んでいる。

「アンタ一体何話したの…?」

「おるはただ事実を話ただけであって
特に何もしてないんだが?」

同時刻、○○地区の○○の○にあるマンションの○号室から
この世の終わりのような悲鳴が響いたという…。

第十二話：これって直接的にもデントだろ…（後書き）

「つうまの姿が見えない不具合」

まあ半分ギャグ小説なので来週には
復活すると思います。

あ、感想や質問お待ちしております。

作者にもキャラにも送ってもらって
いいんじゃない？（チラッ

第十三話：エルナイトのINTが高いことが証明されてしまった感（前書き）

やあ（・ω・）

ようこそ、とある騎士【ナイト】の黄金鉄塊【メイン盾】へ。

この番外編はサービスだから、

まず読んで落ち着いて欲しい。

うん、「また」なんだ、済まない。

仏の顔をつて言うしね、謝って許してもらおうとも思っていない。

でも、この前書きを見たとき、君は、きっと言葉では言い表せない

「いらつき」みたいなものを感じてくれたと思う。

殺伐とした世の中で、そういう気持ちを忘れないで欲しい

そう思って、この十三話を作ったんだ。

じゃあ、小説を書こうか。

あ、前回の続きとは無関係です。

神裂さんとの発展を期待した人には

申し訳ないです；

第十三話…エルナイトのINTが高いことが証明されてしまった感

「異世界から来た白銀の騎士…か。」

男にも女にも見え、大人にも子供にも見え、
聖人にも囚人にも見えるその人間、アレイスター・クロウリーは
窓もドアもないビルの中、緑色の手術衣を着て
赤い液体に満たされた巨大な円筒器に逆さまで浮かんでいる。

「興味深い、少し泳がせて見るのも悪くない…。」

アレイスターは嬉しそうに微笑を浮かべた。

〈当麻の部屋〉

「なんかあっさりとID発行できたな…、
話が上手すぎるんじゃないか？」

ブロントさんが「ジョブ無しとか一巻の終わり」とか言い出した
ので

恐る恐るID発行をしにいったのだが…
本当にあっさりとIDが作られたので肩透かしを食らって
帰ってきたのだった。

「きた！IDきた！これでジョブに就くる！」

とブロントさんには大歓迎状態だったが。

「つーか職っていつでも一体何の職に就くんだ？」

「やはり俺はリアルではモンクタイプだからな
警備員とかにいのか？」

「アンチスキルがあるけど、あれボランティアだからな…。」

当麻は深くため息をつく、
そういえばブロントさんに出来ることを
当麻は殆ど知らない。

「やっぱ此処は学園都市だからな、
教師とかがあるけど…ブロントさんって
勉強できんのか？」

まあ本人は不良だとかモンクだとか言っているので
どうせ出来ないだろうけど、と言おうとしたが――

「できるぞ」

「えっ。」

「勉強できる」

――2秒で否定された、いやまだ言っていないが。
試しに宿題の数学ワークを渡してみたところ
現役学生でも一時間かかるんじゃないかってワークを
見事に十九分で終了させた。

おまけに全問正解で。

とりあえず教員免許を取るために

学園都市の教育議会的なところに向かわせたところ
資格試験を五百点中四百三十九点で一発合格してきたのであった。

本人曰く「歴史とか知らないんだが…」らしい。

第十三話：エルナイトのINTが高いことが証明されていた感（後書き）

今回は短編でしたね：

どうしてもブロントさんを仕事に就かせナイトと
思ったので…。

じ、次回からは本編に戻ります！

お楽しみに！

第十四話…またトラブルだよ（笑）（前書き）

ネットの回線がいきなり切れて

3時間かけて出来た小説が消えた…

直書きはやめようと思った（リアル話）

しかし！退かぬ媚びぬ省みぬ！

低脳に失踪は無いのだー！

さあ、もう一度書きましようかね…。

第十四話..またトラブルだよ（笑）

「はあ、まさか参考書如きが三千六百円もするとは…。」

現在三人は当麻の補修用の参考書を買いに来ている、それは当麻の担任の小萌先生から

「上条ちゃんはお馬鹿さんですので参考書を買ってきて先生と一緒に勉強をするのですよー！」

とラブコール電話がかかってきたからである。

インデックスは三千六百円あったら何が出来たかと当麻を攻め立てて、その横からブロントさんは苦笑をしていた。

「分かってるよ！普段から勉強してりゃーこんなことには…」

当麻は隣のインデックスに話しかけたつもりだったがそこにインデックスの姿は見えない、その少し奥にアイスクリームの看板を眺めているインデックスの姿が映った。

「おいィ：アイスが欲しいのは勝手だがそれなりのねだり方があるでしょう？」

ほらこれでアイス買ってきて良いぞ（寛大）」

あとブロントさんは「かなりの天才だ」と教育議会に評され、学園都市でも五本の指に入る名門私立中学の常盤台中学に就くことになった。

仕事は二学期からだ、そこに就くと言うだけで補助金が膨れ上がったのだった。

（ブロントさんのお金なので生活金以外は勝手に使えないが。）

「わ、わたしはアイスが欲しいなんて一言も言っていないんだよ！」

「ならなんでもおもえは俺の手にある小銭に手を伸ばしてるんだよ
見ろ見事なカウンターで返した」

結局しつこくあーだこーだ言っているインデックスに

「別に俺はいらないんなら買わなくていいんだが？」と言うと
見苦しくねだってきたのでアイス屋に向かったが…

「お客様各位

誠に申し訳ございませんが

店内改装のためしばらく

休業とさせていただきます」

上記の通り休みだったわけである。

仕方ないので近くにあったジャンクフード店の
シェイクで我慢してもらうことにした。

注文が来たので席に座ろうと思ったが一階には

空席が見当たらなかったの、二階に行く

インデックスが呼んでいた、どうやら空席を見つけたようだ…、
と思ったのだが先客がいた。

巫女服を着た黒髪長髪の少女が机に突っ伏している。

（怪しい…怪しすぎる！）

何か苦しんでいるようなのでとりあえず話しかけてみることにした。

まずは先陣を切って当麻が話しかける。

「ど、どうかした…？」

「…食い倒れた。」

驚きの答えが返ってきた。

このまま固まっても埒が明かないので今度はブロントさんが話しかける。

「なんで此処で食い倒れるのか理解不能状態話すべき死にたくないならそうすべき」

すると少女は苦しそうに話し出す。

「…一個百円のハンバーガー。」

「ほむ」

「お徳用のクーポンが沢山会ったから。」

「うむ」

「とりあえず三十個ほど頼んでみたり…。」

「お前それでいいのか…？」

ブロントさんがそういうと少女は更に落ち込んで机に顔を埋める。

これ以上フォローできないと判断したブロントさんは復活した当麻に任せる。

「いや、まあその…」

「やけ食い。」

「はい？」

「帰りの電車賃。六百円。」

「…それで？」

「全財産。五百円。だからやけ食い。」

それだけ言う少女は黙りこくってしまった。

「そもそも百円ぐらい借りられにいいのか？」

ブロントさんが案を出す、

少女は「おお！」と声を上げ顔を上げる。

「それはいい案。」

少女は整った顔立ちをしていてかなりの美少女だった。

「…。」

「なんでこっちを見てるんディスかねえ…」

「百円。無理？」

さっそく案を採用してきた、案を出した本人に。

「【むむむ。】すまにいがシェイクで小銭を使ってしまった感」

「じゃあ。百円。」

「俺！？悪いが参考書買っちゃったから一切余裕はねえ…。
第一他人の巫女さんに貸す金は上条さんにはありません！」

「私。巫女さんじゃない。」

「はあ？どっからどう見ても巫女さんじゃねえか。」

「私。魔法使い。」

はあ？となってる当麻、ほう…と感心してるブロントさん
そしてその言葉に一番反応したのは――

「魔法使いー！？」

――もちろんインデックスである。

「魔法使って何！？曖昧なこと言ってないで、
専門と、学派と、魔法名とオーダー名を名乗るんだよ！おバカ！」

インデックスの言葉に少女は首をかしげている。

「インエウス落ち着けお前周りの迷惑
考えたことありますか？」

周りを見てみると迷惑している客…とは無関係の
黒服スーツたちが集まっていた。

すると少女は立ち上がり黒服の先頭に

「あと百円。」

と言い出した、黒服も黙って少女に百円を渡す。

「この人達、お前の知り合いなのか？」

当麻が聞くと、少女はあっさり

「塾の先生」と答えて、外に出て行ってしまった。

「おいィ…一体なんだったんですかねえ…。」

i d o c u t

三人はたわいも無い雑談をしながら家に帰っていると、
インデックスが急に近くに生えていた木の根元に走っていく。

二人もそこに近づくと、そこには

「どなたか ひろってください」

と書いてあるダンボールと、捨て猫と思われる猫がいた。

「捨て猫、か…。」

「捨てた奴絶対忍者だろ…」

「とうまー、ねー」

「駄目っ。」

インデックスが言いたい事を悟ったのか、
当麻は即効で牽制する。

「とうま！わたしはまだなにも言っていないんだよ！」

「飼うのは駄目！」

凶星だったようで一瞬たじろぐが、
やはり飼いたいのかインデックスは食い下がる。

「なんで！？どーしてスフィックス飼っちゃいけないの！？」

「おいィ？早速名前付ける恥知らずなシスターがいた！」

「学生寮はペット禁止！」

当麻がピシャリと言い放つも、インデックスも下がらず

「飼う飼うー！」と駄々をこねていると、

その声に驚いたのか、スフィックスは何処かへ走っていった。

インデックスが慌てて追いかけようとしたが
インデックスは急に立ち止まると周りをきょろきょろしだした。

「…近くで魔力の流れが束ねられてる。

誰かが魔方陣を仕掛けてるっぽい！

とうまとブロントさんは先に帰ってて！」

と言うとインデックスはなにか言う暇もなく
走っていつてしまった。

インデックスが見えなくなったとたん周りから人が消える。

「なんだ…これ…。」

「こるは…人払いのルーンだったか？」

「ご名答、上条当麻には見せてなかったな。」

二人の後ろからステイルが歩いてくる。

「久しぶりだね、上条当麻と、ブロント…さん。」

ちなみにステイルは最初はブロントさん呼び捨てにしていたの
だが

最近になって神裂にも

「さんを付けてくださいデコスケ！！」

と言われるようになったので、渋々さん付けにしている。

「ほむステウルか久しぶりだな」

「で、俺たちに何のようだ？」

「ん？ちょっと内緒話をね。」

ステイルは懷から大きな封筒を取り出すと、封筒を上に掲げ、「受取れ。」と呟く。

するとステイルを中心に資料の紙が宙に浮き、回る。

「君たちは三沢塾って進学予備校の名前はしってるかな？」

ステイルの問いにブロントさんたちは首をかしげる。

「俺の記憶にはなにもないな…」

「俺も知らないな、その三沢塾ってのがどうかしたのか？」

当麻が問うと、ステイルはため息をつきながら答える。

「そこ、女の子が監禁されてるから。」

「か、監禁!？」

「ちょっとstyleならんしょそれは…?」

慌てる二人、そりゃあ知らない塾の名前出されて

女の子監禁されてますー何て言われたら動揺もするだろう。

「どうやら今の三沢塾は、科学崇拝を軸としたエセ宗教と化しているらしくてね。

教えについてはともかく、その三沢塾が乗っ取られてしまったの

さ。

今度は真正銘本物の魔術師、いや
正確にはチューリヒ学派の錬金術師にね。」

「錬金術師い？錬金術師ってあれか？
鉛を金に変えたり不老不死の薬調合したりする奴か？」

「ああ、胡散臭い響きだとは僕も思うよ。」

ステイルはタバコの煙を出しつつ答える。

「そるで俺たちに何でそんな話をするんでいすかねえ…」

「それはこの件がどうにもめんどくさい話でね…
君たちを利よ…君たちに協力してほしくてね。」

「いま利用って言いかけたよな！？てめえ俺たちを
使う気満々じゃねえか！！」

額に青筋を浮かべて怒鳴る当麻、ブロントさんは
やっばりかと言わんばかりの表情でステイルを見ているが。

「まあ、君たちに拒否権はないよ？
君たちが拒否するならインデックスは教会が回収…
ということになってるからね。」

落ち着いてそういうステイルに、当麻はもう殴りかからんばかりの
勢いで拳を握り締めている。

「そるなら話を続けてくだしア」

「…分かった。」

錬金術師の名前はアウレオルス・イズードという。

三年前から行方をくらませていてね、

三年間何処で何をやっていたのか…それがひょっこり戻ってきたって訳だ。」

「何の為…。」

「そう、重要なのはその理由さ。」

奴の目的は三沢塾に捉えられていたディープブラッドなんだ。」

「ディープブラッド？」

「その子が持っている『ある生き物』を殺す為の能力のことさ。」

「なんだよ、ある生き物って…。」

「呼び方は色々だけど、簡単に言えば『吸血鬼』のことだよ。」

「き、吸血鬼!？」

当麻は今の発言にさっきの錬金術師より胡散臭さを覚えた。

「そんなものが本当にいんのか？」

「僕たち魔術師でさえ詳細がつかめていない。

だが、ディープブラッドとは即ち吸血鬼を殺す為の力だ。ならば吸血鬼と先に出会わなくてはならない。」

「つまりそのアルエオウフが吸血鬼を狙ってるって事でFA？」

ブロントさんが尋ねると、ステイルは軽く頷く。

「恐らくね、だから僕はこれから三沢塾に特攻をかけて
ディーブラッドを連れ出さないとまずい状況にある。」

「そのクエに俺たちも参加するというわけだな」

「本当に話が早いな…、上条当麻は一度ブロントさんの
爪の垢を煎じて吞むべきじゃないかな。」

「余計なお世話だコンチクショウ!!」

ニヤニヤと嫌味ったらしい笑みを浮かべるステイルに
当麻が叫ぶ。

「おっと、談笑の時間はこれまでだ。
そろそろ準備もしないといけないのでね。」

それだけ言うと、ステイルはさっさと歩いて何処かへ行ってしまった。
人に戻り、当麻は深いため息をついて言う。

「不幸だ…。」

その呟きはブロントさんの

「そういえばインでツクウスは何処にいますかねえ？」

の一言にかき消されることになった…。

第十五話：吸血殺とかウチのシマじゃノーカンだから（前書き）

この章はアニメ版に沿って話を進めていきますので『あの人』は出てきません。ご了承ください。

え？理由ですか？長くなりs（オウフ

第十五話…吸血殺とかウチのシマじゃノーカンだから

ステイルとの話を終え、インデックスも拾ったので三人は無事に家に帰ってきた、のだが…。

「…見ない間に随分成長しましたねインデックスさん？」

笑顔の当麻の額にははつきりと青筋が浮かんでいた。その目線の先はインデックスの腹部、修道服が内側から膨れ上がりモゾモゾと動いている。

「成長期だからね！」

何を思っこう、ばれる筈が無いみたいな堂々とした表情と態度がとれるのだろうか？

十しか数えれない子供でももう少し上手く隠すだろう。

「…最近の成長期はえごいな腹まで動くのかと驚きが鬼なったんだが「ニャー」oiみうs ミス今の鳴き声なんだ紀伊店のか」

ブロントさんに細い目を向けられるとインデックスはまあベタと言うのもおこがましい様な口笛と目線をそらすという行動をやったのけた。直後に当麻に肩をつかまれ

「コラてめっ何隠してやがる！」

全力で揺すられたが本人は一步も譲る気は無いらしく

「私は何も隠していないんだよー」とか棒読みでほざいてくれます。

「て、天にまします我らの父に誓って、シスターさんが嘘をつく筈が無いんだから…。」

だが現実には非情である、言い終わると同時に懷から捨て猫もといスフィンクスが頭を出す。

もはやブロントさんは「おまえそれでいいのか」と言う気も起こらず、座り込んでグラットンとケーニヒシールド、A F 装備の手入れを始めた。

「てめーの信仰心はその程度か…
さっさとその野良猫出しやがれ！」

当麻が更に強く揺ると、スフィンクスはインデックスの懷からピョンと飛び出すと当麻のベッドに飛び移る。

インデックスもそれを慌てて追いかけて自分もベッドの上にかかる。

インデックスは当麻を睨むと、

自分の服は『歩く教会』と呼ばれているから

この迷える子羊ねこを無償で保護しますーとか意味の分からないことを再度言い出す。

あまりにもくだらないんで地の文扱いで

十分です、【はい。】

「…で？トイレの砂はその襟元から流しこみゃいい訳か？」

「いいもん！スフィンクスは教会が匿うって決めたんだよー！！」

その姿はさながら親にペット飼いたいから

「ちゃんと自分で世話をするもん！」とか言っておいて数日で飽きるという子供の典型的なパターンのそれだ。

結局当麻はブロントさんに助けを求めるも

「生き物を飼うのも人生経験のうち」と優しい笑顔で言われ仕方ないから飼ってよしと諦めきった顔で言うのだった。

ちなみにペットを飼うの件でブロントさんはかの白豚を思い出し、微かに拳を握り締めていたことをここに記しておきたいと思う。

・えちよ カットとかW W W W W W あ タルゝハハ

部屋を出たらステイルがイノケンティウスのルーンを廊下の壁に貼っていたので、貼り終わるのを待ってから共に三沢塾に行くことにした。

思ったよりそれほど遠くもなく、徒歩で十分行ける距離にあった。

「これが三沢塾？怪しくは見えないけど…。」

「怪しくは、見えないね。」

「明瞭的に明白怪しくみせる馬鹿がいるはずがにい」

「だけど：建物自体が錬金術師の結界になっている。」

「ほうこんなにでかいシンルドを造れるのか
であyレウロス**は強いのか？**」

「：もし頭の中に思い描いたものを現実世界に
引っ張り出せたら：どうなると思う？」

「【むむむ。】それは高確率で最強だな
伝説の武器とか創れて一巻の終わり」

「武器を作る必要もないと思うが：まあいい、
どうせここで留守番している気も無いんだろう？
だったら今のうちにディープブラッドの顔と名前を
覚えておくといい。」

ステイルはブロントさんと当麻に一枚の写真を投げ渡す。

「おいィ？おうまコイツって：」

「：ああ、間違いねえな。」

「なんだ、知り合いか？ひめがみ あいさ姫神秋沙あきさという名だそうだ。」

その写真には黒服のスーツに囲まれる、
先日のジャンクフード店で会った
食い倒れ自称魔法使い巫女の姿が写っていた。

第十六話：急に空気が重くなった不具合；（前書き）

これからリアルジョブが忙しくなる系の用事があるから更新が遅れてしまうことがPOPする可能性があるます。

あもりにも更新が遅れてしまった場合

「汚いな流石作者きたない」的な感想でもしてくれると嬉しいです！

いっておくけど感想が嬉しいのであってDMとは無関係以下レスひふようです。

第十六話…急に空気が重くなった不具合；

（三沢塾内ロビー）

中は塾というよりはホテルといったほうが
しっくりくるような広さだった。

まだ夕方ということもあって生徒もそこそに残っていたが、
黒ローブと白銀鎧＋普通^{じみ}が中に入ってきたというのに
誰も気にした様子がない。

「なんか…意外と普通だな。」

「明らかに怪しい所があったら普通問題になるだろ…」

「表向きは此処も今は予備校として営業中なんだ。」

「ふーん」と軽く当麻が返していると、向こうに
柱の影に倒れ掛かっているものが見える。

近づいてみると鉛色の甲冑に身を包んだ『なにか』が
そこにあった。

「何だこりゃ、ロボット？」

「どうした、此処には何も無い。」

「俺の視界には死体しかみえにいなどうかしたのか？」

「…し、死体？」

柱の影になっていたのと、夕方だったのでよく見えなかったがよく目を凝らすとその甲冑からは黒を帯びた赤色の液体があふれ出ている。

「おそろくだが、ローマ正教の十三騎士団だろう。
…この様子じゃ全滅みたいだね。」

「おいィ…いくらナイトが最強ジョブだからって
ナナナナナ×2+1とか何処の内藤PTだよ
一人余ってる時点で全滅する結果は目に見えていた（確信）」

「なんで…死体があるってのに誰も騒ぎ立てないんだ？」

ふいに一人の少女が死体の血だまりの上を歩く、が
血だまりは波紋のようなものを立てるだけで形を変えなかった。

「表と裏だね、ここは。」

ステイルの発言に「はぁ？」と声を出す当麻。

「コインの表側の生徒は、コインの裏側の住人の僕達に気づくことができない。」

僕達も一切彼らに干渉することはできない。」

ステイルの発言に、当麻は自分の右手を試そうとするが
ステイルに「魔術の核をつぶさない限りこの結界は解けない」と説明された。

「ともかく時間がないから急ぐべき
うサレおルスが何やるかわからないからな

急いでおくに越したことは無いだろ」

ブロントさんが言うと、ステイルも同意したように歩き出す。

「：戦う理由が増えたみたいだ。」

呟いたステイルの後ろに倒れる死体を見て、ブロントさんは後でレイズをおごってやることにした。

ディーブブラッドこと姫神を探す為三人は階段を上っていたが当麻はある疑問を口にする。

「なあ：わざわざ階段なんか使わなくてもエレベーターで行けばよかったんじゃないか？」

当麻の問いにステイルはめんどくさそうに、ブロントさんは呆れ顔で答える。

「コインの裏側の僕達にコインの表側のボタンを押すことは出来ないよ。」

「そもそもそんなことしてエレベーター止められたらどうするんだよここが敵陣ど真ん中ってことを忘れたんですかねえ…」

二人に完全論破され（最近論破されることが多い気がする）エレベーターは諦めたが、当麻はあることを閃く。

「じゃあ電話はどうなんだ？コインの裏側から電話かけて

コインの表側に通じることってあるのか？」

「知らないね、なんなら試してみたらどうだい？」

当麻は一旦階段の踊り場で立ち止まり、インデックスに電話をかけてみることにした。

二回のコールの後、インデックスが明らかに慌てたように電話に出る。

「ひゃい！こちらあの…Index—Libro…じゃない、上条です！」

あの、はい…。」

「お前…電話に出るの初めてか？」

インデックスは短い悲鳴を上げた後、声の主が当麻だと分かり、安心したようだった。

「当麻、わざわざ電話なんて大げさで仰々しくめんどくさくて心臓に悪いもの使ってどうしたの？」

「あーいや別に？」

「あ！冷蔵庫の中にラザニアが三つあったけど、もしかして…。」

「食ったんかい！」

「あ…冷蔵庫の中にプリンとエクレアがあったけど…。」

「なにいゝまさか…！」

食ったんかい！食ったんだな！！食ったんだろ！！！！

…ってまあいい、とにかく電話が繋がるなら良いんだ切るぞ？」

インデックスは当麻が何時にもなく寛大なので不思議に思った。

「あとエクレアはブロントさんのなんだけど、こっちを見ていかにも鬼の形相で見て来るんだが…。」

という慌てて電話を切ってきた。

あ、ブロントさんは甘党です。本人曰く

「これが高INTの秘訣かも」とか

「一流の喧嘩チームの頭は甘党なのが絶対に当然」らしいです。

つまり当麻が言った鬼の形相は冗談ではないわけで…

今にも「仏の顔を三度まで」とかいって走っていきそうです。

当麻が携帯をしまうとスタイルがじつと当麻を鋭い眼で見据えている。

「ん…なんだよ？」

「別に？ただ少し緊張感に欠けると思っただけ、

此処は戦場だというのに暢気に女の子なんかと会話しちゃってその慢心が己のみを滅ぼすなら構わないというか…

僕としては万々歳だけど…こっちの足まで引っ張ってもらっちゃ困る。」

とやけに饒舌になってきたので、当麻はある考えを確信する。

「…妬いてんのか？」

ステイルがインデックスのことを好いている、という考えを。
とまあ言ってみたら正に「ギクッ」という反応でほぼバレバレな
んだが。

「…間違うなよ？恋愛対象としてあの子を見ている訳ではない。
君だって知ってるだろう、あの子は今まで一年周期で全ての記憶を
消さねば生きていけない身体だった。

…今君の位置にはかつて、様々な人がいた。
父親や兄弟や親友や先生、皆様々なものになろうとしたんだ。
かつて僕は失敗し、そして君は成功した…それだけさ。
僕らの違いは、たったそれだけだよ…。」

ステイルは遠い所を見る目をして虚空を見ると、
再び足を進めだした。

第十六話：急に空気が重くなった不具合；（後書き）

時間がないので短いけど此処までです。

感想で

『ブロントに鋭く物申すタイプのキャラはまだでござるか^^;』
と質問があったんですが、どうしよう…。

というわけで作者から読者の皆さんにアンケートです！
次のうちから選んで感想で作者に応募してください！

1 そんなキャラはブロントさんに必要にいい！

2 ○○がいいんじゃないかなまあ一般論でね？

3 いっそ忍者を登場させるべきでござるよ^^ニンニン^^

2 の場合は○○の中にキャラ名もよろしく願います！
締め切りは九月二日の午後十時までとします。

ご協力【はい。】【お願いします。】

第十七話：ナイトのヘイト稼ぎはPTメンを守る唯一ぬにの盾

（三沢塾四階）

階段を上り終えると、そこには楽しそうに談笑する
たくさんの塾生の姿があった。

少し進むと左側に食堂があり、夕方だと言うのに
殆どの席が埋まっている。

「ふーん、科学宗教ってのは初めてだけだったって普通だね。
てっきり教祖様の顔写真でも飾ってあるのかと思ったよ。」

「宗教は俺はいまいち分からないんだが
そこまで危険なものでわないんじゃないか？」

「まああんまり危険ではなさそう…あれ？」

周りから聞こえていた話し声が聞こえなくなる。
食事や会話をしていた者達が急にその行為をやめ、
ジッとこちらに視線を向けている。

「O i ステンル」

「…何かな。」

「コインの表裏がまったく役割を果たしてないんだが
一体どういう事なのか説明するべき」

「おそらくだが、本来コインの表にいる生徒達を

コインの裏に立たせているんだろう。」

「熾天の翼は輝く光」

食堂の端に座っていた男子生徒が立ち上がり、呟く。

「輝く光は罪を暴く純白」

立って食事を運んでいた女子生徒も呟き始める。

「「純白は浄化の証」」

三人で食事をしていた女子生徒たちも声をそろえて呟くと、食堂中の生徒達が立ち上がり、呟く。

『証は行動の結果、結果は未来、未来は時間、時間は一律、一律は全て、全てを創るのは過去、過去は原因、原因は一つ、一つは罪、罪は人、人は罰を恐れ、恐れるは罪悪、罪悪とは己の中に、己の中に忌み嫌うべきものがあるならば、熾天の翼により己の罪を暴き内から弾け飛ぶべし。』

すると生徒達の額から光を放つ球体が出現する。

「∴上条当麻、君の出番だ!!」

言うだけ言ってステイルは思いつきり当麻を置いて全力で走り出す。

「お、おいっ!! てめえ!!」

当麻が呼び止めるもステイルは聞く耳持たずといった様子で逃げていった。

「ようま！早く逃げるべき！」

ブロントさんが当麻を担いで走る、
ステイルはそれに気づいて叫ぶ。

「何をしてるんだブロントさん！そいつの右手は異能の物なら何でも打ち消せるんだろう！？」

「無茶言うな！数が多すぎて右手だけじゃ対処できねえ！」

当麻も声の限りその言葉に反抗する、
当麻を肩から下ろしブロントさんはステイルに問う。

「スエイル、あの魔術に勝つる魔術とかないんでうSかねえ？」

ステイルはその問いに走りながらも冷静に答える。

「例えあったとしても僕一人ではどうしようもないな。

あの魔術の元となる『グレゴリオの聖歌隊』は本来大人数で行う大魔術だ、一人で相手をするのは…。」

「じゃあ破る方法とかも知らにいいのか？」

「今言ったとおり『グレゴリオの聖歌隊』は大人数を同時に操らないと

成功しない、つまりそのシンクロの鍵となる者を破壊すれば…」

三人が階段を下りると、そこには待ち構えていたように
無数の光の球体が回り込んできた。

「…仕方ないなここは俺が囿になるからよ
おもえらはディープグラッドを探してくだしア！」

「ちょ、ブロントさん!？」

ブロントさんは覚悟を決めて更に階段を下りて球体を引き付ける、
そのままとんずらを発動させて走っていった…。

第十七話：ナイトのヘイト稼ぎはPTメンを守る唯一ぬにの盾（後書き）

時間が取れない（リアル話）

みじかすぎる；誠にすいません；；

次回は多分、明後日ぐらいになるかなーとか予想してます。

第十八話：目的を実行するのは勝手だがそれなりのやり方があるでしょう？

（三沢塾階段）

『偽聖歌隊（グレゴリオ・レプリカ）』、現在ブロントさんが悪戦苦闘している

この魔術はどうやらシンクロの鍵となるものを破壊するまで止まらないらしい。

先ほどからランパートをかけて突っ込んでみたり、ホーリーを使っ

て攻撃するも、一向に数が減る気配が無い。

その鍵が何処にあつてどういう物なのかも分からないのでひたすらに走っていると、二階に着いたところで何者かが行方を阻む。

腰まで届く三つ編みに眼鏡をかけている、齢から推測するに此処の生徒だろう。

その額には先ほどの食堂の生徒と同様に球体の光があつた。

「罪を罰するは炎。炎を司るは煉獄。」

煉獄は罪人を焼くために作られし、神が認める唯一の暴力？？」

少女は淡々と言葉を繋いでいく、そしてその度に額の光が大きくなり、強く光り輝く。

そして同時に少女の身体中に亀裂が走る。

「おいやめろ馬鹿！お前もしかして自分の身体状況も分からない馬鹿ですか！？やめておけといっているサル！！」

だが必死の叫びも少女には届かず、少女はただ操り人形のように無表情で言葉を放つ。

『暴力は死の肯定。肯定は認識。認識は己の中に。中とは世界。自己の内面と世界の外面を繋げ——』

その言葉が終わると、少女はガクッと崩れ落ちた。ブロントさんが慌てて受け止めると、ブロントさんの前に追ってきていた球体たちが集まり渦を巻いている。

再びランパートをかけようとするが詠唱が間に合わない。少女の前に出て下段ガードを固めた、

…何も起きない。

盾の上から覗いてみると、そこには雪のように地面に落ちていくたくさんの球体。

そして階段に佇む『デュープブラッド吸血殺』、姫神の姿があった。

「おもえは…食い倒れ巫女！」

「…その呼び方は止めてほしい。そして私は巫女じゃない。」

食い倒r…もとい魔法使いの姫神が少し顔をしかめて言う、
本当に少しなので表情が分かりにくい。

「その子。手当てしないと。」

姫神が倒れている少女に近づきながら言う、
フロントさんはそれに頷くとケアルを唱えて少女の傷を治す。

これには姫神もかなり驚いたようだ、口を開けながら
「おお。」とか言っている。

…驚いているのか、すごく分かり辛い。

「驚いた。貴方も魔法使い？」

「俺のメインジョブは黒でも白でもなくナイトだが
サポジョブ変えれば色々使えるな
まああナイトだからケアルくらい使える」

フロントさんの説明が良くわからなかったようで
姫神は首をかしげている。

「そういうお前はなんか魔法使えるのかよ

【興味があります。】

「それなら持ってる。」

姫神は巫女服の懐からある物を取り出す。

片手剣くらいの長さで黒色、電気を流すそれは――

「どうみても警棒なんですがねえ……」

「魔法のステッキ。」

「どちらかというと物理タイポなんだが」

「新素材。」

「素材まったく関係ないと思ったまあ一般論でね？」

……それよかお前此処に監禁されてるってほんとかよ」

ブロントさんが疑問を口にする。

少女は首をかしげると答える。

「されてない。私は目的のためにここにいる。」

「目的？なにそれ？」

「ここにいないと出来ない。いや。錬金術師が一緒にできないと言うのが正解。私の能力は知ってる？」

「ディウpブランドだったか？」

「……『吸血殺』ディープブラッド。吸血鬼を殺す能力。私の目的はこの能力を消すこと。」

姫神はたくさんのかんことを話した。

吸血鬼は人間と変わらない、人の為に笑ったり、泣いたりできる

人たちだと。

もうそんな人たちを殺さない為に学園都市に着たが、この能力を消す方法は見つからなかったと。

「そんな時。アウレオルスに会った。

彼は言った。助けたい人がいるって。

そのために吸血鬼の力が必要だって。

絶対に吸血鬼を傷つけないって。」

姫神はブロントさんに言う、が

ブロントさんは「納得できないんだが」と言う。

「」確かになお前の目的は立派だが

その目的はこういう奴らが増えてでも

やり遂げたいものなのかよ」

ブロントさんは倒れている少女に顔を向ける。

「吸血鬼がどんな奴らなのかも

お前がどんなに苦しんできたかも俺は知らにいがよ

吸血鬼は傷つかなくてもそれに関係ない

他人を傷つけてまで目的達成したいと思うその

浅はかさは愚かしい」

「それは…」

突然、二人の奥の廊下から足跡が響き、カツカツと音を立てながらこちらに近づいてくる。

「憤然、私の目的を愚かと語るか。」

そこには緑髪のオールバックに白いスーツを着た長身の男性がいた。

第十九話…他人を傷つけるのは汚い忍者だべ

「自然。犠牲を無くしては救える者すら救う事など出来まい。」

廊下の奥から声が響く、その声の主である男は悠々とこちらに向かって歩いてくる。

「何いきなり話しかけてきてるわけ？」

「…コイツがアyleオウすか」

「…アウレオルスIIイザード。」

名前を訂正しながら、その意見を肯定するように姫神は頷いた。

「間然。仔細無い、今すぐ其方に向かおう。」

一步すら踏み出さず、ブロントさんとアウレオルスの三十メートルの距離は零になった。

とっさにブロントさんはバックステップする。

「当然、疑問は出てくるかもしれんが答える義務はあるまい？」

「どうやって俺が疑問出してるって証拠だよ」

両者睨みあう、ブロントさんがグラットンを構え、斬りかかった。

だが、

「これ以上——貴様は、こちらへ来るな」

斬りつけるも、そこにアウレオールの姿は無い。
自分の二メートル先にその姿はあった、
どれだけ走ってもその二メートルは縮まらない。

まるで違う空間に存在するような感覚を覚えた。

その姿をアウレオールは無機質な目で
見つめている。

「憮然。つまらんな青年よ、
これ以上貴様にかける時間は無い。吹き——」

「——まって。」

とっさに姫神がブロントさんの盾になるように
身を乗り出した。

ブロントさんが焦る、これだけの絶対的な能力の差に
身を乗り出すのは明らかに自殺レベルだ。

「おい何してるでF A! ? 盾役の前に行くとか
死にたがりの内藤レベルなんだが早く後ろに下がって!」

ブロントさんが必死に姫神を下がらせようとするが、
差が埋まらない。

(姫がむが前にいたらホーリすら撃てない! 撃つにくい!)

距離が埋まらないなら遠距離攻撃を仕掛けようとしたが
姫神が前に出たことでその選択肢も出来なくなる。

「暗然。何故貴様は『吸血殺』を助けようとする、
貴様もこの『吸血殺』が目的ではないのか？」

「俺が吸血鬼殺したら何か得するのかよそういう
お前は何が目的だよみる見事なカウンターで返した」

ブロントさんが疑問を口にする、最初から気になっていた。
吸血鬼をおびき寄せ傷つけずに、

この男は一体何をしようとしているのか。

最初にステイルが言っていたから考えてもおかしい。

『…もし頭の中に思い描いたものを現実世界に
引っ張り出せたら…どうなると思う？』

おそらくこれこそが錬金術師の、アウレオルス力なのだろう。
考えたことを現実と出来る、ならば吸血鬼なんて

呼び寄せずとも作ればいい。

人を助けたいと考えるならそれを想像し、具現化すればいい。
だが、この男はそれをしなかった、

…出来なかった？

そんな高等なことは出来ない、つまりそれほど
その能力は万能でないとするならば。

姫神はアウレオルスの方を向いている、今が好機。

「…『フラッシュ』！」

「!？」

ブロントさんが呪文を詠唱すると、周りは眩い光で覆われた。
突然のことにアウレオルスも反応できず、
その光によって目を潰される。

「ぐあっ!!」

走ると距離が縮む、つまり術が解けたのだ。
想像を具現化できるなら、想像ができないような状態を
作り上げればいい。

「だれかを犠牲にしナイト救えにいなら——」

距離を零にし左手を振りかぶる。

「おもえ自身が——」

左手は雷撃を運び、轟音を出す。

「犠牲ぬなって救って見せろ!!」

全力で、殴る。

その手はアウレオルの顔面に吸い込まれ、

廊下の端まで吹っ飛ばした。

その様子を、常人にも分かるくらい驚いた様子で姫神が見ている。

「俺が手加減してて良かったな手加減しなかったらお前死んでるぞ」

聞こえるはずも無いアウレオルスに向けて、

フロントさんが完全勝利のセリフを出した。

第十九話：他人を傷つけるのは汚い忍者だべ（後書き）

日々更新速度が遅れる男！黒糖パツ！！（デッデデー（ry

あっさり？上条さん？ステイル？
聞こえません。

原作ぶち壊しですね、反省してます（リアル話）

えーと前のアンケートなのですが…
票数がぜんえzん集まらなかったので決められますん。

・えちよ hai！意見がほしいです；（懇願）

本当にお願いしまうs；；

制作意欲ロストしたくないんです；

感想お待ちしてますので本当に【お願いします】（必死）

あ、アウレオルス編はまだ続きます。

第二十話：アワレな錬金術師がいた：

「……き……」

何処からか、声が聞こえる。

「……………ろ」

意識は朦朧としてはつきりしないが、
声は大きくなっていく。

「…起きろといっているサル！！」

「！？」

いきなりの大声にとっさに、起き上がり耳を塞ぐ。
声を出したただけだと言うのに何と言う衝撃だ、
塞いだというのに耳が痛い。

「…愕然。ここは？」

「さっきから移動してない此処はお前が俺に吹っ飛ばされた場所なんだが」

…そうか、思い出した。

術がかかっていた奴の記憶を消してやろうかと思ったが、
その前に謎の光に目を奪われたと思ったら奴に殴り飛ばされた。

私を殴った張本人であるその男は私の目の前で座っている、

敵意は無い、その目を見るだけで何故かそう思える。

「啞然。なぜ貴様は此処にいる。」

「お前と話をする為だが悪いかよ」

「…一体何を企んでいる。」

「人が助けたいと思った奴を俺が助けたいとか思っではいけないなんて

法律があるんですか？俺の記憶には何もない」

何を、言っているんだ。

私は貴様を殺そうとしたんだ、結果としては死に至らなかっただけ

殺そうとしたという仮定がある。

「…呆然。貴様の考えが私には理解できん。」

「理解できなくていいからさっさと話すべき
俺も早く行動に移したいから早くするべき」

くだらん、この男に話したところで何一つ変わらない。
私の目的も、その為の行動も何一つ。

だが、話したくなった。

何故かは私にも分からない、無駄だと分かっているが、何故か。

一言で言うなら、本能的に。

「…ならば、話そう。」

とある一人の少女の話を。」

+

アウレオルスは語った、その目的を。

記憶を一年毎に消さなければ生きていけない少女と出会い
その少女は自分の目の前で、忘れたくないと告げたと。

「…その少女を助ける為、吸血鬼の秘密が必要なのだ、
長年の知識をその脳に蓄える吸血鬼、その秘密さえあれば
彼女は救われる。」

「…」

ブロントさんは確信した、間違いない。

この男が助けたかった少女の名は——

インデックス
「——禁書目録」

名を呟くと、アウレオルスの顔が驚愕に染まる。

「知っているのか！？彼女を！」

嗚呼、自分は知っている。

その彼女が今、どうなっているか。

言わなければならない、これを伝えなければこいつはこれからも道を間違えまくるから。

「救われてる」

「…何？」

「もうインデックス救われてるから」

こちらも話さなければならない、
その少女の現在を——

†

「…というわけなんだが？」

「…」

話し終わるとアウレオールの顔は深く沈んでいく。

長年の苦勞が、完全に水泡と化したのだから。

それも魔術師でもない少年、ただの少年に。

「…無駄だったというのか、私が彼女を救いたいと思ったこの気持ちも、

行動も。」

「…そうだな」

廊下に、三沢塾にアウレオルの笑い声が響く。

その声に含まれていたものは何も出来なかった自分への自嘲か、それ以外の何か。

分かることは、その声はとても悲しい声だったという事。

ふと窓から見上げた空は何処までも、何処までも黒く染まりきっていた――。

第二十一話：簡単に死ぬとか言わないふえ下さい（約束）

結局アウレオルスは完全に戦意を消失し、イギリス清教に拘束された。

終始「私は：私は：」と呟く様は、見ていて苦しいものがあつた。

アウレオルスの行ったことは、やり方こそ間違っていたものの少女を助けたいという『善意』からきた物だったのだろう。

もしかしたらそれはただの『自己満足』かもしれない、だが助けたいと、救いたいと思う気持ちに『悪』はなかったはずだ。

少女を助ける為に仲間を裏切り、人を殺してまで救いを求めたその男に、とある男の面影が重なった。

力を求め、周りが罵ろうと努力し

『汚い』という不名誉な肩書きにも屈せず、自分を貫き通した男。

《なんで：なんでテメエだけが認められて！

この俺が認められねえ！！

メイン盾ってのはテメエだけを表す呼称やなんかじゃねえんだ！！

認めねえ：俺だけはぜってえ認めねえ！！》

今は違う世界を生きるあの男、きたな にんじゃ汚い忍者。

自分を一方的に恨み、追い回し、どんな方法を使っても自分を蹴落とそうとした人物。

彼は自分の天敵であり、好敵手であり、間違いなく仲間だった。

あんな憎まれ口でも、馬鹿にしたような口調でも聞けなくなると懐かしいし、寂しい。

連行されるアウレオルスの背を見ながら、ふとわが故郷を懐かしんだ。



自分の居場所は無くなった。
帰るべき場所も無くなった。
生きる理由すら無くなった。

これで、いい。

私は元々生きてはいけな存在だったから。
私の命が、私の血が無くなればもう皆死なくてすむ。

死に場所を探そうと街を歩こうとすると、
私を解放した、あの騎士が私の肩を掴む。

「…何。」

「おもえは一体どこに行くんですか？
どうせ行く場所にいんだろならろうまの家に来い」

「…何で。」

「理由なんか簡単お前の住む場所がないなら
とyまの家でいいだろと判断した結果」

…この男は人の話を聞いていなかったのか。
自分はもう人を殺したくないと言った筈、
何故彼は此処までする？一体何の為に？

「…どうして。」

「お前頭悪いな誰かを助けるのに理由がいるかという
有名なシーフの名ゼリフを知らないのかよ」

その言葉に、私は内心驚く。
なにも考えていなかったのか？
何の見返りも求めず、私を助けたのか？

「…馬鹿みたい。」

「どうやって俺が馬鹿って証拠だよ証拠出してみろよ
出せなかったら俺の勝ち」

…駄目だ、この男と話しているとどうしても和んでしまう。

先ほどまで死にたいと思えたのが、嘘みたいに。

「…でも私は行かなきゃいけない。」

「死んで償うとか思ってたないよな？」

いきなり彼が言った言葉に私は驚愕する。
馬鹿みたいに見えて、鋭い。

「さきに言つとくけど死んでも償いにならないということは
もうとつくに確定してる事実
意味無いから止めるべきだしそれに…」

彼は少し悩んだ素振りを見せて、
直に手をポンツと叩く。

「お前が死んだら向こうの奴らが苦しむからよ
まだ死んだらいけないのは確定的に明らかだから生きろ
更に生きて償えばいいという発想でストップは更に加速した」

…駄目だ、もう駄目だ。

喉の奥に溜まった物が、抑えきれない。

とつくに消していたはずの感情が蘇る、
とても、不思議な気持ち。

私の口からは自然に、笑い声が出ていた。

その姿を見て彼は満足そうに笑っている。
少し悔しかったけど、今は論破されておこう。

いいだろう、彼が私に生きろというなら、私は生きよう。
それが彼の言う通り、償いになるかは分からない。
それでも生きたい、そう思えた。
でも、私の血に吸い寄せられる吸血鬼はいなくならない。
そこは私を生かした彼の責任だ。
ならば守ってもらおう。

私だけの、このナイトに。

第二十一話：簡単に死ぬとか言わないふえ下さい（約束）（後書き）

はいどうも、小説第二段とか出して浮気しようかなとか調子乗ってる作者です。

だって正直この先ブロントさんにフラグ乱立しまくってあわわとかsyレならなくなってきたし…。

まあ真面目な話するともう一個小説出して

地の文とか練習しようかなーとか考えてたりもしますが。

第二十二話：許されると思った 浅はかさは愚かしい (前書き)

まあ、おまけです。

…どうしましょう。

ネタが無いっ……駄目駄目っ……完全な無計画っ……！

第二十二話：許されると思った 浅はかさは愚かしい

アウレオルスが捕まった後、ステイルと当麻が慌てて駆けつけてきた。

なんでもアウレオルスに記憶を消され、
右手で能力をかき消して駆けつけた頃にはもう終わっていた、と。

いろいろな事情（主に魔術側の）もあって、
ディープブラッドを当麻の家で預かることも決定。

こうしてこの事件は、後味悪く幕を下ろした。



家で当麻たちの帰りを待つ、いくらなんでも遅すぎる。
帰ってきたら事情を説明してもらおうと思った矢先に
玄関のチャイムがなった。

当麻たちが帰ってきたのだろう、急いで玄関を開ける。

…あれ？

ふと、違和感を感じる。

当麻と、前にあったインチキ魔法使い巫女がその目線の先にいた。

何故この巫女がこんなところに？

当麻は笑顔で「ただいま。」と言う。

インチキ巫女は何のためらいも無く「お邪魔します。」と上がってきた。

いろいろ疑問が湧いてきたが、後ろの存在を確認した瞬間とてもどうでもいいことに感じた。

：ブロントさんの事すっかり忘れていた。

ブロントさんは、笑顔だ。

私は安堵した。よかった、怒ってない。

そうだよ、エクレア一個食べただけだしそんなに怒ることじゃ

——その考えはブロントさんがその笑顔の目を開けた瞬間消えた。

一睨みで悪魔だろうと竜だろうと殺せそうな、暗い瞳。その目線は明らかに私に向けられている。

黒いオーラが、見えそうに…いや、見えた。

ザザッ！ガバッ！！↑土下座する音

「…ごめんなさい。」

精一杯の謝罪の気持ちを身体で表現する。

ブロントさんは笑顔で私の首元を掴むと、部屋の奥で正座をさせられた。

今日は眠れるかな。

ふと私の頭の中を、そんなどうでもいい事が過ぎった。

第二十三話：いもんとがいたかと驚きが鬼なる

午後六時半、カーテンを開けると部屋に舞う埃が薄く出ている日光に当たり、

部屋全体が白く染まる。

部屋の隅に置いてあるグラント装備もそれに反応するように光り輝き、幻想的な空間が出来上がった。

少し伸びをして、部屋を見渡す。

ベットの上には仰向けでピクリとも動かず、完全に夢の世界を彷徨っているインデックス。

テーブルをどけ、床に敷いた布団で安らかな寝息を立てている姫神。

当麻はいつも通り風呂場で寝ているのだろう。

（ブロントさんはいつも壁に寄りかかって寝ている）

三人を起こすのも気が引けるし、昨晚も遅かったので寝かせておこうと思う。

流石に寝顔干渉を何時までもしているわけにもいかないのに、散歩にでも出かけようと思う。

（身体を定期的に動くす事によってリアルで充実した生活が認可される）

（ここら辺の健康管理が冒険者の秘訣）

合鍵を持ち、いつもの公園にでも行くことにした。

久し振りのw w w w w ネタカットにw w w w w
西京の俺様後輪w w w w w
おk k k k w w w w w w

公園のベンチに座り込んで、朝の新鮮な空気で
肺を満たす。

小鳥の囀りが心地よく、ついうとうとしてしまう。

しばらく一人きりでゆっくりしていると
見知った顔が公園に歩いてきた。

(みsか?)

学園都市第三位、超電磁砲の御坂美琴。

茶色の短髪にあの学生服、顔も見間違えるはずが無い…のだが、
額に着けている物は軍事用のゴーグル。

なんともミスマッチというか不思議というか…とにかく
黙って眺めていても仕方が無いので話しかける。

「おいみさあお前なんでこんなところにいるんでsか?」

「…誰でしょうか?とミサカは知らない人に話しかけられたことに
戸惑いを感じつつ疑問を返します。」

「おいおい（笑）人の顔忘れる浅はかさは愚かしいデパンとだけでなく道でもあったでしょう？」

「…それは恐らくお姉さまのことだと思いますとミサカは貴方に説明します。」

ミサカ（？）は自身が妹であることを説明した。

そういえば何処と無くふいんき（なぜかry）が違う気がする。

「【むむむ。】姉妹だったかすまにいあもりにもそっくりすぎてナイトの千里眼でも見抜くないあるさま。」

「別段気にしてませんとミサカはなんとか貴方の言語と早口を解析して答えます。」

他にも他愛も無い話をしていると、後ろから「ニャー」という鳴き声が聞こえた。

二人で声が聞こえた方の茂みの奥に進んでみると、ダンボールの中で震えている子猫がいた。

「ただだよ（怒）なんでこんなに猫がぽこじゃが捨てられてるんですかねえ？」

捨ててる奴猫の気持ち考えたことあるのかよ」

「同感ですとミサカは貴方の怒りに賛同します。」

そこまでいうとミサカはジッとブロントさんを見つめる。

「…何か用かな？」

「…このままだとこの猫は保健所に回収されてしまうかもしれないかもしれません」

ミサカは自分の考えを率直に伝えます。」

「…俺が住んでるとこは学生寮で猫禁止なんでF A
だから俺が飼うことはどちらかというと絶対に無理」

「私は身体が微弱な電波を帯びているため猫を飼うことができませんと」

ミサカは貴方に押し付けることを試みます。」

三十分ほど押し付け合いをした後、二人で飼ってくれそうな人を
探すことが決定した。

第二十四話：飼い主探してたら三回連続で睨まれた

しばらくミサカと討論していたのだが、帰っても当麻たちが起きる気配はない。

事情を説明しようと思ったのだが、起こすことには抵抗がある。

仕方が無いので当麻達に書置きを残し、外に出る。

朝といえども夏の日差しは馬鹿に出来ない、白を基調とした短めの和服に着替えてあるので、それほど熱くはならないと思うが。

先程の茂みの中を覗くと、ミサカが猫に買ってきたのかその手に握られている菓子パンを与えようとしていたが、その手を差し出すことを戸惑っているようだった。

「おいィ：餌やらなくていいのか？」

「：ミサカがこの猫に餌を与えることは不可能です、とミサカは結論づけます。

ミサカには一つ、致命的な欠陥があるのです、と補足説明します。

」

ミサカはその無表情の顔に少しだけ影を落としながら答える。

「欠陥という表現には賛成できにいがその欠陥というのが一体どういうことなのか【興味があります。】」

「ミサカの身体は常に磁場を形成しています、とミサカは説明します。

人体には感知できない程度ですが、他の動物だと異なるようです。

「なるほどなそのせいで動物がヒュンヒュンとはよって来ないわけだな」

「ええ、ですからミサカには…」

そこまで言った途端、ブロントさんはミサカの手を掴みダンボールの中の猫に向けて差し出す。

すると猫はクンクンと鼻を動かしながら菓子パンにかじりついた。

「お前の欠陥も大した事がない事が証明されてしまった感

」「確かに動物はそういうのに敏感だが別に苦手ではないな大体動物は磁場とかで方角を知る系の話があるぞ（リアル話）」

ミサカは口を小さく開けながら菓子パンをかじっている猫を見つめている。

表情からは分かりづらいが、目や雰囲気嬉しそうだ。

…ヴぁーんが友人であったことに少し感謝したブロントさんだった。

「これで猫がお前を苦手としないことが証明されたからなお前が飼ってもいいんじゃないか？まあ一般論だね」

「…それは難しいです、とミサカは感動を覚えつつも少しがっかりします。

ミサカの環境は貴方とは異なるのです。」

その言葉に雰囲気落ち込んだのをブロントさんは見逃さなかった。

明らかに唯の「寮の都合」だけの話ではなさそうだ。

もっと裏がありそうだ、ブロントさんはそう思った。

「…なら仕方にな飼ってくれる奴を探すぞ」

「といってもこの街は殆どが学生、したがって学生寮暮らしが多いので

飼えない人が殆どでしょう、とミサカは推測します。」

「殆どじゃないやつを探せばいいという意見

第一捨てた奴がいるんだから飼えてたって事だろ

ここで話しているくらいなら俺は脚を動かすだろうな」

そういうとブロントさんは猫を抱えて公園を出る。
それに続いてミサカも公園を出た。

カットですよ^^; カット^^;

「見つからなかったんだが…」

「疲れました、とミサカは率直な感想と自分の状況を述べます。」

時刻は夕方、買い食いなどで空腹を満たしつつ様々な場所を歩いたが何処もいい返事はくれなかった。

二人は残念な結果に肩を落としつつフラフラと歩いていた。

「俺が飼うしかないなおうまにこれ以上迷惑かけるのはどちらかというと大反対だがあいつなら許してくれるだろ（予知夢）」

「すみません、そしてありがとうございます、とミサカは謝罪と感謝の言葉を貴方に送ります。」

茜色に染められた道もうすぐ暗くなるだろう、ブロントさんが送っていくというと、ミサカは一人で帰れますと明らかな拒絶を示した。

しかし…とブロントさんが食い下がっていると

後ろからの視線に気付いた。

そこに立っていたのは少年、髪も肌も驚くほど白くそれに反比例するように服は漆黒の色。
そして瞳、烈火…いや煉獄のような緋^{あか}で彩られたその目。

学園都市最強の超能力者、レベルファイブ一方通行。アクセラレータ

その少年はただ、獰猛な笑みを浮かべていた。

第二十五話：第一位のナメタ態度に俺の怒りが有頂天になった

「ほオ、実験動物モルモットがおもしれエこととしてンじゃねエか。」

不意に一方通行が話しかけてくる、
その口元に浮かべている狂気の笑みはまるで
獲物を見つけた肉食獣のソレだ。

：もつともその位で怯むほどブロントさんの
ダイアモンド・パワーの精神力（鋼のように硬い）は
柔ではない。

「何いきなり話しかけてきてるわけ？」

「あん？俺が話しかけてンのはテメエじゃねエよ、
引っ込んでろ三下。」

一方通行の見下した発言で、
ブロントさんの胸に沸々と怒りがたまっていく。
不良の頭だっただけあって、このくらいの挑発でも
楽々ヘイトが溜まる。

「うざいなお前喧嘩売ってるのか？」

対する一方通行もブロントさんの挑発に、
怒気を含んだ目を向ける。

好戦的で何より見下されるのが嫌いな一方通行も
簡単に挑発に乗る。

一触即発の状態で両者睨み合い、周りを静寂が支配する。

いや二人が放つ虎と竜のような覇気にそこらの貧弱一般人は近づくことさえ出来ない。

近くにいたミサカも三步ほど後退り、震えている。

「デメエ：この俺が学園都市第一位の超能力者^{レベルファイブ}ってことを知ってもンな口が叩けンのかア？」

「第一位とか言ってる時点で勝負にならないことが決定したな
本当に強い奴は強さを口で説明しないからな口で説明するくらいなら

俺は牙をむくだろうな俺パンチングマシンで100とか普通に出すし」

「上等だデメエ：オイ実験動物、実験開始までコイツと俺が遊ばオが構わねエよなア？」

一方通行がミサカを睨む、

ミサカは肩を震わせて、脅えながら

「：実験に支障の出ない範囲なら構いません。」と答える。

：先程から出ている単語の意味が分からず、
一方通行にブロントさんが問う。

「さっきから実験とか実験動物とか言われても
理解不能状態説明するべきそうするべき」

「はア？ンな事も知らねエのか？：あア、機密事項だったか？」

二万通りの戦闘環境で量産能力者を二万回殺害する
レディオノイズ
レベルシックスシフト
絶対能力進化。

殺される対象は御坂美琴のコピーである妹達。
シスターズ

一方通行は実験の概要を簡単に説明する。

「分かったかア？ ココはテメエが居て良い場所じゃねエンだよ。」

「…おもえは最強になる為に二万の人間を殺すんですかねえ？」

「人間じゃねエよ、クローンだ。」

「で次のタゲが…」

「オマエの後ろに居るそいつって訳だ。」

一方通行は再び獰猛な笑みを浮かべる。

突如腕の血管が血走り、激しい怒りが

ブロントさんに込み上げる。

ブロントさんは拳を握り締め、一方通行に殴りかかった。

が、その拳は壁を殴ったかのように跳ね返された。

「ンだよ、新手の猪かなンかですかア？」

腕の骨は複雑に砕けている、
ケアルでそれを回復し、一方通行を睨む。

「反射：いや違うただ跳ね返されたのではあの威力は
絶対的に不可能」

「反射、そいつも合ってンだけど俺の本質とは違うンだよナア！！」

一方通行が姿勢を低くして地面を蹴ると、
フロントさんとの距離が一瞬にして零になる。

なんとか横に避けると、高速で飛んでいたはずの一方通行の身体は
空中でピタリと制止する。

「答えは『向き（ベクトル）』変換でしたア！！運動量、熱量、電
気量。」

あらゆる『向き』は俺の皮膚に触れただけで変更可能って訳。」

一方通行が地面に着地し、地面を蹴ると砕けたコンクリートが
弾丸のようにフロントさんへと飛んでいく。

フロントさんとはつさにプロテスを唱え、下段ガードを固める。
プロテスのおかげで大したダメージにはならなかったが、
もしそれが無かったらかなりの高ダメージを食らっただろう。

街の真ん中というわけではないが人の被害が気になる、早めに決着をつけるべきとブロントさんは判断した。

勝てる算段をつけ、道路を踏み碎き自分の前に瓦礫の盾を作る。

所詮は即席なので数秒しか持たなかったが、準備を終えるには十分な時間だった。

「生半可なナイトでは使えないホーリ！」

詠唱を終えブロントさんは『ホーリー』を一方通行に向けて、発射する。

ベクトル変換といえども魔法では反射の仕様もない筈だ。

予測通り光球は反射されることなく一方通行の身体を襲い、その身を焼く。

「グッ！？クソつたれがア！！」

完全にダメージが通る前に一方通行が上に跳ぶ。

刹那、ブロントさんの体が光り輝きその身体に鎧がまとわれる。

その背には天使を髣髴とさせる翼、右手には光り輝く聖剣と化した暴食の剣グラットン。

光の翼で宙を駆け、一方通行の上に飛び立つ。

同時に剣先が一方通行へと向かう。

一方通行の顔が驚愕に固まった。

「なア！？」

『ウリエルブレード!』

避ける間も無く剣は振り下ろされ、光の柱が一方通行とブロント
さんを

包み込む。

悪を浄化する激しい光が、月光すらも遮るほどの眩さで
道を染めた。

終わった頃には剣を収める白銀の騎士と
ズタズタにされた白髪最強がいた。

第二十六話：やはりソロよりPT戦だなそれがよくわかったよ

「終わったか…それほどでもないな」

剣を収め、ミサカの所へ駆け寄る、

ミサカはとても驚いたような顔をしていた。

学園都市第一位をあっさりと倒した、とても衝撃的な事実。

ブロントさんは何とかミサカに声をかけようとする。

腹部に激痛が走ると同時に、ブロントさんが吹き飛ばされる。距離にして八メートルといったところか。

鎧は碎けていないものの、内臓が潰れたようだ。

「…あアいつてエわ！死ぬかと思ったぜエ！？」

そこにあっただのは、ボロボロになりながらも立ち上がる一方通行の姿だった。

間違はなく攻撃は当たったはず。

「…なんだよあの光はよオ、解析すんのにえらい時間くっちゃまったわ。」

なんとかケアルを唱えようとする、が口から出るのは呪文ではなく血反吐ばかりだった。

その間も一方通行はブロントさんに歩み寄る。ダメーじを受けてはいるようで足が震えていて真直ぐには歩けていない。

「苦しいだろ？今すぐ楽にしてやる、

この第一位様を追い詰めた褒美で痛みは感じさせねェからよオ！」

一方通行はブロントさんの前で右手を振り上げる、逃げないと死ぬことは分かっている。

だが足は、身体は言うことを聞いてはくれない。

死ぬ——それを覚悟したとき、一方通行の後ろから声がかかった、ミサカだ。

「一方通行、そろそろ実験の時間です、とミサカは催促します。」

「：チッ、命拾いしたな。」

その言葉だけを言い残し、一方通行は路地裏へ歩いていく。やはり身体は動かず、それを追う事もかなわない。

ミサカはブロントさんの前にしゃがみこみ一言

「さようなら」

と呟いた。

意識は、そこで途絶えた。



目を覚ますと、知らない天井が眼前にあった。

鼻を刺激する薄い薬品の香り、清潔感に溢れたベット、横のテーブルに置かれた花瓶。

此処が病院であることは直に判断できた。

「気が付いたかい？」

首を横に向けると、そこには白衣を着た蛙顔の男が立っていた。

「内臓も骨もぐしゃぐしゃ、良く君生きていたね。」

「…」

「ああ、まだ安静にしていた方が良い。」

少しぐらつく意識をはっきりとさせ、ケアルを自分に唱える。
痛みは退いていくが、心の奥では何かが空いたような、妙な感覚がある。

「…おるは守れなかったんだな」

口に出すと、その感情は胸の中を支配していく。

敗北、自分は敗北した。

そんな事はどうでもいい、

自分を守ろうとしたものを守れなかった。

不意に病室の扉が勢い良く開く、

当麻、インデックス、姫神が滑り込んできた。

「ブロントさん！大丈夫か！？」

当麻はブロントさんの姿を見ると、安堵の息を漏らした。

「一体何が起こったか説明してほしいかも！」

インデックスは少し怒りながらも

肩をなでおろす。

姫神は…

何も言わず、ブロントさんに抱きつく。

「…心配。した。」

「お、おいィ？確かに抱きつくのは勝手だが
それなりのTPOがあるでしょう？」

「心配。した。」

「…すまにい」

二人が何だかピンク色の雰囲気を出しているのを、
当麻がわざとらしく咳払いして止める。

「ブロントさん、何があったか説明してくれ。」

この件に当麻たちを巻き込みたくは無い、が
当麻はそんな事は許さない雰囲気を出している。

「何か事情が有るのは分かってる、だが俺達は仲間だ。」

ブロントさんが無茶するってんなら、俺達もそうさせてもらう。」

…そうか、思い出した。

「…ああ俺も少しとうなに協力してほしいことがあるからよ」

自分はすっかり忘れていた。

ナイトも所詮はPTの一人、PT無しでは
力も発揮できないことを。

次もあいつと戦うことになる、光系の技も解析したといっていた。

だが、勝てる。

PTを組んだ今、ナイトは孤高の騎士から
至高の騎士へとヴァージョンアップした。

「実はよ…」

もう一度、奴を倒しに実験場へ。

次は間違いなく喧嘩でなく、戦いになるだろう。

第二十六話：やはりソロよりPT戦だなそれがよくわかったよ（後書き）

連続投稿、一方さん編はまだ続きます。

あんなあっさり最強は倒せませんよ、
前回あそこで切ったから誤解されましたが
上条さんの出番だって作りますよ！

第二十七話：ggg話してるくらいなら俺は実験止めに行くだろうな

「…絶対能力進化計画。」

当麻はボソッと呟くと、拳を握り締める。

どうやら心境はブロントさんと同じく、

そんな非道なことが許せるか、と顔に書いてあるようだ。

だが一方通行はブロントさんを不意打ちとはいえ打ち負かした男。
更に学園都市第一位だ、実力は相当のものと考えて良い。

一人で戦うのは無謀、ならば二人で戦えば良い。

「…俺一人で勝てなかったのはどちらかというところかなり悔しいんだが
あいつの能力はおもえのほうが相性が良い」

「確かに俺の『イマジンプレイカー幻想殺』ならそいつに
直接攻撃できるが…。」

「ああ間違いなく考えなしに突っ込んだら飛び道具くらって
一卷の終わりだからそこを俺が守れば問題ない」

つまりは当麻が一方通行に走って殴りかかり、
ブロントさんが飛び道具から守る。

ブロントさんの盾を生かした連携。

「よし、そうと決まればいっちょ最強とやらの
正義の鉄拳でも叩き込みに行こうかブロントさん！」

「…それなんだが」

ブロントさんは何かを非情に言いにくそうにしている。

「なんだよ？この期に及んで隠し事なんて水臭いぜ？」

その言葉を聞き、ブロントさんは重い口を開く。

「実験場所はぽこじやが変わるらしいから
次の実験が何処でやるかわからにい；」

「…あ。」

先程まで上がっていたテンションに反比例して
周りの空気が気まずくなる。

そう、肝心のその相手がどこに居るのか分からなければ
全く持って意味が無い。

「…だが」

ブロントさんはもう一つ何かを言うことを

ためらっている様子。

「…まだ何かあるんでせう？」

「いや実験が何処で行われるのか知ってそうな奴が一人いるんだが…」

「知ってんのか？なら聞きに行こうぜ。」

「……ああ」

話についていけず見舞いの品を食い漁ったインデックスと
ブロントさんにしがみついて寝ていた姫神を担ぎ、病院を出た。



インデックスと姫神を当麻の部屋で待たせておいて、
二人はある場所へと向かう。

ついたのは当麻がいつも補習の帰りに通る横断歩道の上、
そこに居たのは一人の少女。

学園都市第三位、超電磁砲にして

オリジナル
シスターズの本物、御坂美琴。

横断歩道の手すりに肘をつき、どこか遠い目で夕陽を見つめている。

「久し振りだなにさか」

「…そのわざとらしい間違い方何とかしてくんない？
ブロントさん。」

御坂は軽く伸びをするとこちらを見て、
同時に不敵な笑みを浮かべる。

「ああ、アンタも一緒なのね。
それで？この美琴様に何の用？」

隠していても仕方が無い、当麻とブロントさんは顔を見合わせて
頷くと、当麻が問いに答える。

「絶対能力進化計画…ここまでいったら分かるよな？」

御坂の表情が強張る、どうやら知っているようだ。

「…何処で知ったの、それ」

御坂の声は驚くほどに暗く、低かった。
ブロントさんが御坂に経緯を説明する…。

「…という訳でFA」

「学園都市一位に喧嘩売って、それだけピンピンしてるって…。」

「いや俺も死にかけたんだが…おもえの妹に助けられたんだよ」

その言葉をブロントさんはかみ締めるように話す。

夕陽に照らされて光る鎧が作った光の線は、ブロントさんの顔に当たり、まるで涙のように輝く。

「俺はあの実験をズタズタにしに行きたいんだが何処で次の実験が行われるのか知らないのだよ
だがお前なら知ってるんじゃないかと思った（予想）」

ブロントさんの眼光は鋭く、その迫力は

「教えないなら拳で聞き出す」と物語っている。

「…どうせ止めても無駄なんでしょね。」

「ああ俺もとうあも止まる気はない」

御坂は観念したようにため息をつき、ポケットから一枚の紙を取り出してブロントさんに投げ渡す。

「こるは？」

「次の実験の場所と時間、今日だから急いだ方がいいかもね。」

「すまにいな御坂おい当麻行くぞ」

「…ああ」

当麻とブロントさんはそれだけ言って走っていった。

残された御坂は

「…あいつちゃんと人の名前呼べたのね。」

と呟いた。

第二十八話：どうやってお前が生きちゃいけないって証拠だよ

学園都市立ち入り禁止地区のひとつ、名も無い実験場。

そこに居るのは二人、一人は片膝をつき

右肩から流れ出る血を抑え、正面の少年を見つめる少女。

一人はそれを見下すように悠々と立ち、

ポケットに手をつっ込んで笑みを浮かべている。

ミサカ9999号と、一方通行。

「ンだよ、これで終わりかア？」

ミサカは尚も必死で立ち、逃げ惑う。

そこには間違いなく『実験動物』ではなく

死から本能的に逃げ回る『少女』がいた。

一方通行の笑みは薄れ、最後にはつまらなそうに
欠伸を一つ。

少女の苦しいな嗚咽だけが聞こえる実験場に

二つの足音が響く。

一方通行はそれを待っていたかのように振り返り

再び笑みを浮かべる。

「よオ、遅かったじゃねエか。」

その瞳が見据えるのは、上条当麻とブロントさん。

一方通行は近くにあった鉄柱を何本も二人に向けて発射する、

轟々と音を立てて突っ込んできたそれは、盾に弾かれてすべて床に沈んでいった。

「知らねェ顔もいるがそいつはなんだ？」

「俺のフレでありPTメンであり大事なLSメンだが」

「で？仲良く死ににきたって訳かァ！！」

一方通行は姿勢を低くし突っ込んでくる、それを見越したかのように当麻が前に出て

一方通行を殴り飛ばす。

数メートル地面を転がった一方通行は顔を抑えながら地面に蹲っている。

「…あ？…いてエ、そオだったなァ、痛いってこんな感じだったなァ…。」

ははは、イイねェ最高だよオマエラ！！
ぶっ殺して愉快的オブジェにしてやるよオ！！」

一方通行が近くにあった鉄柱を飛ばそうとするが――

――自らの顔面に突き刺さった右手に阻まれた。

「歯を食いしばれよ、最強――」

見上げた先には先程立っていた少年、
自分を殴り飛ばした少年。

「――俺の最弱^{なぐち}は、ちつとばっか響くぞ」

「…面白ェよ、オマエ、最っ高に面白ェぞ、オマエ!!」

学園都市最強と最弱の戦いが始まった。

?

「Oiしっかりしろ!」

ブロントさんは倒れている少女にケアルをかける。

少女は僅かに目を開けると、ブロントさんに
顔を向ける。

「…何をしているんですか、とミサカは問いかけます。」

「何ってお前を助けてるんだが?」

「…何故、ですか?」

「はいイ?」

「ミサカは所詮模造品です。必要な材料と薬品さえあればボタン一
つで

大量生産できるのです、とミサカは説明します。」

「ほむそれで？」

「作り物の身体に借り物の心、単価にして十八万、在庫にして一万の余り物の為に――」

「だからなんだっていうんですかねえ？」

「――えっ？」

「作られた身体ならいくらでも壊していいなんて理論は絶対にNOだし心は借り物だろうが持っていればそれはお前自身の心に変わりはにいい」

ブロントさんは一瞬言葉をつまらせると、微笑を浮かべ

「おもえは間違いなく『一人の人間』なんですわ？お？誰かがそれを否定するんなら俺は奥歯が揺れるくらいの右ストレートでそいつを吹き飛ばすだろうな」

言葉を繋ぐ。

偽り無く本心の言葉は、『人間の少女』の心を動かすには十分だった。

《――お前の欠陥も大した事がない事が証明されてしまった感》

何故かは自分でも分からない。

《——お前が飼ってもいいんじゃないか？まあ一般論でね》

胸が痛い、恐怖ではない。

《おもえは間違いなく『人間』——》

涙が流れるのが自分でも分かる。

情報では冷たいはずの涙は、今は心地よい位温かい。

「まずはお前をお前たちを実験動物扱いした
あの白髪を全力でズタズタにしてくるからミサカは
ここにいてくだふあい（懇願）」

それだけ言ってフロントさんは走り出す。

その背中とは、全てから身を守ってくれる
強固な盾を連想させるほど、広かった。

第二十九話：最強とか絆を前じゃこんなもん

二人の少年の地面を蹴る音が実験場に響く。

一方通行、学園都市最強のその少年はレベル零、つまり最弱の少年、上条当麻と戦っている。

学園都市にいるものなら秒単位もかからず即答できるような勝負の行方は、ありえない方向へと向かっていた。

その戦いは最強の虐殺でも遊戯でもなく、最弱の善戦だった。

「何だ、ちくしょう。何だってテメェに拳の一発も当たンねェんだよオー！」

一発でも拳が触れれば勝負は決まる、そんなありえないほど理不尽な勝負。

だが上条当麻は一方通行の攻撃を物ともせず避けている、一方通行の攻撃はまるで子供が大人に楯突こうと腕を振り回しているかのように。

逆に不幸体質で喧嘩に、いや喧嘩を売られて拳を避け続けることに慣れた当麻に当たるはずも無かった。

当麻の拳が一方通行の顔面に吸い込まれるように当たり、そのまま大きく相手を殴り飛ばす。

一方通行はコンテナにぶつかって止まる、ぶつかったコンテナは大きく凹む。

だがそれは一方通行の逃げ場を失ったことを意味した。

「…ンで、なんでこの俺がテメェ如きにイイ!!」

激怒の形相を浮かべる一方通行の白髪が、風に揺れる。

(…、風?)

当麻に追い詰められていた一方通行は、不意に気付く。

一方通行の能力は、あらゆる力のベクトルを操ること、つまり

この手が、大気に流れる風の向きを掴み取れば、

世界中にくまなく流れる、巨大な風の動きその全てを
手中に収める事が可能。

一方通行は笑った、当麻が危険を感じ取るがもう遅い、

一方通行が両手を上に高々と掲げると、

風でできた巨大な破壊の塊が、産声を上げた。

「一体何なんですかねえこるは!?!」

ブロントさんが駆けつけ、当麻の前に立つ。

と同時に見えざる風の槍がブロントさんを襲った。

なんとか盾で受け流すも、その威力は

盾を掴んでいた腕を震わすほどだ。

一方通行は確信した、今まで苦戦していたからこそ

生々しく伝わるその感情。

一方通行を超えられる者など、存在しない。

「はア！結局ヒーロー気取っててもその程度かよ！？」

もう一発かましてやるからブザマに床に這いずり回りやがれエ！
」

ブロントさんは再び盾で攻撃を受け流す、

だが相手の風の塊のせいで近付くことが出来ない。

更に風の塊は轟と大きな音を立てて光り輝く、
夜にもかかわらずもう一つ太陽が出来上がったような眩しさ。
そして肌で感じる事が出来るほどの高温。

（光、風、高温…電気？）

ブロントさんの頭の中には最悪の方程式の答えが
完成した。

「高電離^{プラズマ}気体…おい馬鹿やめろ！此处一面を焼け野原にでも
するつもりなんですかねえ！！」

ブロントさんが止めるも、一方通行はぶつぶつ何かを呟くだけで
反応しない。

何とかアレを壊さないと…最悪の結果になってしまう。

（何か…何かにいか！？）

不意にブロントさんの前髪が風で揺れ、目に入った。

多少の痛みを覚えたものの、名案が思いついた。

(……、風！)

とっさにブロントさんはサポ学にチェンジし、烈風の陣を詠唱する。

風が巻き起こり、プラズマの形が崩れていく。

(…あァ？何が起こってんだ！？俺が計算式を誤る筈がねェ！第一風の流れが

不自然すぎんだろォが!!！)

プラズマは空気に溶けて、その姿を消した。

呆気にとられている一方通行の前にいるのは、鬼の形相を浮かべた二人。

当麻は右手を振りかぶり。

「メガトン！」

ブロントさんは自分にインビジブルを唱え左手を振りかぶる。

「ギガトン！」

目標は目の前の悪党、ミサカの命を実験動物と笑い、一万もの命を絶ってきた大悪党。

当麻の右手は空を切り、ブロントさんの左手は雷を運び、その拳は一方通行を――

「パンチ!!」

――大きく何十メートルも吹き飛ばした。

一方通行の腕が力なく崩れ落ちる。

ブロントさんと当麻は両手を掲げると、

「完全撃破!!」

実験終了の合図を告げた。

第二十九話：最強とか絆を前じゃこんなもん（後書き）

一日に六話投稿とか絶対作者馬鹿だろ…的な感じですよ。
あ、まだプロログもあるんで楽しみに。

第三十話：このままじゃ学生全部フレ登録する羽目になる

月に照らされたぼろぼろの実験場。

倒れる最強と、その近くに立つ最弱の姿。

白銀に輝く異世界人の騎士とその隣に立つ

少女。

悪逆非道な実験は、最強が最弱に負けるという結末で幕を下ろした。

「…これで実験は中止になるのか？」

「最強とかいってたがレベル0に負けた時点で最強じゃなくなったから実験は終了するだろうな（確信）」

「そっか、んじゃ帰ろうぜ？」

当麻の言葉にブロントさんは首を振る。

「…いや俺はもう少し此処に用事があるから先に帰って下しア」

当麻は用事について疑問を感じたが、

別に構わないだろうと早めに帰ってくるよう伝えてその場を後にした。

「一体何をするつもりですか、とミサカは問いかけます。」

「…ほんの少しコイツと話がしたいだけでF A」

ブロントさんは倒れている一方通行にケアルを唱える。
反射は切れているようで一方通行の身体の傷は消えていき、
ものの数秒もしないうちに一方通行は目を覚ます。

ムクリと上半身を上げると、今の状況を理解したようで
少し恨めしいような顔をブロントさんに向ける。

「…勝者様が敗者に一体なンの用だア？」

「おもえと話をしたかっただけなんだが何処もおかしくは無いな」

「俺はオマエと話す事なンかねェな。」

一方通行はそう言うと地面に寝転がり
ブロントさんから目を背ける。

「おまえに無くてもおるにあるという事実」

ブロントさんがひたすら催促すると、どうやら一方通行も
諦めたようで舌打ちをしながらブロントさんを見る。

「話ってのはなんだ、つまんねェ話だったら殺すぞ。」

「ああそれなんだが――」

———【フレンドになってくれませんか?】」

「はアアアア!!? オマエマジで馬鹿じゃねエかア!!? ?
なんかもっと有るだろオが言うコトがア!!!
第一俺は一人のシスターブツ殺した人間のクズだろオが!!
頭ン中中身入ってンのかア!!? ?」

「【むむむ。】その言い方忍者にそっくりだな
ほんの少しビビッた」

ブロントさんは軽く息を吐くと、一方通行の疑問に
答えていく。

「まあやり方を間違えていたのはおもえが悪いが
力を求めるのは冒険者の醍醐味だからよ

共感できるんですわ」

「…」

一方通行は怒鳴りそうになる口をつぐんで黙って話を聞く。

「それにお前は自分の事を人間のクズといったがこれでおあえが罪の意識を感じてしまっていたことが証明されたな」

「!？」

「本当のクズはそんな事言ったりしないからな」

ブロントさんの言葉に一方通行は驚愕の表情を浮かべた。ブロントさんは話を続ける。

「それにおもえとおるが最初に出会ったとき最後のあの不意だまの一撃なら簡単に俺を殺せたはずなんですわ？お？」

「…で？俺がほんとは優しい人間でしたアとかいうつもりか？」

一方通行はブロントさんを睨みつけ、「馬鹿馬鹿しい」と呟く。

「で？だからどうだってンだア？
一万人ブツ殺して罪が消えるハズがねェだろうが。
今更どのツラ下げてなにしろっていうンだ。」

一方通行の顔には既に残酷的な表情は見えない。
ただ、悲しげな表情を浮かべて空を見上げるばかりだ。

「お前それでいいのか？」

不意にブロントさんが問いかける。

「…どオいう意味だ？」

「確かにおもえは悪党かも知れにいがよ悪党が善行しては
いけないって誰がきめたって証拠だよ？
一度悪党ぬなったら一生罪背負って生きていけないって
法律は俺の記憶上には存在しない」

「ハッ、綺麗事をゴチャゴチャよくもまア
そんな恥ずかしげも無く言えるもんだなア？」

「綺麗事だが事実は事実だからな」

「で？俺なンかとお友達になってどオすンだ？」

「お前が悪党から騎士ヘジョブチェンジするのを
見届ける（予定）」

「…、マジでくだらねェな。」

一方通行は立ち上がると、すたすたと歩いていく。

三メートルほど歩いて立ち止まると、

「馴れ合いするつもりはサラサラねエが、このままクソヤロウのままいるつもりもねエ：フレンドだかなンだか知らンが好きにしろ。」

それだけ言うと、早足で去っていった。

その姿が闇に溶けて消えるまで、一方通行の首の赤みが消えることは無かった。

「もう発言してもいいでしょうか、とミサカは空気を讀んだのに空気になった不条理さに腹を立てつつ問いかけます。」

「：ああもういいなお前はどうするんだ？」

「実験が中止になったことでミサカの居場所はなくなってしまいました。」

ですので貴方の家に居候することにします、とミサカは責任をとらせます。」

上条家に新たな居候が増えたことは言うまでもない。

第三十一話：女心はナイトでも読めないあるさま；

（今回の地の文はブロントさん視点でお送りします）

「ブロントさん。その女は誰。」

俺は今HPぬ帰ってきたのだが何いきなり睨んできたくく目神
何で怒ってるのか理解不能状態だが俺は寛大だから
とりあえず質問に答えるだろうな

「誰かと聞かれたらさっき話した計画の被害者だな」

「で。何故此処にいるの。」

「おもえと同じ理由だが何処もおかしくないな」

何故か知らにいが冷え神は居候が増えることには
どちらかというと大反対だったことがバレバレで

「何か用があるなら言ってください、とミサカは不快感を
露にしつつ言います。」

後ろからも本気の殺気出してきたんだが；
二りの間に電撃のオーラが見えそうになる；

「と、とりあえず上がろうぜ？」

とおあが見事な正論で返した素晴らしい意見だすばらしい

こちらリビングのナイトだが部屋のふいんきが重すぎる；

おいィ：俺が何か悪い事したのかよいんふえっくうも

俺の後ろに隠れて震えてる系の事実があるんだが；

テンブルを挟んで姫あとみあsかがまだ睨みあってるんだが
h a i ! 無言が怖いんです！

とうなは「か、買い物行って来ます！！」とかいって九秒で
とんずらしていったしよちくしょうと馬は馬鹿だ；

だが「確かになとyまがこの家を主だが
この家では俺が一番年上だからなこの件を
治めなければならないだろうな（義務）」

「お前ら初対面で争ってる意味が分からない不具合
ケンカするのは勝手だがそれなりのしかたがあるでしょう？」

「「……………」」

o i みう s ミスなんでこっちを見てるんですかねえ？

追撃のWため息で混乱は更に加速した

「この人は。本当に鈍感。」

「まったくです、とミサカは呆れて答えます。」

今度はいきなり仲良くしだした意味が分からん

とおまはやくきてゝはやくきてゝ；

第三十一話：女心はナイトでも読めないあるさま；（後書き）

短いけど章の締めとして小ネタ投稿しますた

ストんりーは日常編してから進める予定ですので
生暖かく見守って下しあ（懇願）

第??話..カカツと質問変身

〽上条家〽

「今から質問返済コーナーIN上条家を行いたいと思います、とミサカは始まりの挨拶をします。」

「…なんでせうかそれは？」

「読者の感想。質問に答えるコーナー。」

「そるがなんで今更やるのか理解不能状態
説明をおねがうします（懇願）」

「こくとーぱんが感想を見てない人って多いはずだから
おまけ的なノリで答えよーっていったんだよ。」

「…それでいいのか；」

「地の文なし、gdgdでも宜しい方だけ見てください、
とミサカは忠告します。」

「そろそろ始める。準備は良い？」

「オッケーだよー」

「何か腑に落ちねえが…まあいいか。」

「どちらかというと準備万端でうs」

「まずはあのアンケート。まったく意見が来なかった。」

「ロムさん、シグムレイさん、ご意見ありがとうございましたと、ミサカは作者のメッセージを読みます。」

「唯一ぬにの投票者に作者の感動が有頂天になった系の事実があるからな」

「1と2か…ま、なんとかなるだろ。」

「私は日常編にも出番が無くなっていくんだね…。」

「質問その一。」

『上条家に新たな居候が増えたことは言うまでもない。』

また上条の家とか

これ以上増える前に小萌先生の家とか

別な場所に行ってもらった方がいいんでね？

とか突っ込まないのが大人の醍醐味？』」

「三ノ丸さん御質問ありがとうございます、

とミサカはメッセージをそのまま読み上げます。」

「まあ別に俺としては構わないが…どうすんだ？」

「本人達がよいならおるも構わにいが…」

「……………」ジ―

「…二人の目線が怖いかも。」

「…このあるさまだよ；

作者は日常編で二人にも出てもらいたいという考えもあるらしいんだがこのままでは一人の時間も作れない；」

「質問その二。

『日常編の絡みを増やしたい系の願望も分からなくはにいが

現時点でブロントさん、とひま、インでつく素ひ芽髪、ミさ科の5人ブロントさん達はいつたいどこで寝てるんですかねえ？（スペース的な意味で）』」

「再び三ノ丸さん御質問ありがとうございます、とミサカは台詞をそのまま繰り返します。」

「おるは大体壁に寄り添って寝てるぞどんなときでも警戒は忘れない（基本）」

「何に警戒してるんだよ…」

「寝ぼけて噛み付いてくるいdねっくす」

「そ、それは仕方ないんだよ！ブロントさんの髪がそふとくりーむに見えたんだもん！」

「……;;」

「ブロントさん。泣かないで。」

「以外に豆腐メンタルなのですね、とミサカはブロントさんの意外な一面を見れたことに感動します。」

「質問はこのくらいか？」

「今のところは。全部。」

「まだまま質問や感想お待ちしています、とミサカはカンペを見つつ答えます。」

「おなかすいたー」

「【むむむ。】もうこんな時間だったかと驚きが鬼なるじゃあ飯作るから黄麻手伝って下しあ」

「はいよっと、今日の飯は？」

「クリんむシチウでFA」

「…なんだか終わり方が地味ですね、

とミサカは素直に呟きます。」

「じゃあ。最後に一つ。」

『この小説のPVも二万七千アクセスを突破し、作者としては嬉しい限りです。』

たくさんの感想も頂き、誠に有難う御座います。

この小説を此処まで続けてこれたのは皆さんのおかげです。
あわよくばこれからこの小説の応援を

【はい。】【お願いします。】『』

「以上でこの回を終わります、駄文失礼しました、
とミサカは終了の挨拶をします。」

「次回もお楽しみになんだよ!」

第三十二話：こうもついていらると一人の時間も作れない

（中央通り）

夏半ば、普通の夏休み中の学生ならば、旅行や遠出で夏を楽しむものもある、がここ学園都市は広い上に娯楽施設も多いとあっていつも通りの賑やかな雰囲気だ。

ブロントさんはそんな学生達の視線を浴びながら町を歩いていた。

前とはまた違う注目の浴び方で。

その理由は四つ。

一つ、ただ単に学生の中を大人が歩いていたら目立つと言う理由。しかし殆どが学生と言っても、学園都市も大人は普通にいるためこれは少数。

二つ、最近ブロントさんの噂が学園都市中に広がりつつある事。第三位の超電磁砲を素手で打ち返したとか。

第一位をレベル0と共に打ち負かし、更にフレンドになったとか。路地裏でスキルアウト数十人を拳一つで病院送りにしたとか。ゲーセンのパンチングマシンを店の外まで殴り飛ばしたとか。

…全て事実であるが為、尚更噂になる。

三つ、和服を着た長身イケメンとあって、殆どの女子が目線を向けてくる。

四つ、ブロントさんの両隣にいる少女達。

右にミサカ、左に姫神と正に両手に花、二人とも

美人なので特に男子からの嫉妬の目線が熱いし冷たい。

しかも二人ともブロントさんの手をしっかりと繋いでいるので今にも男子が殴りかかってきそうなオーラを出している。

ちなみにミサカは御坂の妹として既に広まっております、

特に騒ぎが起きることは無く（今回は除く）、

姫神は教会から『吸血殺』を抑えるネックレスの十字架をステイルからもらったので外出は特に問題ない。

ブロントさんが「離れる気はないのか；」といっても二人は「聞こえませんか」や「聞こえてない。」といって全く取り合ってくれない。

（俺はただ散歩に出かけたただけなんだが
いつの間にか拷問に摩り替わってたどうしてこうなった；）

周りの目線も辛いし何より今の季節は夏真っ盛り、
更に昼時とあって熱い、とにかく熱い。

何とか目線だけでも避けようと、人通りが少ない
所へ行くことにした。

少し歩いたところで、人の気配が消えたことに気付いた、
ここは普通に通行の多いところなので不自然だ。

三人が不思議に周りを見回すと、後ろから足音一つとついでに

強大な殺気。

にっこりと笑顔を向ける神裂がいた。

「御久し振りですね、ブロントさん。」

何故だろうか、話しかけられたただけなのに首に刀を突きつけられたような嫌な気分になる。

隣の二人は特に気にした様子も見せていないが。

「…ああ感裂久し振りだなと感動が鬼なる」

浮かべる表情は引きつった笑い、顔に流れるは冷や汗。

相手は笑顔なのに全く安心できない、

一方通行もこの笑顔を向けられたら後ずさりするんじゃないだろうか。

「こるは人払いのル運ですかねえ？

お前もできたのか」

「いえ、ステイルに『お願い』したんです。」

神裂が顔を向けた先には体育座りをして路地裏で震えている哀れなステイルの姿があった。

十四歳の姿としては普通なのだろうがニメートルの体躯が震えている様は違和感しか感じない。

「そちらのお二人は？」

背後に鬼のオーラが付いた神裂が隣の二人に目を向ける。
どう見ても目が笑っていない。

「ブロントさんの家族です、とミサカは簡潔に説明します。」

不意にミサカの言った発言に神裂の額に青筋が浮かび、
背後の鬼が膨れ上がった。

「ブロントさん、少し宜しいでしょうか？」

「おkだから刀に手を伸ばすのは止めてくだしア；」

?< カット

?< え？

?< いや、移動駄文とかカット

「なるほど、そういうことでしたか…」

説明を終えると神裂は冷静さを取り戻したようだ。
再びブロントさんに向き直ると頭を下げる。

「申し訳ありません、少し取り乱してしまいました…」

「いや気にする必要は無いぞ別におれも気にしてないからな」

「ところで。あなたは誰？」

姫神が言うと、神裂はミサカと姫神に顔を向けて

自己紹介する。

「神裂火織と申します、お見知り置きを。」

「ミサカです、と簡単な挨拶をします。」

「姫神秋沙。よろしく。」

三人は自己紹介が終えると同時にボソボソと何かを話し出す。

ブロントさんは聞き耳を立ててみたが

「あなたも…」とか「あの人は…」とか断片的なことしか聞き取れなかった。

「そろそろ昼だな飯を食う系の用事があるから一緒に食事します」

ブロントさんが言い終えるより先に神裂が

同行を求める、その断ったら斬る的な意味を含んだ言葉を断れる筈も無く、昼は四人で食べるハメになった。

ステイル？俺のログには誰もいません。

第三十三話：このままでは俺の寿命が恐怖でマッハなんだが・

くとあるファミレス

夏の涼み所といえはやはりファミレスなどが一番だろう。

ただで涼しい店の中でゆっくりできて、少しお金を出せばアイスや冷たいドリンク、スイーツ（笑）なども頼める。

そんな快適なはずの店内で、男なら夢見るハーレム展開の中心冷や汗ダラダラの男が一人。

この小説の主人公ブロントさんである。

店の奥のテーブルにミサカ、姫神、神裂らと共に座っているのだがその空気が重い、とても重い。

特に先程のような殺意全開の空気ではない、が互いにしゃべることが無く場が沈黙していた。

「…とりあえず何か頼むべきだな腹が空腹ぬなって人生がゲームオーバーになるからな」

とりあえずこの空気を何とかする為に注文を要求すると、

三人ともが「確かに」などと呟きメニューを見始めた。

ブロントさんがお勧めの甘味を三人に教えると

三人は色々それぞれについて話し始めた。

（助かった終わったかと思ったよ）

などと安堵していると、全員が注文を終え再び静寂に包まれる。

ミサカと姫神は特に気にした様子もなさそうだが、

ブロントさんと神裂は顔を俯かせ気まずそうにしていた。

（おいィ：確かに気まづくなるのは勝手だがそれなりのなり方があるでしょう？沈黙する時間が惜しいだろ…、誰か助けてくれる奴はいないのか；）

ブロントさんが頭の中でH e l pを出してると、

「へえゝ私の妹含めてハーレムたあ、いい度胸してんじゃない？」

後ろから聞いたことのある声がかかった。

「みかかかなんでここにいるんだよ」

「言いにくい間違いするな！アンタちゃんと人の名前呼べるでしようが！」

「おいィ？質問を無視するなよ無視は俺の心をふるかいにするから（確定）」

「アンタも無視してるじゃない：はあ、ホントにアンタと喋ると疲れるわね…」

「お前が勝手に怒鳴って疲れてるだけであってお前が憑かれてるのに俺は無関係だから」

「怒鳴らせてるのはどこのどいつよ…」

御坂はがっくりうな垂れて隣の席に座る、ちなみに

ミ
姫

□□□□
神　　ブ　　御

席はこんな感じ。

「で、何でアンタはそんな状況になってる訳？」

「散歩に行きます！↓ついてくるるやつPOP

↓散歩する↓神秋pop↓飯にするか

↓御ササpop↑今ココ」

「あっそ、アンタって本当に…なんていったらいいんだろ」

「超間だったら不幸だってい運だろうな」

「…それは私が現れたから言っているんでしょうか？」

「違うから刀納めテ！こんあ所で人生終了とかsyレにならにいです；」

「じゃあ。私？」

「違います！お願いでうからその魔法の棒の先から電撃出すのも抑えるべきそうするべき！」

「…では私なんですわ、とミサカはブロントさんにライフルを構えます。」

「違うと言っているミサカ！落ち着いてくだしア店内の目線が気になるんです；」

あとどこからそるをどこから出した；」

三人は細目でブロントさんを見据え、個々の武器を収めるとブロントさんは安堵の息を漏らす。

「うん、よく分かったわ、『可哀想』が一番適切ね。」

「助ける気は無いのか；」

「アンタ助けて私になんかりターンでもあるのかしら？」

「…普通に血の通った人間なら俺の状現実状況の絶望がどれほどのものか

わかると思うんだが；」

ブロントさんが机に突っ伏して想像を絶する悲しみに襲われていると、それぞれが頼んだ物が来た。

ため息をつきながらも甘味に舌をうっている

「オイオイ、アホがアホ面ぶら下げてなアにやってんだア？」

再び聞き覚えのある声が後ろからした。

ブロントさんは驚きつつも

（ああまたややこしいことになるな（核心）

とか思っていた。

第三十四話：空気お悪くするヤツは心が醜い

後ろから聞こえる声に振り返る。

そこに居たのは、ファミレスの空気に浮いている少年。
学園都市第一位、一方通行だ。

瞬間、御坂の顔に驚愕の色が走る。

二秒後にはスカートのポケットから一枚のコインを取り出し、指に乗せ一方通行に向けた。

一方通行はその姿を見て少し顔をしかめた後、御坂を挑発するかのよう^に笑う。

ファミレスの喧騒が止み、周りの視線は二人に向かう。

「…一方通行ッ!!」

御坂は奥歯をかみ締め、一方通行を睨む。

が、一方通行は不敵に笑うだけで、構えもせず手をズボンのポケットに突っ込んだままだ。

「オマエ、オリジナルかア？なるほどなアそっくりじゃん

『俺がぶっ殺してきた妹共^{クローン}』にさア」

御坂の顔が憤怒に歪み、腕が震える。

その手からコインが離れようとした瞬間、

一方通行の頭がブロントさんに《殴られた》。

「その辺にしとくべファミレスで暴れらたら他の客にめんわく
あとわざあwざ挑発するな」

「いってエな…ンで殴れンだオマエ、反射切ってねエぞオイ」

「インビンかけて無理矢理ベクトル押し込んでるからな能力とか無関係」

「無茶苦茶だなクソったれ…」

頭を抑えてうずくまっている一方通行に思わず御坂はコインを落とす。

キインと音を立ててコインは床を転がり、ブロントさんがそれを拾い上げた。

「そおいえばミ釈迦にはあだ話してなかったな」

∞

「…アンタってさ、ホントに馬鹿？」

「アックセラレンたにもそういわれたんだがどうやって俺が馬鹿って証拠だよ」

証拠出してみろよ出せないんなら俺の勝ち」

「…もういいわ、馬鹿が移りそうだし帰る。」

御坂はげっそりとした様子で入り口に向かう。

少し進んだところで再び一方通行を睨みつけ

「アンタの事信用したわけじゃないから」と残しそのまま
ファミレスを出て行った。

「まア俺がンな簡単に信用されるワケねェがな…」

一方通行はそのままふらりと御坂の座っていた席に座る。

空気がまた重くなったのでブロントさんは一方通行に
話しかけてみた。

「そんな言えばお前は何でここにいるんですかねえ？」

「ンだよ、俺がココに居たらなンかわりイのかよ」

「似合っていない系の事実があるんだが（リアル話）」

「…別にンな冷凍モノのオンパレードには興味ねェが
ココのコーヒーは気に入ってンだよ」

一方通行がコーヒーを頼むと、店員はかなり声が震えていた。
…声にドスが効いてて怖い。

「ンで？オマエは女に囲まれて何やってンだア？」

「散歩に行きます！↓ついてくるるやつPOP

↓散歩する↓神秋pop↓飯にするか

↓御ササpop↓一步pop↓見差かログアウト↑new!!」

「…そオかよ、オマエってよオ…」

「おい馬鹿やめろ二回目はマジでやばいんでうS…」

「…ところでブロントさん、其方は？」

先程から空気を読んで黙っていた神裂が

一方通行の方を向き問う。

ちなみにミサカはパフェに目を輝かせていて（現在進行形）
姫神はブロントさんの奢りという事もあって沢山頼んだ
デザートと格闘中である。

「あきゅセララーたの事か」

「原型止めてねエぞコラ、素敵なジャンクになりてエか？
後口にモノ入れながら喋ンじゃねエ！」

ブロントさんが口にケーキを頬張りながら、大まかに
フレになった経歴を話す。

色々と突っ込み所があったのを一方通行が青筋立てながら
突っ込んでいるが。

「貴方って人は本当に…抜けていると言うか…」

神裂は呆れたように言う、前の二人とほぼ同じような
反応だ。

「おいィ…杉田事を言っても仕方ないからな
尾張良ければ全てよしと言う名ゼリフを知らないのかよ」

姫神とミサカが完食したのを見計らって、ブロントさんは席を立てて会計をカカツと済ませる。

「アクセ亜鉛たも汚い忍者から至高のナイトにジョブチェンジしたからな

前ぬこうだから何もできない；なんてことは無い」

ブロントさんは満足げな表情を浮かべるミサカと

食い倒れた姫神を担いで店を出て行った。

神裂も慌ててその後を追う。

店に残された一方通行は一人

「どオも調子狂うんだよなア…」

と呟いた。

第三十五話：事前に旅行行くとわかっていれば準備も出来　ますが　わからない

「はいイ？海に行く？」

神裂が用事があるといって帰ったので、三人は上条家に帰宅するとそこには大きめのスポーツバッグと手で引く式の旅行ケースにせつせと着替えなどの荷物を詰めている当麻と旅行に行く聞いて小学生のように喜ぶインデックスの姿があった。

「海だよ！海！旅行旅行ー！！」

「喜ぶのは勝手だが近所めいわくだから踊るのと騒ぐのはやめうrべきそうするべき」

「旅行ですか、とミサカは初めての経験に目を輝かせます。」

「私は。旅行行きたい」

とミサカと姫神も興味津々といったところでそこら辺に落ちていた旅行先のパンフレットを並んでみている。

「何いきなり旅行行くと決めてるわけ？」

でもまあry工は俺もどちらかという大賛成」

と、言う訳で満場一致で旅行行くことが決定したのだがフロントさんが一つ問題を発見した。

「だがよ音デックスはどうするんですかねえ？」

IDも何も無いあるさまじゃあ出た瞬間ゲントに捕まって

一卷の終わり」

「…あ」

ブロントさんの言葉に当麻は言葉をつまらせる、どうやらまったく何も考えていなかったようだ。

ブロントさんはやれやれといった様子で携帯を取り出すと何処かに掛け始めた。

数分後、通話が終わったブロントさんは

「俺の知り合いのハッカーの山脈に頼んで偽造IDを臨時で作ってもらえるよう頼んだからこれで安心しろ」

無茶苦茶なことをさらっと言ってのけた。

「…それって安心して言えるんでせうか？」

「今頼んだのは俺が最も信頼してるハッカーのフレの一り一時間もあれば出来るらしいからこの問題は早くも終了」

で！

「海だー！！」

送迎バスを一回り小さくしたような車に乗り、五人は現在海に見える砂浜に到着した。

ガッチガチに固められた警備もあっさりと通過できたので当麻は改めてブロントさんの恐ろしさを再認識した…。

堤防に立って砂浜を見回すが、クラゲが大量発生中とあって客足はゼロのようだ。

一部だけクラゲが侵入できないように網がぐるっと囲むように張ってある。

ビーチパラソルの下に青いビニールシートを張り水着姿で遊ぶ三人を眺めるブロントさんと当麻。

理由は当麻は疲れたから、ブロントさんは誰かが溺れた時の救助のためということだったが

しばらくしてブロントさんはミサカと姫神に、当麻はインデックスに引きずられていった。

夕方になったので宿に戻ると、舟盛の夕食という中々豪勢な食事が待っていた。

風呂にも入り終わり、部屋に戻って各自で布団を敷き少し雑談した後眠りにつく。

ブロントさんと当麻は、此処に着てよかったと心から思った。

翌日には全力でそれを撤回したが。

第三十六話：旅行つに異変は一般的にかんがえられないでしょう?；

旅行二日目、ブロントさん起床。

現在の時刻は午前五時、いつもならあと一時間は寝ている筈なのだが最近壁に寄りかかって寝ているので

平たい床に敷く式の布団でもフカフカの感触は身体に馴染まなかったようだ。

部屋を見渡すとやはり真っ暗で、誰かが寝ている場所は何となく分かるが

誰が何処に寝ている、と言うのはこの暗さでは流石にわからない。

窓を見るとカーテンが閉まっているから暗いと分かったが、開けて誰かが起きてしまったらと思うと開けるのは気が引ける。仕方ないので皆が起きるまで外の砂浜でもランニングして過ごすことにした。

ブロントさん達が止まっている部屋は二階、階段を下り外へ出る。

早朝とあって真夏の暑苦しさなど微塵も感じない。

広大な砂浜と波打つ海を見て、美しいと表現をするより先にサポジョブを狩人に変えて蟹がいなか確認してしまう自分の感性が腹立たしいが。

砂浜を何度か往復すると、朝日が昇りきり

辺りの砂が眩く輝きだす。

そろそろ朝食の時間だろうと部屋に戻ろうとしたが、鼻腔をくすぐる香ばしい香りが何処からともなくやってきた。

朝食前だが少しつまむ程度なら、と欲に負けて

フラッと香りをたどってみる。

少し歩くと古い佇まいのある海の家が見えた。

どうやら香りはそこから臭ってきたらしい、

さっそく注文しようと店内を覗くととうもろこしを焼いている者の影が見えた。

三步ほど近づくと体が本能的に固まる。

その人物は二メートルほどの巨体で真紅に染まった髪を肩まで伸ばしていた。

Tシャツにハーフパンツ、肩からタオルをかけているその男は間違いなく、

魔術師、ステイルⅡマグヌスだった。

「おう、兄ちゃん朝っぱらからランニングたあ感心感心！

ほらおめえさんの為にコイツを焼いておいたんだ、

良かったら買ってきな！」

まあ金取るがな！と豪快に笑うその顔には目的の為に手段を選ばない冷酷な一面は全く見当たらない。

とりあえずとうもろこしを買い上げ、当麻に報告しておこうと部屋に戻る。

部屋の扉に手をかけた瞬間、当麻の悲鳴が耳を劈く。

「どうすた黄麻！」

勢い良く扉を開け、部屋に飛び込むとそこに広がっていたのは目を疑うような光景だった。

部屋を中心に当麻、そこまではいい。

問題はそれを囲む三人だ。

一人目、風が吹けば折れそうな身体に白い肌と髪、烈火の如く赤い双眸を持つ男。

学園都市第一位、一方通行。

二人目、緑髪のオールバックにスリリとした体型、立っただけで人に威圧を加えるような威厳を持つ男。

鍊金術師、アウレオルス・イズード。

三人目、最初はミサカかと思ったが瞳には何となく輝きがある。毎日生活を共にしていなければ全く分からない変化だが何となくとして違和感が残る。

思考はそこで停止した。

「おい イ イ イ イ イ イ イ イ イ イ イ イ イ イ イ イ !! !! ? ?」

「ブロントさん。どうかした？」

ブロントさんのシャウトに動じず首をかしげる

一方通行（巫女服）、妙に似合っているのが何ともいえない。

「むーなんかさっきからとうまとブロントさんが変だよ？」

頬を膨らませるアウレオルス（修道服＋杉田ボイス）。
コメントは控えさせていたどころ。

「先程から二人の様子がおかしいです、とミサカは
前に発言したちっちゃいのの言葉を繰り返しつつ
疑問を抱きます」

「ちっちゃいのは酷いんだよ！」

本来ありえない組み合わせが喧嘩している間に思考回路を
繋ぎ合わせ、当麻を引きずって部屋を出る。

当麻は既に気絶状態だ。

ブロントさんはとりあえず当麻の真似をして

「不幸だ…英語で言うアンラッキー」と呟いた。

第三十六話：旅行つに異変は一般的にかんがえられないでしょう？；（後書き）

やりすぎた！！！！
…感想お待ちしております。

第三十七話：リアルにさっき向けてきてヤバかった＞＞神秋

とりあえず朝食を三人分部屋に届けるように手配し（この辺の（ry）

現在二人は砂浜を歩いているところだった。

その後姿は見つめているだけで何処となく悲しくなってくる。

「ブロントさくん？別に俺に恨みがあるってんなら

こんな早朝ドッキリ仕掛けなくても言ってくれてもいいんでせうよ？」

「俺じゃないぞ俺じゃないからどうやって俺がやったって証拠だよ
台あた^{アクセロリッタ}い一本通報がドッキリに参加するはずがないし
溢れ折るスも今は日本にいないという事実」

二人は顔を見合わせた後、深くため息をついた。

浜辺にいたところで何一つとして解決しないのだが、今はこうでも
していないと心が折れてしまいうさだ、というのが今の二人の心情
である。

二人が十分間程度で両手の指の数を超えるほどしたため息をつき
ながら

「あゝ海が綺麗だな」なんて現実逃避をしていると

「うにゃーっ！カミやーんとブロセンサー、やっと見つけたんだぜ
ーい！」

いきなり奇怪な猫ボイスが飛んできた。

声のする方向を振り返ると、百八十センチという巨軀に

短い金髪を当麻のように尖らせ、アロハシャツに首にかかった金の鎖が合わさると、何処からどう見ても不良に見える男がズザーツと滑り込んでくる。

「つ、土御門？」

「おいィ？ 何でお和えが此処にいるんですあk？」

彼の名は土御門^{つちみかど}元春。

当麻の隣人にしてクラスメートで、極度のシスコンであるとは（本人は隠しているようだが）当麻のクラスの全員が知っている噂である。

当麻の隣人であるのももちろんブロントさんのことも知っている。何度かメイド育成学校の寮から脱走してきた妹の舞夏^{まいか}と一緒にブロントさんの料理を食べに来たこともあるし。

その料理の腕と教師になったことでブロントさんのあだ名は「ブロセンセー」である。

「…その様子だと二人ともオレが『土御門元春』に見えてるぜよ？」

「確定的に明らかだが当たり前だろ」

「…いや、まさかにゃー」

土御門は何度か独り言を呟いた後、「ま、いいか。」とブロントさんと当麻に顔を向ける。

「とにかくカミヤん、ブロセンセー、ここは危ないんで逃げよう。もうすぐ怒りに我を忘れた『ねーちん』が来るからここは

それはもう激ヤバぜよっ！」

うにゃーっ！と訳の分からない叫び声をあげながら大慌てする土御門に二人が首をかしげていると、後ろから砂を踏みしめる音とカチャン、という音。

尋常じゃない殺気にまるで壊れたブリキの人形のようにギリギリと後ろを振り返る。

そこに立っていたのは身長百七十センチと女性にしては長身で腰まで届く黒髪をポニーテールで括っている女性。

上の半袖Tシャツを脇腹で括っており、下のジーンズは何故か片足が根元までぶった切つてあるという奇抜なファッション。

そして整った顔立ちを憤怒に歪ませて、刀に手をかけているその姿は。

どう見ても般若かんざきです本当にありがとうございます。

「お久し振りですね、ブ ロ ン ト さん？」

神裂は不意に『貼り付けたような笑顔』を浮かべる。

人間顔は笑っているけど目が笑っていない、というのに恐怖を浮かべるが、今回ののは完全な笑顔でバリバリの殺気に向けてくるので尚更

「…マジ震えてきやがった怖いです；」

となる。

「ま、まあまあねーちん。二人は確かに『御使墮し（エンゼルフォール）』の

影響を受けてないが、どうやらクロって訳じゃなさそうだぜい？」

殺気を全開にしている神裂に流石にヤバイと思ったのか
慌てて土御門がフォローに入るが、神裂はあっさりと

「知っています」

と答えた。

「上条当麻はともかく、ブロントさんがそんなことをする人でない
ことは

『私が一番良く知っています』。」

神裂は笑顔を仮面のように貼り付けたまま、ブロントさんに迫る。
ブロントさんは思わず後ずさった。

「そんなこと、どうでも良いんです。重要なことじゃない。

例えば私が御使墮しの影響で

『日本語は上手だけど何故か女言葉の巨漢外国人』と世間に
見られていても、ブロントさんにさえ私が分かればいい。」

神裂は突如笑顔を崩し、ブロントさんを睨む。

「Z塩得るフォールがどうかはわからにいがそるならば

何故お前はそんなに怒ってるんですかねえ…?」

ブロントさんの言葉に更に神裂は顔に影を落とし、肩を震わせた。

「――なかった」

「…e?」

「私だけ、旅行に呼ばれなかった。」

「?お前が何を言っているのか――ッ!バックステッポォ!!」

神崎は顔を上げ、再び顔に憤怒の炎を灯すと『七閃』を飛ばし、ブロントさんがそれを察知してバックステップを踏む。

着地して自分が立っていたところを見ると、そこには綺麗に七つの線が地面を抉った様な傷を作っていた。

「おおお落ち浮くべき缶裂!切じうゝに落ち着いテ!!」

「あの二人はいたのに!私だけ!私だけ除者にした!!」

「落ち着けといっているカンザキ!お前を野獣にした訳じゃないからいかレスひふようです!

とpまも土みArk門も避難してないで助けてゝ;」

「持てる男は辛いですねー爆ぜろ!!」

「持てる男は辛いにゃーそんな羨ましい男を見ると三十発位殴ってやりたくなるぜい!

でも危ないから避難避難だにゃー」

避難した二人に呪詛と非難を浴びせられ、結局ブロントさんは
神裂が疲れるまで攻撃を避け続ける羽目になった…。

第三十八話：何だいきなり発動してきた>>>エンえなるほうル

「…えーと『御使堕し』っつー魔術が俺を中心に発動しててお前がスパイで魔術師？」

「ま、そんな感じだにゃー」

当麻は現在、砂浜の淵にある堤防ブロックの影でブロントさんと神裂が

デス☆レースを繰り広げているのを観戦しながら一緒に避難している土御門の話を聞いていた。

今朝からの不可思議な現象はどうやら『御使堕し（エンゼルフォール）』という

魔術の副作用的なもので、皆の『外見』と『中身』が入れ替わっているらしい。

今はまだ副作用の段階だが、完成すれば物凄いことになるという。

そして当麻の隣人土御門元春が、魔術結社『必要悪之教会^{ネセサリウス}』の一員、つまり魔術師だということ。

学園都市の動向を探り情報を集める、いわば盗聴器だと土御門は言った。

「…お前が魔術師って、からかってる訳じゃねーよな？」

「神裂ねーちんと一緒にいるのが証拠ぜよ。

そもそも学園都市の外にすることがおかしいと思わないか？」

朝から色々な事がありすぎてパンク寸前の当麻の頭でも、土御門が魔術師ということとは理解した。

だが隣人土御門のイメージが崩れることはない、例え魔術師でも土御門は土御門だと、そう割り切れてしまうという事が一番恐ろしい事なのだが。

「こっちの事は置いて、この魔術を一刻も早く止めないとカミヤんは世界中の人からお命頂戴だにゃー」

「……………え？」

「そりゃ歪みの中心にいて無傷なカミヤんが一番怪しまれるぜよ」

「…不幸だ」

当麻は叫ぶ気力すら根こそぎ持っていかれ旅行先ですら不幸なのか、と膝から崩れ落ちた。

「一方その頃」

「今止まるなら半殺しで許してあげますから止まりなさい！」

「半殺しとかsyレならんしょそれは！？話し合うをするという名案を聞き入れる気はないのpか！？；」

「半殺しにした後なら聞いてあげます！」

「おいイイイイ！？」

二人はチーターも驚きな速度で砂浜を三十分間走り回ったという
…。

「はぁ…一体何処だよ此処…」

その男は月明かりに照らされた堤防に立っていた。

暗い夜の闇に溶け込むようなその格好とその冷たい雰囲気、
茶髪の髪と顔に張り付くような新聞などでよく見る黒い目線、
その格好を見れば誰もが言うだろう

不審者と。

「…リンクパールも通じねえ、いつそシャウト使ってみるか…？」

いいや駄目だと男は呟くと、すぐ近くにある旅館に気付く。

「宿屋、か。酒場じゃねえのが少々残念だが情報収集から始めてみるか」

男は渋々とその宿屋に足向け、暗闇を掻き分けるように素早く怪しく進んでいった…。

第三十九話：仲良く喧嘩するという名ゼリフを知らないのかよ

「NPCもいねえとか：なんなんだよ此処、廃墟か？
にしては話し声とか聞こえたが：」

入り口に行っても誰もいなかったので、仕方なく色々と
歩き回ってみることにした。

上の方でチャットしてるらしき声が聞こえたし、
明かりも見えたから無人という訳ではなさそうだ。

その者達に話を聞いてもよかったが、NPCに聞いたほうが重
要な

情報が聞けそうだと男は判断した。

「大体なんなんだ此処は？MAPも反応しねえ、こんな和風な場所
見たことねえし聞いたこともねえ」

本でできた古い床は歩くたびにギシリ、という嫌な音をたてる。
その原因はただの床の耐久力の無さ、そして――

――男が両腰に差す、二本の片手刀にあった。

「はあ：つと、部屋発見」

しばし廊下を歩いていると、殆どが曇りガラスでできた扉を
発見する。

よくよく見るとシルエットが見えたので、人がいることを
確認できた。

男は躊躇無く扉を開ける、別に扉を開けることに躊躇なんてする必要が無いのが『ヴァナでは』当たり前なのだから。

さてここで話を一つ、此処の小さい海に近い旅館の風呂には男湯、女湯などの概念は存在しない。

男が入っていれば男湯、女が入っていれば女湯になる。つまり何が言いたいかというところ――

――扉を開けた先にいたのは、【描写できません。】状態の神裂だった。

数秒、十数秒の沈黙、互いに見つめあう。

神裂は無表情で刀に手をかけ、男は頭が混乱して何がなんだか分からない状態。

不意に男に寒気が走る、目の前から尋常じゃない殺氣を感じ取ったからだ。

「ちょ、ちょっとまって！アンタが何者か知らないが覗いてしまったことは謝る！だから落ち着け！！」

「∴問答無用！」

（やべえ！話を通じねえとなると、とりあえずは空せm）

空蟬を発動するのにかかる時間は1.5秒、その間に

神裂の黒い鞄が、男を一閃した。

ゴキリ、ベキベキ、グチャツ、と明らかにおかしい音が男からした瞬間、男はガラスを突き破り旅館の中庭を数メートル転がる羽目になった。

現在ブロントさんは土御門と当麻とともにインデックス達とは別の部屋に泊まっていた。

インデックスたちに適当な説明をつけ（ブロントさんが）巧みな話術で何とか騙すことに成功した次第である。

土御門が「ねーちんの入浴除きに行こうぜいっ!」と突撃をかけようとしたところを現在縄で雁字搦めにしてある。

にゃーにゃー喚く土御門をスルーして二人でトランプ（ポーカールなど）をしていると、なにやら大きな音が風呂場から聞こえた。

大きな音といっても一番中庭と風呂場に近かったこの部屋ぐらいいしか聞き取れないような音だったが、当麻を狙ってきた魔術師が襲ってきたのかもしれない。

とりあえず土御門を放置し、急いで神裂の元へ向かう。

「監査機！大丈夫でFA!？」

駆けつけた所にいたのはバスタオル一枚で刀を握り締めなにやら周りをきよろきよろとしている神裂。

風呂場の扉は崩壊しており、中庭はなにやら砂埃で見えない状態になっている。

バスタオル一枚の神裂の姿に思わず当麻が顔を背けるが、
ブロントさんは構わず神裂に駆け寄っていく。

そのブロントさんに気付いた神裂は慌てて風呂に駆け込んだ。

「だ、大丈夫！大丈夫です！！ですからこっちにこないで下さい！
」

とりあえず神裂が無事だったことに安堵したブロントさんは、
中庭の土煙の中にある人影が動いている事に気づいた。

「そこにいるのは分かってるんだが？早く出てこないと
お前の人生が裏世界でひっそりと幕を閉じる！！」

ピタリ、と人影の動きが止まる。

ブロントさんが人影に殴りかかろうとした瞬間服を着終わった
神裂が叫ぶ。

「ブロントさん！ソイツは私が女であることを分かっているように
した！

もしかしたら『御使堕し』の術者かもしれません！」

ブロントさんが再び人影の方を向く、人影は依然止まったままで
動く気配が無い。

「出てきなさい！『黒ずくめの目線男』！！」

神裂の怒号に今度はブロントさんが硬直する。

人影とブロントさんが不自然に止まり、徐々に土煙が
風にとばされ晴れていく。

黒い忍装束、茶色の短髪、両腰の刀は鬼哭と秋水。
そして何よりもその不自然な目を隠す目線、それは明らかに

「…忍者!?!」

「ブロントオ!?!」

ブロントさんのLSメンバーにしてメイン盾ライバル、
汚^{きたな}い忍^{にんじや}者だった。

第三十九話：仲良く喧嘩するという名ゼリフを知らないのかよ（後書き）

感想で色々と忍者の名前についてありましたが、
結局汚い忍者、ということにさせていただきました。
ご意見等ありがとうございました；

第四十話：忍者は勝手に俺のPTメンになる

宿の窓から漏れる光に包まれた汚い忍者とブロントさんが同時に名前を呼び合い、

互いに相手に向けて走り出す。

砂利を蹴る音と木の板が悲鳴を上げる音、二人は相手を見る。

当麻はふと、違和感を感じた。

ブロントさんは異世界の住人だと言っていた、その言葉に嘘はないと

過ごしていた中でも理解してきた。

そんなブロントさんにこの世界で久し振りに会う知り合いなどいるはずが無い。

と、なるとあの男も異世界の住人か？

色々と考えが浮かんだが、とりあえずまずはブロントさんとその知り合いの

感動の再会シーンを見守ることにした。

いきなり異世界に放り出されたブロントさんは表立って寂しさや不安の感情を

人前に見せなかったが、そんな感情を感じないなんてことは絶対無いはずだ。

きつと感涙極まって知り合いと再会を果たすのだろう。

———そう思っていた時期が、つい先程までありました。

その幸せハッピーな幻想は、ブロントさんがその男と取っ組み合
いを

始めたことによってぶち壊された。

「な・ん・で、テメエがココに居やがるんだブロントオ!？」

「それはこっちのセルフなんだが人の台詞取るのは犯罪だぞ
汚いなさすが忍者きたない」

両者が踏ん張るとガリガリと足元の砂利が削れ、いつの間にか浴
衣から着替えた

ブロントさんの鎧と忍者の忍装束が月光を反射し淡い光を放つ。

そしてそれが目立たなくなる位の光が二人の目の間から電撃オー
ラとして

輝いた。

何時までもいがみ合っている二人を神裂と当麻が引き剥がし、
土御門を放置してある部屋に入る。

適当にテーブルを五人で囲み、色々と二人の関係と

やはりこの世界に放り込まれてしかも数時間もたっていない忍者に
事情説明することになった。

汚い忍者、ブロントさんのLSのメンバーでメイン盾ライバル、
ブロントさんとの関係は『腐れ縁』らしい。

実力はブロントさんにギリギリ劣るレベルだが、それでも

ヴァナではトップレベルの廃人だそうだ。

ちなみに名前の汚い是不潔とかそういうのではなく、色々とやり方が『汚い』らしい。

次にこちらの世界の説明だが、意外とすんなりと受け入れた。曰く、『ヴァナじゃ異世界なんか大して珍しくねえ』との事。

「そういえばどうやって忍者は此処に着たんですかねえ？」

「あ？モグハウスで寝てて気付いたらここに居たんだよ」

「ほうおるのトキとはまた違うのかと驚きが鬼なる」

「で、帰る方法とかなんか手がかりはねえのか？」

「あったらとくに試してるだろうなまあ一般論でね？」

二人は色々と情報交換をした後、ため息をつき二人とも後ろに仰向けに倒れる。

表情から察するに、状況はあまり芳しくないようだ。

「で、忍者さんはどうすんだ？」

「：しばらくブロントと行動して様子を見るか。

あえてブロントと全く違うトコで情報収集するのもいいが、まずはこの世界を知らねえとな

あとさん付けはやめてくれ」

忍者は当麻にヨロシクと軽くお世話になる宣言をし、『もう寝る』と

言って床下に潜り込んだ。

その後、当麻はいまだに縛られている土御門の隣に寝そべりながら

「…そういや忍者、IDはどうすんだ…」

と考え、旅先でもこんな事に悩まなきゃいけないのかと
深いため息をついた。

第四十一話：言葉よりも暴力が先に出る事もたまにマジである

深夜、月明かりに照らされる薄暗い部屋でブロントさんと忍者がちゃぶ台を挟んで向かい合って座っていた。

ヴァナ人にとって睡眠とはただのステータス異常であって必要なものではないので、徹夜もなんのそのだ。

隣では当麻が鼾をかいて寝ている、何時敵に襲われるか分からないこの状況で暴睡できるその頭は（本人はまともと思っているようだが）

ネジが数本抜けているのではないかと思う。
対する神裂と土御門は一応警戒のためにと警備中である。

何故二人がこんな時間（大体丑三つ時の半ば）に起きているかというと、

忍者が寝ていたブロントさんの布団をはがしてたたき起こしてこの世界のことをいろいろ教えろと言ってきたからだ。

：ちなみに睡眠時間は九時間でいいと二度寝しようとしたブロントさんに

忍者が本気で蹴りを入れて逆に悶絶したことも明記しておく。

古びたちゃぶ台の上には沢山の図が書いてある紙が窓から吹く風にがさがさと音を立てている。

一応グラットンで重石をしているので飛んでいく事は無い。

「魔法と科学、学園都市にイギリス清教、しかも現在起こってる

『御使墮し』：また厄介なトコに呼び出されちまったもんだな」

「裏世界じゃない完全な異世界だからな更に追撃の情報ぜろで
ヴあんあに帰れる可能性は更にマッハ；」

「泣き言いってても仕方ねえだろうが、とにかく俺たちは
早くヴァナに帰らなきゃならねえんだ、メイン盾が二人不在じゃ
特にベヒーモスなんか狩れやしねえしな」

ちやぶ台に突っ伏しているブロントさんにチョップをかました後、
忍者が軽いため息をつく。

窓の方に顔を向ければ現在が（忍者の記憶が正しければ）
水曜日にも拘らず月が黄色く輝く事で、また自然と
忍者の口からため息が漏れる。

仰向けに倒れこみ、このまま寝ようかと考えた。

「ん？」

ふと瞼の向こうの光が弱くなったことに気付く。

うつすら目を開けてみると窓の淵に赤い物体がある。

更に目を開けてよく見ると、それが少女であると分かった。

恐らく歳は十三歳程度、髪は金髪でウェーブがかかっていて、
細い髪の一本一本が月に照らされ輝いている。

前髪に隠れて目は見えないが、雪のように白い肌と整った顔立ちで
かなりの容姿であることは十二分に分かる。

だがその美しい容姿と反比例するかのように身に着けているものは

『異様』だった。

格好は普通修道服の下に着るインナースーツと黒いベルトの上に赤い外套を羽織っただけ、体の所々には拘束具が付いていた。

ベルトには金属ペンチや金槌などの工具が刺さっている。

少女はきよろきよろと首だけを動かして部屋を見ると布団で寝ている当麻の方に近づいていき、枕元に立つ。

「オイオイ、客にしちゃあ随分マナーが悪いな」

「「確かにあ尋ねてくるのは勝手だがそれなりの仕方があるでしょう？ 一体何の用か答えるべき」

当麻を見下ろしている少女の首元に左右から刃が光る、フロントさんのグラットンと忍者の鬼哭だ。

そんな状況でも少女は動じない、まるで人形に刀を突きつけているような気分だ。

「解答一。私は『御使墮し』阻止のためにここまできた。そしてこの少年が犯人か否かの解を求めようとした」

少女は二人の方に振り返ると淡々とした声で告げる。

全く感情のこもっていないその声はまるでなにかの音声ソフトで打ち込んだ文字を再生した様。

歳不相応のその感情を打ち殺した雰囲気

に部屋

の空気が凍りつく。
「…で、確かめるってのはどうやってやろうとした？
まさか殺して解けるか試そうとしたわけじゃねえよな」

忍者が本気の殺意を向けようとも、少女は全く動じない。

夜風に靡いた髪の間から見えたその瞳はまるで

人と向き合っているというよりも人を観察している、
そんな表現が正しいだろう。

「：神ザキ達を読んできから忍者はそのまま待っていることが
必要不可欠待ってろ」

ブロントさんがカカツと神裂と土御門を呼びに行くと

忍者と少女だけ（寝ている当麻は除く）の空間に
静寂が訪れる。

忍者は何時少女が仕掛けてきてもいいようにと
軸足に力を入れ、構えていた。

机の上の紙が風に吹かれふわりと宙に舞うと
ゆっくりと忍者の足元に着地する。

不意に少女の腕が動いた。

忍者がけん制しようと軸足を動かすと、思いつきり
下の紙を踏みつけ、バランスを崩す。

しかも少女に向かって踏み込もうとしていたので
体重は全部前にかけてある、したがって忍者の身体は
少女の方へと倒れこんだ。

慌てて起き上が

「忍者！呼んできたんだg」

る前にブロントさんが部屋に突入してきた。
もちろん呼んで来た神裂達も一緒だ。

「な、なんだ？どうしたんだ？」

勢い良く扉が開かれたのとブロントさんが叫んだことで
熟睡していた当麻も目を覚ます。

横を向けば幼い少女に覆いかぶさる黒い影。

問題…この状況は寝起きの人間、及び突入してきた人間には
どう映るでしょう？

模範解答…ロリコン、変態、ド畜生

「ま、待て！誤解d」

忍者には二回目の黒鞘とグラットンの峰が忍者を一閃し、
拳が忍者を吹き飛ばした。

忍者は「まただよ（泣）」と叫びながら窓を突き破り、
暗い闇に沈んでいった。

第四十二話：理破壊とかマジ震えてきやがった怖いです；

時と場所は少し異なり、ヴァナディールの世界の昨日の夜の出来事。

ここは『ウインダス連邦』首都『ウインダス』のとある地区。

何故か水で満たされたその地区は、高く聳える大樹の中に作られた神殿を囲むように複数の建物が配置してある。

その地区を歩く小ささ：人影が一つ、そのタルタル族の少Z Y：淑女は

土曜日の月に照らされ美しくライトアップされていた。

風に揺れる短い金髪に少し黒味のかかった肌、それは正に一つの絵の様に完成された芸術だった。

：遠目で見れば、だが。

その全身から溢れ出す威圧感にはバハムートも慌ててとんずらする様な

凄まじさで、スカウターで計ればどこぞやの戦闘民族も真っ青になるだろう。

彼女の名はシャントット（Shantotto）、ウインダスを代表する

三博士の一人にして、通称連邦軍の黒い悪魔。

多分ヴァナディールで最も恐る：強くて美しい黒魔道師。

「……ここですわね、魔力の乱れの原因は」

シャントットはここ『ウインダス石の区』にある扉、『水呼びの扉』の前に来ていた。

扉の前には白く光る大人ガルカほどの大きさの球体があり、回転しながら光り輝いていた。

「まさか空間自体が捻じ曲がってるなんて、全く持って面倒ですわ」
やれやれと言った具合に両手を横に広げると、シャントットは杖を取り出し何かを呟くと光に向けて振るう。

だが光は形を歪に変化させただけで、消えはしない。

「あら、わたくしが此処まで足を運んで差し上げたと言うのに
たかが光如きがナマイキですこと。…えいっ！」

再度シャントットが杖を光に振るうと、光はどんどん形を崩していく。

だが光は消える寸前で輝きを取り戻し、形を整えていった。

ぶちり、とシャントットの何かが切れる。

その表情は般若の如く、そのオーラは魔王の如く。

「……ぶっ壊す！」

何かを唱えて再び杖を光に振るうと、光は赤黒く変色し湾曲し爆発した。

余波で近くにいたカーディアンが吹き飛ばされ、扉にぶつかりボタンと倒れる。

「オーツホツホツホ！わたくしに面倒をかけるからこうなるんですわ！

…ところであの光、一体何処と繋がっていたのかしら？
まあわたくしには関係ありませんわね」

シャントットは興味を失ったようにスタスタとその場を去っていく。

不意にビキリ、と何か大事なものが壊れたような音が周囲に響いた後、
光のあった場所には静寂が訪れた。

第四十三話：当麻の無罪決定　まあわかった（予知夢）

「はあ…」

砂浜まで顔面パンチでぶっ飛んでいった忍者は、一人仰向けに砂に身体を預け

ため息をついていた。

砂浜に突っ込んだ衝撃で舞い上がった砂が重力に従いぱらぱらと忍者を

包み込んでいく。

「…くそっ、聞いちゃいねえ」

先程から『あの事』について弁明しようとブロントさんに裏テルを何度も送っているが、返ってくるのは「汚いな流石忍者きたない」ばかりだ。

再度ため息をつき、痛む身体に鞭を打って身体を起こす。

が、砂に手を滑らせて再び地面に倒れこむ。

月明かりに照らされ、忍者の頬の一筋の線が光った。

特に何もすることが無く、何の準備もなしにあの場所に戻るのは危険だと判断し、ブラブラと浜辺を歩くことにした。

空に瞬く星も、輝く月も、モンスターが歩いていない浜辺も、

モンスターの湧いていない空も何もかもが違和感に包まれている。

第一にヴァナではこれほどまでに整えられている場所など町以外には

殆ど無いだろう、そしてそれが一番の違和感となって

頭の中にイライラとした感情を象っていた。

フラフラと堤防の階段を上がり、上から二段目に腰掛ける。

何もかもを忘れて星でも眺めるか、と自分でもらしくないと思う
台詞を

ポツリと眩き上を見上げると、輝く星空にポツリと黒い空間があった。

星が少ない、と言う問題では無い。

頭上を埋め尽くす星を一部だけ丸く切り取ったかのように、

そこだけが『何も無かった』。

その黒い空間は良く見ると、どんどん広がっているように見える。

「…なんだありゃあ」

自体が飲み込めずゆっくり立ち上がり見上げていると、

輝く星の一つが更に強く光り

落ちてきた光が、忍者を飲み込んだ。

暗い室内で四角いテーブルを囲むように座る人影が五つ。
それぞれがなにやらあまりよくない表情で黙り込んでいる。
胡坐をかいてテーブルに頬杖をつき、金髪の赤いシスターを
睨みつけるブロントさん。

状況についていけずに周りの顔色を伺う当麻。

やや顔をしかめながら目をつぶって正座をしている神裂。

いつも通りのにやけ顔、土御門。

そしてちょこんとブロントさんの向かい側に無表情で座っている
赤色のシスター。

図解すると

ブ□□土

当□□シ

□□神

(…気まずい)

誰かなにか話してくれよオーラを出しながら当麻が
隣にいるブロントさんに視線を向ける。

ブロントさんは当麻の視線に気付くと、沈黙を破った。

「お前は一体何もなんでFA? << a k a i n o
その装備からして恐らくジョブはシスターだろうが
あくん裂達の仲間には三重ないが」

ブロントさんが問いかけると、それに答えたのは
赤いシスターではなく、神裂だった。

「ああ、彼女は敵ではありません。

おそらくロシア成教の者でしょう」

神裂がちらりと横のシスターに目を向けると、シスターは微動だにせず ゆっくりと言葉をつむぐ。

「ロシア成教『殲滅白書』、ミーシャルクロイツェフ」

「『ロシア成教?』」

当麻とブロントさんが同時に初めて聞く単語に首をかしげる。

すると土御門が

「ロシア成教はイギリス清教と違って『幽霊狩り』に特化したって感じにゃー。『あらざる者』専門のゴーストバスターズって所ぜよ」

と説明してくれた。

改めて二人は少女の方を見る。

当麻はなにやら疑る様な目つき、ブロントさんは「ほう…」と少女の力量を調べる様な感じだ。

「ゴーストって幽霊のことだろ? んなもんが本当に――」

当麻の言葉はその瞬間、喉に詰まるように発せられることを拒否した。

気が付けば当麻の首にノコギリの刃が押し付けられている。

近くにいた神裂や土御門さえ反応できないほど早く、躊躇や迷いは一切無い。

唯一警戒していた為反応したブロントさんは立ち上がり再びミーシャの首元に向かってグラットンで斬りかかったが、ミーシャの引き抜いたL字の釘抜きに受け止められる。

「問一。『御使墮し』を引き起こしたのは貴方か」

ミーシャの口から出る声は、当麻の首に当てられたノコギリの刃を連想させるほど、鋭く冷たい。

あまりの咄嗟の出来事に神裂や土御門さえ混乱している様子だ。

「oiどうやって超魔が犯人って証拠だよ
当麻が犯人でないことは明瞭に明白の事実」

ブロントさんがミーシャを睨んで言うと、ミーシャは首をブロントさんの
方向へ向ける。

「問二。それを証明する手段はあるか」

「そもそも逢魔は科学側なんですけどね？ しかもそんなことした所で
妖魔が得することはいない
お前は豹馬を犯人としているが証拠が無いあるなら出してみろよ
出せないなら剛間は無実で潔白だろ」

ミーシャは再度当麻を見ると、十数秒間ほどジロジロと
眺め、聞こえるか聞こえないかぐらいの大きさのため息をつく。

「私見一。確かにこの少年がこの高位術式を完成させるほどの
知識を所有しているとは思えない」

「いきなり失礼だなオイ!!」

ミーシャの言葉に青筋を浮かべている当麻に、神裂がため息をつきながら問う。

「上条当麻、天使の長であったルシフェルが墮天した際に起こった大戦で

ルシフェルを打ち倒した天使の名を答えなさい」

「…は？」

「答えなさい」

いきなりの問いに混乱した当麻は、しばらく沈黙した後

「……………エンジェル」

その空間が凍った。

「…固有名詞ですらないんだが」

こうして無事当麻の誤解は解けたが、当麻はある人物に続いて頬を光らせたという。

第四十四話…もう物語信仰してるからかなり危険

突き破られた窓から吹かれた風によって揺れたカーテンの間から差し込んだ光が

顔面に降り注ぎ、珍しく当麻は早く目を覚ました。

夏後半と朝っぱらから太陽は嫌に自己主張をしており、海の近くにもかかわらず

蝉の大合唱が耳を通して頭に響く。

少しボーっとする頭で周りを見回すと、既にブロントさんは目を覚ましているらしく

布団が部屋の隅に綺麗に畳まっている。

持参した学園都市では珍しい針の時計に目を向けると、七時二十分を示していた。

普段からこんな時刻に起きていれば学校も遅刻しないのになーとどうでもいい事を考えながら体を起こし、フラフラと部屋を出る。

廊下を歩いていると不意に後ろから

「あ、とうまだ」

と、何というか無気力そうで、どこか凜とした矛盾をあわせ持つ男の声がかけられた。

ギリギリと後ろを向くと当麻の身長を軽く越すであろう緑髪オールバックの

変も…シスター服の男がいた。

寝起きなのかオールバックの髪は所々乱れており、ぼんやりとした眼を

ごしごしと可愛らしく(?)擦っている。

三十秒間くらい軽く硬直した後、無理矢理笑顔を作って

「お、おうインデックス」

と挨拶した。

そういえばそうだった、と当麻は心の中で絶叫した。

そのシスター、インデックスもといアウレオルスはもう一度目を擦った後、

「ブロントさんがご飯頼んでくれたよー」と言い歩いていく。

再び数秒硬直した後、当麻は覚悟を決めてその後を追った。

「唐間か今日は早いなと感心が鬼なる早置は三ギルの徳という名台詞もあるからな」

憂鬱な気分で部屋の中に入ると、そこにはブロントさんが部屋の奥で胡坐を掻いていた。

自分と同じ立場に置かれているはずなのに、しれっとその場に馴染んでいる。

「ご飯。もう並んでる」

ブロントさんの隣から掛かった声の方向を見ると、巫女服一方通行が

無表情で正座をしながらこちらを向いていた、やはり怖い。

というか普通に睨まれるよりも無表情の方が怖いんじゃないかと思えてきた。

「早く座ってはどうでしょうか？」とミサカは空腹を訴えつつ

立ったまま首しか動かさない貴方を急かしてみます」

その反対側のブロントさんの隣では御坂妹がいた、やはり何かが違うのだが、

眼の輝きとか頬の色とか？違和感程度の違いだ、流石クローン。

いそいそびくびくと空いている席に座ると、ブロントさんが手を合わせる。

それにつられて全員も手を合わせた。

横から掛かるインデックス（ryの言葉に精神ポイントを削られつつも、

ようやく食事を終えることが出来た。

はぁ、とため息をつくブロントさんが軽く手を叩きみんなの注目を集める。

「俺からの意見だが今日は海ではなく町に行こうという意見

」「確かに海も楽しいが望見者にとって新MAPに付いたらエリアを一通り回るのは初歩中の基本」

要するに学園都市を折角抜け出したんだから、外の様子も見て回ろうぜと言うことらしい。

良くわからなかったが周りからも特に否定の声は上がらなかった
ので

街を歩き回ることにした。

着替えをする為にブロントさんと共に先程の部屋に戻る。

頭を切り替えるために軽く伸びをしていると、横でブロントさんがよろめいて壁に思いつきり頭を強打した。

それでもひびが入ったのはコンクリートでできた壁のほうだった

が。

「え!?! ちょっと、大丈夫かブロントさん!?!」

「今日海に行くハメにならなくて良かった(リアル話)

mじでsyleならにい頭がおかしくなって死ぬところだった;」

え?と当麻が間抜けな声を出すと、ブロントさんはため息をついて

「おいィ?おもえは今のあいつらの姿で水着を着るれたらどうなるか普通の血の通った人間なら分かんと思うんだが…」

…そういえばそうだった。

今のあいつらの格好は一方通行、アウレオルスIIイザード、御坂美琴と

見事に知り合い+カオスな面々である、しかも二人男。

御坂とミサカ妹の入れ替わりはともかくインデックスとアウレオルスとか、

姫神と一方通行に到っては本当に洒落にならない。

その姿で水着なんか着られた日には一瞬でトラウマになること確定である。

「…ブロントさん、グッジョブ」

「ナイトだからな」

「…あー、死ぬかと思ったわ。
かけてて良かったリレイズ、っと！」

堤防に横たわっていた身体を無理矢理起こし、よろけそうになるが
何とか足を踏ん張る。

時刻は既に朝になっており、遠くを見ると既に何人かの人影が見える。

宿からも街からも少し離れている所為か、自分の姿は誰にも発見
されていないようだ。

（あいつらに見つかったらやべえよな…誤解を何とか解きてえが、
まずはほとぼりが冷めるのを待つほうがいいか）

スツと堤防を浜の方に降りて適当な物陰に身を隠し、空腹なので
冒険者用の腰に掛かっていた
バッグに入っていたちくわに齧り付く。

少し朝食には物足りないが、美味しいのでよしとする。

「どうすっかな…」

呆けた様に海を眺めながら蟹いねえかな〜とか思っていると、向こうから

妙にきよろきよろしながらこちらに近づいてくる者がいた。

「あの赤い服…昨日の奴か」

「まさかこんな大規模な問題だったとはな…」

金髪の髪を荒くかき回しながら土御門は舌打ちをする。

木々に囲まれた林には人氣が無く、くもの巣のような糸が林中に張っていて

日光を鋭く反射し光り輝いていた。

その中心には魔方阵の描かれた紙がいくつも敷いてあり、それぞれが

円の中心に図形を作り出している。

「世界全体が儀式場…道理で見つからないはずだ。」

こりゃ入れ代わりとか天使の席とか、『そんなちっぽけな問題』
じゃない…

下手をすれば『世界が滅ぶぞ』、くそつたれが…!」

第??話…次話投稿かと思ったか？まだだよ（涙）

h a i ! ごめんなさい刻等パンでう s ;

現在えbんぜるホール辺で苦戦しており恐らく次回は明日くらいになりそうです；

すみませんがこの小説について突然ですがアンケートをとりたいと思います。

心が寛大な人は感想で答えをお長居します（懇願）

質問その一…この小説の終わりが見えない不具合

A. 適当にその辺で打ち切ったらいと思ったまあ一般論でね？

B. g d g d でいいから続けるべき死にたくないなら相すべき

質問その二…作者のオリ日常辺だがちよとこれは…

A. カットしてすとんい rーを進むろ！

B. やり焚きややればいいだろホラこんなもん

質問その三…おいィ？ナイトのフラグ率が…

A. とん馬にもフラグを柚子らないとかいうその浅はかさは愚かしい

B. やばい騎士の宴だ！
ハーレムオブナイト

質問その四…忍者のフラグ？

A. ナイトにフラグが立てれて忍者にできねえ訳ねえだろうが！

B. 忍者にフラグとかいりませんストレスたまるので^^；

質問その五…忍ブロ？（友情話）※答える必要なし

A. ほう…よかろう、全力で支援してやる。

B. レジスタンスの結成をする時が来たようだな…

第四十五話：最強の義務が最凶のプレッシャーぬんっておsってきた

現在、五人は町を歩いていた。

しかし学園都市の科学力が数十年先を言っているにしても、この町は少し遅れすぎなのでは、と当麻は思う。

海から近いので、海鮮市場が盛り上がっているのはまだ良い。

が、そこらを見渡せば小突いたら原形を保てず崩壊しそうな色をした

木でできている駄菓子屋や、暖簾のかけられている江戸時代を髣髴とさせるような見た目の織物屋など、良く戦火を耐え抜けたなど

思える建造物ばかりだ。

いや、当麻が幼い頃から既に学園都市に送られて生活してきたからそう思えるからかもしれないが。

しかし他の四人はそんな事はちっとも気にして無い様で。

ブロントさんとインデックスはさっさと走って行って近くの団子屋で

みたらし団子と餡子団子に嚙り付いているし、姫神とミサカ妹は近くのアクセサリー店で髪留めを見ている。

これで姿が入れ替わっていないければな、と切実に考えたりもする。

「はぁ…不幸だ…」

「旅行先でまでため息つくとかs yレならんしょそれは？」

団子食うかみたらし団子が美味いぞもちもちの団子にみたらしが
備わり

俺の舌先が有頂天」

すっと出されたみたらしを受け取り、齧って団子を串から一つを取って

口に入れると、程よいみたらしの甘さが口の中に広がった。

「あー、旅行先でもやっぱ不幸なんだなーって思ってたさ。

このみたらしの甘さぐらいの幸福なら噛み締めておこうと…」

「缶類の涙を流しているのは勝手だが道の真ん中だと不審者扱いされるから

サイドステップするべきそうするべき（注意）」

直立の姿勢で目から涙をこぼしている当麻の首元を掴んで道の端っこに連れて行く。

団子屋を見るといまだに通りに沿っておいてある長椅子に座って餡子を口元につけながら団子を頬張っているインデックスもとい錬金術師の姿があった。

椅子の横に積み重なっていく皿をちらりと見て、再びため息を一つ。

「ああ心配するなあれはおるが払っておくから別に心配しなくてもおk」

「…はは、その優しさで上条さんの体中の水分が枯渇しそうですよ」

「おいイ…いい加減に泣き止んでくれませんかねえ直立不動で泣きながら悟りの表情とかもう色イオと危険」

当麻はブロントさんの表現どうりの表情で頭上を見上げる。

青々とした空には薄い雲が三割位を占めていて、中々のいい天気と

いった所か。

夏真っ盛りだが朝よりも風が吹いていて少し暖かいという感じだ。
潮の匂いが鼻を突いて、思わず鼻を押さえようとして

不意に太陽が沈んだ。

は？と当麻が思わず口から出した言葉も、そこそこに喧しかった
蝉の鳴き声も

周りの喧騒も、パタツと止んでしまった。

空には、いきなり沈んだ為線を描いている太陽の残光が消えかか
っていて、

少しずつ星と月が瞬いてきている。

が、ある一点だけ天球に穴が開いたような黒い塊がある。

「…なんだよ、これ」

周りを見回せば、当麻と同じく啞然としているブロントさんと、
長椅子の皿を置いている反対方向に身を預けるように眠っている
インデックスもといアウレオルス。

かんざし屋の店内の鏡の正面の椅子に座って肩を預けあって眠っ
ている

ミサカ妹と姫神、もとい御坂と一方通行の姿もあった。

「ちよっ、待て！ストップ落ち着け！！」

砂浜に響くのは何か重々しい音。

そこにいるのは、暗くなっていく周りよりも一足先に黒に染まっている汚い忍者と、

それを見下ろすように宙に浮かんでいるミーシャだけだ。

ミーシャの背後には巨大な魔方陣、たくさんの魔方陣を集めて形を整えたようなものが浮かんでいて、それを切り裂くように七十メートルに届く五対の黒い翼があった。

黒い翼は忍者を潰さんとうねり、砂浜に叩きつけられる。

それだけで砂浜には大きな穴が開いた。

忍者はそれを右に避け左に避け跳んで避けしゃがんでは避ける。

「待て落ち着け話せば分かる！！昨日のは誤解だってマジで！日本語通じてんのか！？」

忍者が避けながら説得を試みているものの、ミーシャは聞く気なしとばかりに

黒い翼を振るう。

（なんだってんだチクショウ！空蟬使うか？だがこの世界じゃ紙兵の調達が

できねえ、風クリもねえから合成すらできねえ！

こんな事になるなら買い溜めしときゃあ良かった！！）

ひし形の塊が上から落ちてくる、大きさはダンプカー程か。

何とか後ろに避けるも、巻き上げられた砂すら波のように襲ってくる。

（こうなりゃやることは一つ！！）

「三十六計逃げるに如かず！！」

ミーシャを背にまさしく風の如く汚い忍者は逃げる。

当然黒い翼が真上から襲ってくるが、なんとか転がるように避けることで

致命的なダメージは受けずに済んだ。

（一体何がどうなってこうなってんだ！？昨日のことかそうなのか？それにしては殺気が籠り過ぎだろ！？

何故かは知らんが本気で殺すつもりだ！）

後ろを振り返りつつどんどん距離を離していく、幸いミーシャはその場を動かない。

（このまま逃げ切りや…！！）

突如、真横の海が爆発する。

大きく真上に跳ね上がった海水は、滝のように忍者に牙を向いた。

「はぁ！？くそっ、何でもありかよ！」

水の固まりは恐らくこの砂浜全てを飲み込むほどの量だ、跳んだ程度では避けられない。

そして何より量が量だ、夜空を覆うほどの量の海水は軽々と人間をミンチにする。

仕方なく空蟬を使おうと、忍装束の懷に荒々しく右手を突っ込んだ。

が、紙兵を取り出して空蟬を張る時間よりも明らかに水が重力に従い地面に叩きつけられる方が早い。

（くそっ！避けられねえ！）

この世界にはホームポイントは存在しない。

クリスタルも無いこの世界では、死んだら一体どうなるのか。

防御も無意味、回避も不可能、微塵などもってのほか。

爆発するほどの思考が脳裏を巡るが、考えられる全ての答えには自分の身を守るものは存在しない。

死ぬ。

黒い空は、忍者に押し迫って――

真っ二つに一閃された。

左右から響く耳を震わせる轟音。

跳躍した水が雨のように降り注いで、砂を引きずるように海に消えていった。

「間に合いましたか：怪我はありませんか、忍者さん」

汚い忍者の目の前に立つのは、Tシャツと片方を根元から切つてある

ジーンズを穿いた黒髪長髪の女性。

「：確か、神裂だったか？ 一体どうなって――」

「詳しい話は後です、向こうに土御門が待機しているはず。
ここは私が引き止めますので急いでください」

一瞬、その言葉を忍者は理解できなかった。

その一瞬にも黒い翼が二対、二人を狙って振るわれるが
神裂が手にしている二メートルはあろう長刀、『七天七刀』によって
全で一閃される。

279

汚い忍者は、幾度も人間を超える『化物』と相対してきた。
モンスター

キングベヒーモスなどのHNM、バハムート、カムラナートに
エルドナーシュ、挙げれば限が無いが、多くの化け物を倒してきた。
だがそれは多対一のPT戦のみだ。

忍者やナイトなどの前衛職はPT戦において真価を発揮するとい
っても

過言ではない。

だがそれは逆に言えばソロ戦では真価を発揮できないと言うこと
だ。

いや、そもそもHNMなどを相手にソロで戦うなどと言う
仮定からして間違っている。

間違いなくミーシャは人間ではない、人間だとしても普通ではな

い。

普通ではないのは目の前の神裂もそうだが、度合いが桁違いだ。絶対に、神裂はミーシャに勝てない。

直感、冒険者の直感で分かる。

殺されるはずだ。

だが、目の前の神裂は言い切る。

「行って下さい、戸惑っている時間すら惜しいです。

私が抑えられる時間も長くはありません」

勝てないと、自分でも分かっているのに。

それでも、刀を振りつつ神裂は微笑む。

目の前の状況はさっぱりだ、だが、頭の中で今もつとも

効率的な行動を忍者は弾き出した。

「…死ぬなよ？あの馬鹿の知り合いらしいから死なれると寝覚めが悪
い」

「ええ、問題ありませんよ。あの人が来たら少し手を貸してもら
う
やも

知れませんが」

それだけを言うと、忍者は走りだす。

後ろの轟音が響く時間を一秒でも短くする為に。

「きたか、忍者」

宿の入り口まで行くと、土御門が退屈そうに宿の表にある木のベンチに

足を揺らして腰掛けていた。

だがサングラスから覗く視線も声も鋭く、昨日の夜に自己紹介したときとは

ふざけた色が消えうせていた。

それだけ今の事態が危険だともいえるのだろう。

「さて、まずは今の状況から説明しなきゃならんか」

土御門は木のベンチから立ち上がると、夜空を見上げて言葉を繋ぎだす。

「この『御使墮し』、今尚も術者は不明だが原因と止める方法は分かった。

原因はアレだ」

土御門が指を向ける先には星空に開いた様な黒い点があった。だがそうと言われてもさっぱりだ。

「…何であんなモンがこんな事態の発端になんだ？」

「まあ、話しは最後まで聞くもんだぜい？」

：日本、ああこの国の名前なんだがな、いや他の国でもだが星ってのは昔っから人間を見下ろす未知なるものとして畏怖と信仰の対称になってきた」

「ああ？今から此処で歴史の授業か？」

「だから黙って聞け。天動説と地動説ってのがあるんだが、これは地球の周りを星が動いてんのか地球が回っているのか——宇宙を地球中心と見るか地球を宇宙の一部と見るかって違いぜよ」

「へえ、随分と傲慢な奴もいるもんだな」

忍者は軽くアイツを思い出す、と呟く。

「ああ、その中でも傲慢じゃない方、地動説ってのが今回の原因だにゃー。

地球を宇宙の一部と見て謙って全体の宇宙を神と崇める。

んで、その中でも分かりやすい星である月と太陽は星座よりも有名な

神の象徴だったって訳だ、有名なのは日本のアマテラスとツクヨミとかか」

「どんどんと話は忍者の分らないところへと進んでいく、だが一つだけわかるのは神と天使では話が結びつかないところだ。

「神様談義はそこまでだ、今の問題は天使の方じゃねえのか」

「重要なのはこっからだ、神の横に座る天使ってのがいてな、

神の横に座ることを許された大天使。

あの穴は月の、まあこっから見て下ら辺に開いてるだろ？」

土御門が目を向けた先を見ると、確かに此処から見て

穴は月の真下ら辺に開いていた。

「ああ、そうだが…それがどうしたってんだ」

「神に表現される月、神の横に座る天使、月の近くに開いた穴、さて、此処から表される意味は一体なんでしょうってな」

「…はあ？ おいまさか」

んなアホらしい事が、と呟こうとしたが

「残念ながらそんな感じだ、あの穴、いや正確には穴じゃないが、それが

開いたせいで天使の席を表す一部分が欠けちまってるんだにゃー。おかげでカバラの樹、種族の椅子はメツチャクチャのバラバラ。天使も堕ちて人間も入れ替わっててんやわんやってことですぜい」

両手を広げて語る土御門はいかにも楽しげです、と言う声を出すややはり目は笑っていない。

「…それで、結局どうすりゃいいんだよ」

「方法は二つ、一つはあの穴…正確に言えば空間の歪みをどうにかすればいい。

んで二つ目が…」

土御門はゆつくりと懷に手を入れ、引き抜く。

そこに握られていたのは、紙。

長方形で縦十二センチ、横四センチほどのその紙には真ん中に輪が描かれていて、その中には遠目で見れば蟻の行列にも見えるような漢字の羅列が綴られていた。

「現在、天使の席に着いている奴を殺す。

つまり――」

土御門は、あまりに冷めた声で

「忍者、お前に死んでもらうって事だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9498v/>

とある騎士【ナイト】の黄金鉄塊【メイン盾】

2011年12月19日14時50分発行